

318

503

0^m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10^m 11 12 13 14 15

始



呪はれたる陸軍

318-503

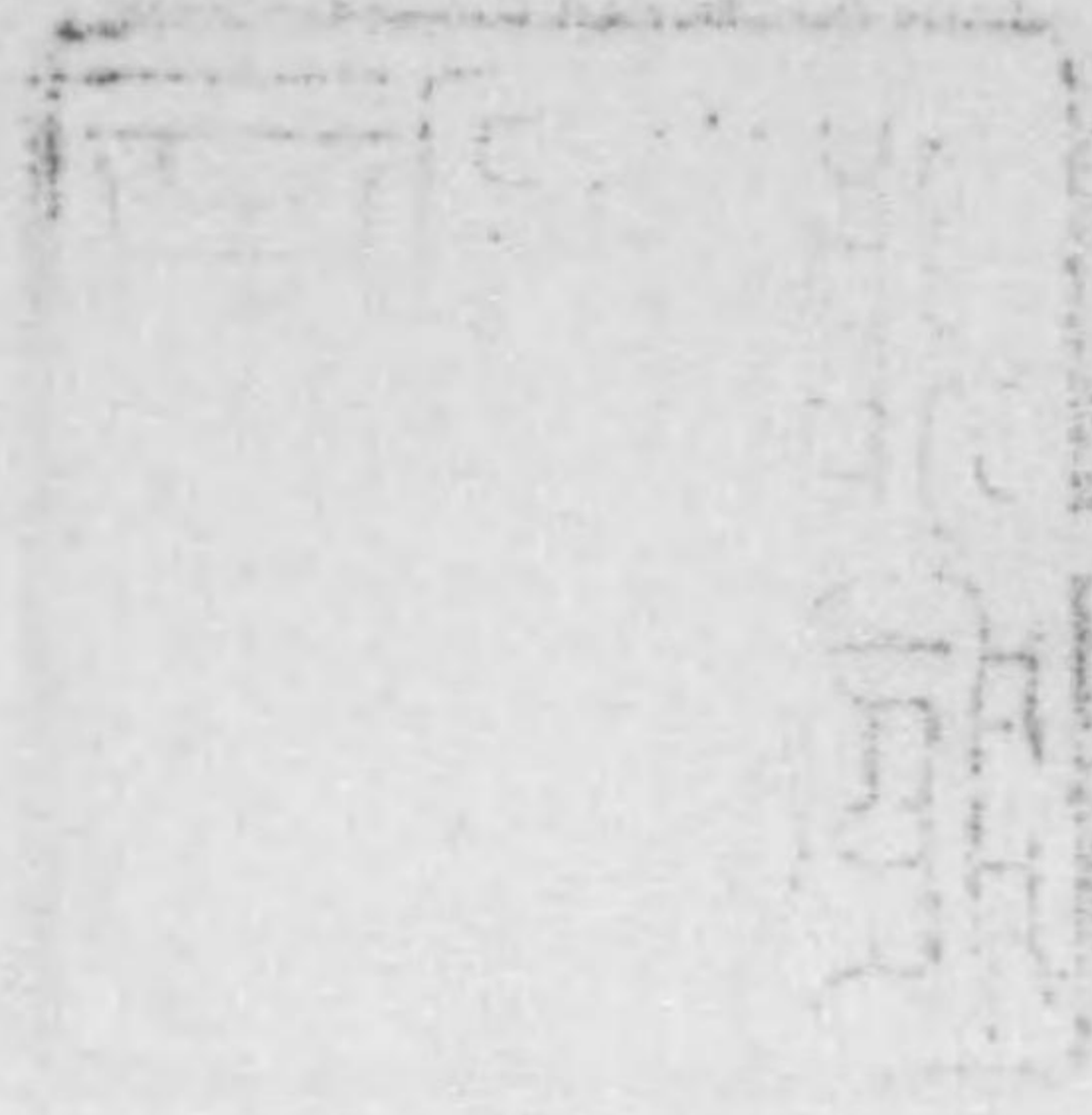


中尾龍夫著

呪はれたる陸軍

社論評本日
版 藏

大正
12. 3. 19
内交



自序

三宅坂の、舊彦根侯の屋敷跡には、いま参謀本部と陸軍省とが、巍然としてそり立って居る。其處は言はゞカーキ色世界の總本山だが、國民の一部からは夙に軍閥の巢窟と見做されて居る。果して軍閥の巢窟であらうか、夫れとも國民愛護の府であらうか。

本書は、軍閥と呼ばれる不入氣な其陸軍を、各方面から忌憚なく検討し、赤裸々な其正體を國民の眼前に、興味を添へてサラケ出したのである。従つて軍閥が若し本書を手にしたならば、恐らく彼等は、彼等を埋葬する吊鐘として、自から悲哀の聲を聴取るであらう。併し之に反して、若し軍閥以外の者が本書を繕いたならば、必ず其人達は、新陸軍誕生の第一聲として、例外なしに喜悅の色を浮べるであらう。知らず、軍閥の吊鐘か、新陸軍の誕生か。私はずっとこの呪はれたる陸軍及び軍閥に對し、公平なる讀者の批判を俟つ許りである。

私は、大正十年の初秋、『軍備制限と陸軍の改造』と題した一書を公にして、軍備の縮小、軍制の改革及び軍閥の反省を力説した。所が其後に開かれた第四十五議會では、衆議院の各

派が全院一致で、曩に私の主張した通りの軍縮建議案を可決し、陸軍當局も亦餘儀なく其一部を容れ、現に官製陸軍整理案の實行中である。併し天降り軍縮案には不徹底な點があり、軍閥の反省には何等認むべきものがない。尤も現役軍人中の、極めて少数な人々の間には、部内に蟠つて居る情弊と制度上の缺陷とを、十分知り抜いて居る者もあり、而も所謂軍閥に睨まれることの恐ろしさに、自ら言はんを欲する所を言ふこともならず、悶々の情を壓へて不本意な生活を續けて居る者も尠くないのである。

其處で私は、茲に本書を公にして、改善を要する陸軍の新たなる方面を指示し、之を世に問ふと共に、不人氣な軍閥の手から、既に傷だらけにされた陸軍をもぎ取り瀕死の状態にある現在の陸軍を、熱誠をこめた國民の手で、一刻も早く救はふとするのである。

讀賣新聞編輯局にて

大正十二年三月

中尾龍夫

目次

一、三 宅 坂 …………… (一)

薩長聯合軍の分捕品…………… (一)

和製特別大演習…………… (三)

✓メツケル大明神…………… (七)

浴場か爛徳利か…………… (一〇)

古手軍人の賣れ口…………… (三三)

✓正札以上の天保錢…………… (四)

✓將校仲間の睨合…………… (七)

二、軍閥の對話……………(12)

鳥屋の赤兒……………(12)

角突合で日を暮らす……………(11)

長州の藩兵……………(14)

三、武相平野の大演習に就て……………(17)

大演習計畫……………(17)

計畫と指導……………(10)

師團の入替……………(14)

計畫の缺點……………(17)

四、常備軍の整理……………(20)

政黨の態度……………(20)

陸軍當局の意嚮……………(24)

軍事當局の國防計畫……………(28)

陸兵使用の豫想戰場……………(35)

伊國の整理は他山の石……………(35)

米國の隊外軍事教育……………(39)

師團數の減少か定員減か……………(41)

近衛師團廢止と善後策……………(42)

騎兵四個旅團の全廢……………(41)

新陸軍の陣容……………(47)

五、カーキ色物語……………(七九)

離縁箱……………(七九)

誰れに似て居る……………(八二)

ハイ忘れました……………(八三)

外套副官……………(八六)

初陣……………(八七)

寫眞に撮られる……………(八八)

監獄へ行く……………(八九)

ヨカ様大將……………(九〇)

六、軍縮諸案の批判……………(九一)

國民黨案、津野田是重案、河野恒吉案……………(九二)

七、眼鼻の付いた陸軍整理……………(九六)

陸軍省の公表案……………(九九)

軍縮後の陸軍常備兵力……………(一〇〇)

八、陸軍省實施の軍縮批評……………(一〇六)

裏面に駈引……………(一〇六)

建議案無視……………(一〇七)

窮した説明……………(一一〇)

身から出た錆……………(一一三)

歩兵横暴の聲……………(一一四)

巨頭連の迷信……………(一〇)

滿洲撤兵問題……………(三三)

進級者の製造……………(三三)

開け放しの上空防備……………(三五)

彈丸を何うする……………(三六)

批評の批評……………(三六)

九、軍縮批評の批評の批評……………(三六)

江木翼氏の駁論……………(三五)

貴族院議員江木翼氏に答ふ……………(四〇)

十、陸軍新舊戦法の比較……………(四〇)

舊戦術と小銃萬能……………(四九)

新戦術と新裝備……………(五一)

新戦術の見本……………(五一)

我陸軍の新裝備……………(五一)

十一、麓の塵……………(五〇)

十二、出兵の總勘定……………(五一)

出兵の動機……………(七一)

派遣軍の行動……………(七九)

尼港事件……………(八三)

直に撤兵せよ……………(八六)

✓ 二重統帥の悲哀(一) (一九)

✓ 二重統帥の悲哀(二) (一九)

十三、星の世界 (二〇)

✓ 君、殿、閣下の行列 (二〇)

邪道に墜ちた憲兵 (二〇)

✓ 密偵政策と近江商人 (二〇)

軍旗罹災物語 (二〇)

遠征婦の内助 (二〇)

會津落城と招魂祭 (二〇)

軍閥の正體と判官最良 (二〇)

霞ヶ關と三宅坂の睨み合ひ (二〇)

巡禮街道に追剝 (二二)

陸軍に新人出でよ (二二)

呪はれたる陸軍



三宅坂

一、薩長聯合軍の分捕品

大閤と言へば秀吉、黄門と言へば水戸の御隠居とイッか相場が決つて仕舞つたので、苟も講談本を覗いたほどの者なら、夫れが假りに三尺の童兒であつても、ア、然うかと直ぐ合點が行くが三宅坂はまだ夫れ程に通俗でないから念の爲め解題をして置かう。茲に三宅坂と云ふのは霞ヶ關で知られて居る外務省と兎角睨み合ひの好きな陸軍省を指すのだ。一口に三宅坂の陸軍省と言ふが、其處には隣合せに參謀本部があり航空局があり航空本部があり陸相の官邸があり衛戍病院が

あり陸地測量部があり兵器本廠もある。併し一つ園ひの中にあるのは陸軍省と参謀本部と陸地測量部とであつて、何萬坪あるか知らぬが構内は實に廣大なものだ。由來陸軍官衙の敷地は、薩長聯合軍と云ふと語弊があるかも知れぬが、兎に角明治政府が幕府側諸藩の邸宅を巻揚げたもの許りであつて、士官學校や幼年學校のある所は舊尾張屋敷、砲兵工廠は水戸屋敷であつて、名園として名高い廠内の後樂園は、現今陸軍大官連の共同別荘と云ふ姿に成つて居るが、本來なら陸軍丈けが涼しい顔をして獨占して居られた義理ではないのだ。三宅坂の根據地とても御多分にもれぬので最初加藤清正の屋敷であつたのが、其後久しく彦根侯の上屋敷と成り、維新の際に薩長聯合軍が分捕つたのだ。此の關係を後世の史家に長く参考として遺さうと云ふ爲でもあるまいが、既に参謀本部の庭前には大山元帥の銅像がニユーと建てられてあり、陸軍省の横手の三宅坂の眞正面には現に寺内元帥の銅像を建設中であつて、其基礎工事はもう立派に出來あがつて居る洵に有難い事だ。陸軍省内の櫻樹楓樹を配した心字池や、参謀本部前庭の蘇鐵牡丹などは流石に大名道具の分捕品丈けあつて素晴らしいものだ。其の近邊には清正が腰を掛けたと云ふ庭石もあれば掃部様が茶をたてたと云ふ井戸もある。分捕品と言へば、某方面から故意に流布せしめたらしい

宣傳に依ると参謀本部の前庭の或る木蔭に据ゑられた大石の下には、數百萬兩の馬蹄銀が今尚埋藏してあると云ふ奇怪な噂もあるが、併し是は餘り當てにはならない。尤も噂の種にされた大石丈は確にあるが、それは所謂参謀本部の地圖として旅行家や登山家の間に珍重されて居る、全國の地圖を作製する爲に、陸地測量部が測量の基點として据え付けたものであつて、別に怪しいものではない。念の爲め筆者も或る日窃にその大石の周圍を兩三度廻つて見たが、地下に大それたカラクリが潜んで居やうとは信ぜられなかつた。前置きが少し長過ぎて大分脱線したが、是れから前後の關係なく陸軍を中心にした事柄を書いて行かうと思ふ。サテ何から始めようか、先づ大演習から、手を着けよう。

二、和製特別大演習

我陸軍で大演習と云ふものが行はれ出したのは可なり古い事であつて、たしか明治二十三年に演ぜられたのが、その第一回であつたと記憶する。夫れ以前にも小規模の演習は行はれたが殆ど成つてゐなかつた。して見ると大演習は憲法政治と歴史を同じくして居る譯である。尤も明治二

十七、八の兩年と三十七八の兩年は戦役のためになかつた筈だから、前後を通じて未だ漸く三十回に成るか成らぬかだ。その中で海陸聯合の大演習が計畫されたのは僅に三回であつて、ズット以前に九州で佐世保要塞の防禦演習と連絡して實施したのが最初の試みであつた。その後は暫く杜絶えて居たが、第二回目は一昨年武相平野で行れた大演習の際に計畫され、西軍の約一大隊を海上輸送をして平塚附近に上陸させやうと企てたが、風波の爲に妨げられて實行は中止された、第三回目は昨年四國で行はれた第五師團主力の敵前上陸であるが、今度は首尾宜く實施されたやうだ。近年平和風と軍縮熱とで國民の陸軍に對する意氣込みがゲツソリ衰へ、軍閥に對する反感の爲に陸軍に對する同情が著しく減殺された爲めに、甚だしいのになると、大演習を兵隊ゴッコなどと呼んで得々として居る者もあるが不都合な話だ。軍閥に徹底的攻撃を加へ、彼等をして外交及び政治の舞臺に乗り出さぬやうにするのは國家の爲に必要であつて、軍隊及び軍人に對する國民の反感を緩和する手段でもあるが、味噌も糞も一緒にし國民自ら國民の陸軍を敵として取扱ひ、徒に睨み合ひを滋くして陸軍そのものを減茶苦茶にして仕舞ふのは考へねばならぬ。軍閥に關しては項を別にして考察する豫定だから、軍閥の提灯持ちと間違へられぬ先に拙なお説教を中

止して大演習の話に戻らう。近年の大演習計畫は參謀本部第一部の演習班許りで樹立して居るが明治廿年代殊に最初の數年間は、重にお備教師たる佛獨軍人が計畫して居たのだ。當時の日本人には其計畫が出来なかつたが、今は陸相山梨大將の岳父田村怡與造少佐が獨逸留學から歸つて始めて大演習計畫を樹てたのが、和製大演習の皮切りであつた。其後は日本人にも大演習の計畫が出来ると云ふ自信を得たので、年々參謀本部で計畫を引受け、第一、第二、第三、第四部と持廻りて計畫した來たが、三年程以前から第一部作戰部内に専任の演習班を設け、大演習計畫を其處の年中行事とするやうに成つた。獨佛軍人に計畫して貰つた時代に較べたら、近年の大演習は實に進歩したものだ、併し餘り歐州大戰を模倣し過ぎる所に缺點がある。一昨年武相平野で行れた大演習計畫が夫れで、東京防禦軍たる東軍を大戰中の獨軍に見立て、内線作戰の型を演出する爲に猫の額のやうな武相平野で、最初甲州街道方面に向つた東軍を、途中で厚木方面に轉進させたのなどは、自然に反した計畫であつて地理と地勢とを無視したものであつた。最近行はれた四國の大演習は頗る小規模であつて、一種の師團對抗演習に過ぎぬから、實演部隊には餘り不自然な行動もないが、一般方略では又ぞろ歐州大戰の模倣に腐心して居る跡が見える。即ち四國、九

州及び中國を武力を缺いた中立國として、近畿地方以東の本州を領土とする東國軍と、朝鮮半島を領土とする西國軍との戦争を想定したものであつて、主力軍は鳥取、津山、岡山の線即ち中立國の領土上で相對峙し、戰勢は逐次陣地戦に移つて戰期が長延かうと云ふ形勢を推定して居る、海軍との聯合演習であつた爲に、中立國などを想定したのであらうが、全く餘計なことだ。年々の大演習がイツも外國侵入軍と國防軍の對抗となり其の外國侵入軍が多く上陸軍であつて、某國との開戦状態を豫想し得るものであつた爲に、昨年は一つ趣向を變へて當り障りのない所を行かうとしたのであらうが、大戰中の獨逸軍の眞似計りしたがるのは何うしたものか、殊に中立國を侵犯する模範を示したのなどは頗る考へたものだ。所で、將來大演習を年々實施したものか何うかの問題だが、一體大演習は軍の統帥を演練するのだ、と云ふと尤もらしく聞えるが、四日間に何處から何處までの間で衝突するのはイツも御野立場の附近と決つて居て遭遇戦、追撃、退却決戦とチャンと型に嵌まつた演習をするのだから、地形に依つて多少の相違はあるが、忌憚なく言ふと戰況の推移も判断が容易で、東京驛を出た下の關行の下り列車は必ず品川驛を通ると云ふのよりも却つて明瞭だ。従つて其の演習價値は決して偉大なものではない。故に今後は大演習を一年置きに實施することにし、因つて生じた冗費を新兵器の充實費にでも當てたら何うか。殊に本年の如き師團對抗の大演習なら、陸軍總出で騒がなくとも毎年各師團で實施して居る秋季演習中の師團の假設的演習を廢止して隣接師團を二つ對抗さすことにすれば、經費は殆ど不要であつて而も略同一の効果を擧げ得るであらう。

三、メツケル大明神

秋季演習でも特別大演習でも、又各兵科の特別演習でも、近頃は其計畫や審判方法が頗る進歩したので、メツケルに演習員が掴み合ひをしたり、指揮官と審判官とが戰鬪最中に喧嘩を始めるやうなことはなく成つた。大演習などでは演習指導要領とか、演習審判規定とか云ふ刷物まで出來て居て、參謀本部の連中が審判官を勤め、對抗兩軍の勝敗優劣を判決する際に、其の規定に則つて無理なことをせぬやうにするから、演習間に餘興を演ずることは少くなつた。審判と指導との區別さへ付いてゐなかつた頃は、演習の統監には可なり無理な點もあり滑稽な事もあつた。明治大帝が御乗馬で千葉縣下の習志野原へ行軍をなされ、片道九里の間を西郷隆盛が轡を取つて御供

をしたとふ明治の初年から中葉にかけて行はれた演習などでは、當今の陸上競技か何かのやうに演習が終了すると、兩軍の指揮官を列べて置いて講評をした上に東軍三點、西軍七點と採點の結果を宣告したり、又時には北軍は勝味七分、南軍は勝味三分などと、拙たな行司のやうな眞似をしてお茶を濁して居たのだ。參謀總長で鳴らした兒玉源太郎などは若い時から實兵指揮が巧であつたと見え、審判官から何時も分が好いと講評されたが、或時相手方の指揮官から異議が出た際に、アンバイヤたる先輩が結局合點が行くやうな判決が出来なかつたので、果し合ひを申込まれた實例もある。其後獨逸から教官が輸入され、陸軍大學が創設されてからは、戰略戰術を振り舞はず手合も出来たので大分陸軍の面目も一新されたが、其餘弊として獨逸崇拜熱が我陸軍に染み込んで仕舞ひ、未だに其の癖が抜け切らぬ始末だ。何しろ當時陸軍大學の兵學教官メツケル少佐の持て方と來たら素晴らしいもので、昨今本庄少將や町野大佐は、張作霖の顧問として東三省で頗る羽振りが宜いと言はれるが、逆も較べものには成らぬ。たしか陸軍大學の第一期生が、戰術實施の爲に、千葉縣習志野附近へ出掛けた時だつたと思ふ。教官のメツケルに敬意を表する意味で時の内務大臣山縣大御所は船越千葉縣知事を腰巾着にして演習場に詰切り絶えず警察官の指揮

して、休憩所や旅館の世話を焼いて廻つたものだ。メツケル君は其の顔が一寸落語家の先代助六に似て居たので軍鶏と呼ばれて居たが、或る日小學校の講堂で講評が済んでから、通譯はメツケル閣下の依頼だからと笑ひながら、次のやうに附言した。

メツケル閣下は晝食の時休息した茶屋の女中お花さんを見初めた。それで若し此の戀が遂げられなければ、印旛沼に身を投げて死んで仕舞ふと言ふて居ます。

將校學生は之を聽いてワツと湧き返り、一同長靴で床板を叩いて面白がつたが、山縣内相は痛心した、船越知事には耳打ちがあつた、警務長(今の警察部長)に内訓が下つた、駐在所の巡査が活動を試みた、最初お花さんは異人さんなんかと大に憤慨したさうだが、官憲の壓迫は總選舉以上成功し、軍鶏は首尾好く其熱望を達したことに成つて居る。春風秋雨幾年、斯くて日本の參謀官が生れたのだから、我が陸軍の人達が獨逸陸軍を崇拜するのも故なきでない。其れでも日清日露の兩役で腕を磨いた我陸軍は、世界の雄國から認められ、明治卅九年以來は、年々十名近くの外國武官が我陸軍の研究に渡來し、現在では近衛の一聯隊を初め中央地方の各聯隊に六七名の外國陸軍武官が隊附をして居る。併し其の陸軍も歐洲大戰でウンと置去りを食ひ、兵數は多いが

裝備が舊く、新兵器を是れから十三年も掛つて整へようとするのだから、氣の長い話だ。是れで宜いのか悪いのか陸軍當局の再考を煩はしたい。

四、浴場か憫徳利か

參謀總長の自薦運動をしたり、教育總監部の乗取り策を講じたりする程の身分にもなり、又其の後に潛んで居る閑と云ふ奇怪な背景が、斯かる横暴を默認するやうな地位に成れば、軍人たることも亦面白い處世法であらう。併し理由も判らぬ内命一つで、馘首の豫約を申渡され、官報に出た五號活字一行の辭令で陸軍と永い別れを告げねばならぬ大多數の將校は、實に氣の毒なものだ。頭の好い物の出来る人格の高い立派な人物が、必ず最後の勝利を得て成功すると決らぬのは獨り陸軍に限つた事ではなく、銀行會社官界孰れも同じには相違ないが、陸軍と云ふ別世界では殊に其傾向が際立つて居る。例へば大將を親に持つ某と云ふ青年將校が、若し裸一貫で陸軍へ飛び込んで來た青年であつたら、停職に成つては復職し復職しては停職となり、陸軍を入浴場か何かの様に出たり這入つたり勝手次第に振舞ふことは夢にも出來まい。某程の遊蕩兒でないにして

も、有力な先輩を持たぬ他府縣出身の將校であつたら、唯一回で現役から葬られて仕舞ふのは請合だ。斯かる實例は長閑軍人の間にも掃く程あるが、現に現役に居るものを傷つけるにも及ばぬから、見遁して置かう。進級の方面も亦然うであつて、長閑の端くれであつたら甚だしい馬鹿でない限り、將官に成るのが當り前で、大佐以下で豫備役に編入されるのは筈にもかからぬ代物だ。長州の在郷將校に、著しく將官の多いのは抑々何事を裏づけて居るか、長州出身の軍人が獨り格段に優秀で、他府縣産の軍人が全部平凡だと云ふことが斷言し得るならば別に文句はないが、大學も出ない平武士がドシドシ將官に進んで、他府縣出身の軍人が天保錢を撫でながら濫い顔をして現役埋葬式を擧げられ、精々大佐か、名譽少將で在郷將校と成つて行くのは見るに忍びぬ。寺内正毅は戦争もせず元帥に成つたが、黒木大將は日露戦役に軍司令官として露助の心膽を寒からしめたが其ま、葬られた。石川、熊本の兩縣は陸軍へ多くの高材逸足を出して來たが恒例に依り、中將止りと相場は決つて仕舞つた。現教育總監秋山大將か若し長閑の一人であつたら差詰め元帥に祭り上げられる筈だが、氣の毒にも彼は目下閑族の爲に埋葬式の準備を急がれて居る。洵に同情に堪へない。陸軍當局は軍縮熱と陸軍攻撃の猛烈な爲に將校生徒志願者が減り殊

に優秀な學生が幼年學校や士官學校に這入つて來ぬと泣き言を言つてゐるが、夫れが志願者激減の全部の理由と考へたら大間違ひだ。世間では軍縮で減首される者に厚い同情を寄せて居るが、少佐中佐大佐級のバックのない閣外の將校は、此際纏まつた手當を貰つて左様ならをした方が賢明な策だ、と心から信じて居る點を考察すると、更に悲慘なものではないか、國民は早く陸軍から藩族臭を一掃して、眞に日本の陸軍たらしめる必要がある。

五、古手軍人の賣れ口

軍縮による下士卒の整理は大正十一年八月十五日の發表で、一先づ兎が付いたが、將校の減首は今後尙一回若くは二回に亘つて實行される筈だ。確聞する所に據ると今回の軍縮では一箇聯隊で將校十五名を減首することに成つて居るさうだが欲せずして其選に入る者は洵にお氣の毒だ。軍縮と云ふ軍政上の大變革が國家の爲に必要な以上は、小の蟲を殺すのも已むを得ないが、個人としては同情に堪へない。陸軍當局も減首者の身上に付ては特別の詮議があつたと見えて、此際在郷將校に短期の職業教育を受くる便宜を與へようと云ふ計畫を樹てたのは褒めてやつて宜し

い。併し在郷將校の身の振方を講ずるのなら、お座なりの職業教育を三ヶ月や四ヶ月授けるよりも、寧ろ其後の就職難を如何にするかが肝腎だ。當局は在郷將校に簿記なり教育學なりを一通り教授したら夫れから先はドシ／＼自活の途が開けるものと考へて居るのではあるまいかと疑はれるが、會社員に成るのも就職に就くのも左様に簡單には運ばないので。元來軍人は成るべく世間の空気に觸れぬやうに唯戰鬥の役に立つ丈けに製造し訓育してあるので、他の職業に轉する爲めには極めて不向きに出來上つて居る、殊に十年二十年と人間としては、寧ろ不具的に鍊えられて融通の利かぬやうに習慣付けられて居るのだから、軍人上りと云ふと餘程の好事者でない限り、採用は眞本と來るのが現社會の實相だ。兩三年前から各聯隊區司令部では、在郷將校の爲に一種の職業紹介を試みては居るが、在郷將校を使つて見ようと云ふ需用家側に感服したのは一つもない。試みに本郷聯隊區司令部から回章として配布された就職口一覽を一瞥すると斯うだ。沖繩若しくは臺灣の小學教師、青森或は北海道の山林監視、北海道にある中等學校の體操教師、無名會社の工場監視若くは職工取締などと云ふのが目星しい所で、手當は二十五圓位から八十圓止まりだ。時に比較的優遇するなと思ふやうなのは人里離れた山奥で狐狸を相手に暮すことを要件と

して居る。是では子弟の教育も何も出来たものぢやない。尤も巡査や車掌なら年中募集してるが假りに本人は忍ぶとして従五位の巡査や勳三等の車掌と来ては警視廳や電氣局で面喰ふであらう鬼に角軍人の古手が世間に出て適當な職を求めることは事實上困難なことだ。現に白川新次官や竹上人事局長は、折角在郷將校の職業教育に手を着けて佛造りを開始したのだから、更に魂を入れる意味で、陸軍が先づ在郷將校を採用して、書記なり會計なり庶務なりに使つて見たら何うか、陸軍省所管の官術學校は頗る多く職員の数も亦驚く程多い。然るに何の呪ひか知らぬが、借行社や在郷軍人會本部などは職員殆ど全部を長州軍人の古手で埋めて居る。斯う云ふ事をせずには日本全國の在郷將校を平等に公正に採用して、誰に聞えても疚しくないやうに改めては何うか、併し斯く言へばとて長州産の古手軍人に同情せぬと云ふのではなく、若し陸軍當局に在郷將校を保護し之に便宜を與へやうとする誠意があるのなら、全國の在郷將校を一様に顧みるのが正當だと云ふに過ぎない。

六、正札以上の天保錢

其の昔漢法の竹庵先生は百味葷筍の煎に鎮座して橙が色着くと、醫者の顔が青く成ると啣つたものだ。が、此頃は軍縮の聲に震へ上つた將校の顔色が土の様だ。併し軍縮の安全地帯とも謂ふべき陸軍本省のサーベル達文は相變らず意氣揚々として居る。蓋し彼等の顔前には輝かしい前途が展開して居るからだ。軍縮で將校の淘汰數が多ければ多い丈後の雁が先に成る希望が増すからだ。本省に居る將校の大部分は陸軍大學の卒業生か砲工學校の優等卒業生で、歐米への留學を済ました連中だ。此の外に極めて少數の平武士も居るが、其の九分通りは長閑の端くれであつて、他の残りは陸軍高官と特殊關係の結ばれた者共だ。孰れも特別の資格を持つて居るお蔭で狩り集められて居るのだが、就中勢力のあるのは天保錢の一卷だ、天保錢と云ふと二厘足らないサツカリン黨と早合點する人があるかも知れぬが、カーキ色の世界では天保錢のマークを附けて居ると肩に擔いで居る正札以上に適用する難有味があるのだ。陸軍成規類集に依ると、天保錢の本名は陸軍大學卒業徽章と云ふのだが、其形が昔の當百に似て居るので、誰が命名したか今日では天保錢で通つて居る。従つて天保錢組の將校は部内では別人種の如く取扱はれ、進級も別扱ひであるし、ツイ二三年前迄は參謀官は天保錢に限られて居た。此點などは海軍側と大分其趣を異にして

居る。最近では軍縮熱の爲に將校夫人の志願者が著しく減じたさうだが、夫れでも天保錢崇拜熱は依然四十度を越して居るので、陸軍大學の學生には縁談が降る程ある。併し羨望するには當らない、多くは教官たる先輩軍人の縁者許りで、其多くは二の町三の町の類だと言はれる。兎に角天保錢が世の婦女子及其親に持てる點は所謂學士さんと似て居るからだ。子規居士は『子子の蚊に成る頃や文學士』と冷罵を浴びせた事があるが、曾て軍部にも子規居士が居た、夫れは故小川又次大將だが彼は大佐として近衛の聯隊長をして居た頃、部下の若い天保錢が戰術講話の際大に戰術風を吹かしてメートルを上げたのに對し、根本的に説の誤謬を正だした揚句『小川又次の生きた戰術を學べ』と一喝して名聲を博した。彼は平武士であつたが參謀總長の實力を有して居たことは部内の何人も承認して居る。當局の方針が天保錢萬能主義に陥つた結果、若い將校中には一度天保錢を手に入れ、殊に軍刀でも授けられると忽ち天狗と成り、其の後の研究を怠るので五年十年と經つ内に殊勝な平武士の脚元にも及ばぬやうな鈍漢と化した實例が少くない。第一に此點を看破したのは現參謀總長上原元帥だ。彼は平武士を激勵し、天保錢を戒める爲に、平武士中の優秀なものを選抜して特に參謀演習を行ひ、其成績の良好なのはドシドシ參謀官に任命する

新制度を開いた。従つて現在では師團參謀中に天保錢のない參謀を見受けるやうに成つた。併し參謀總長が更迭すれば此の制度は廢されるかも知れぬと云ふ噂もあるが、誠に當を得た良制度だから長く續けるが宜いと思ふ。

七、將校仲間の睨合

陸軍の不人氣は際限なく甚だしく成つて行くやうに見受けられるが、恐らく是れも一時で纏ては現に背を向けて居る人氣も陸軍に、其笑顔を見せし時機もあらうと思ふ。併し現在の陸軍としては部外との融和を考へる前に、先づ部内に於ける融和を圖る必要があらう。茲に融和と云ふのは外でもない。將校間の睨み合ひを解き、全國の將校を一つの精神的な團結にさせたいと言ふのだ。根本的に融和せしめようとするには部内に蟠まつて居る長閥、薩閥、福岡閥などを一掃しなければ或は其の實現が困難かも知れぬが、夫れよりも遙に一般的であつて掃蕩急を要するは、學閥に對する一般將校の反感と出身校を異にする將校間の睨み合ひだ。長閥、薩閥、福岡閥などに對する反感はどちらかと云ふと上級將校に成る程熾烈となるのだが、後に述べた反感は大尉少佐

と云ふ時代から十分懐かれて居るのであつて、決して輕々に看過し難いものだ。學閥に對する反感は所謂天保錢に向けられる反感であつて、制度上の缺陷に基因して居る。又出身校を異にする將校間の睨み合ひと云ふのは中學校出の將校、幼年學校出の將校及特務曹長上りの將校間に行はれて居る見悪くい睨合だ。一般將校には士官學校在學中にも亦卒業後附將校として教育されて居る間にも單に初級戰術丈に限られ、高級戰術即ち軍の統帥と云ふことに關しては絶対に教育を施さぬのみか話もしない。其處で演習などの際に露營をさせられた下級將校の大部分は、高級司令部の幕僚がノコノコと家屋内に入つて居るのに對し常に憤慨するのだが、是等は畢竟高級司令部の職能が如何なるものなるかを理解して居らぬからだ。參謀官に對する反感は多く此邊から生れて來るが、其救濟策は何うしても一般將校に對しても、高級戰術の梗概を諒解せしめる爲め、教育を開放するに限る。併し教育の開放と言つた所が、誰々彼も陸軍大學に入れよと云ふのではなく、師團には參謀長以下高級戰術を心得た者が四五名も居るから、之等の將校をして師團内の將校に教育を施すことにしたら夫れで宜しい。夫れで若し大學に這入らずとも、參謀官たり得る者が見出されたら、落穂はドシドシ拾ひ上げたが宜い、是れ迄にすれば不平の跡は自然消滅する

に相違なく、反感も薄らぐ筈だ。又同じ士官學校の生徒でありながら、中學出身者と幼年學校出身者とは常に反目し、在校中などは毎晩のやうに喧嘩が起り、卒業後將校として同じ將校團の一員として勤務して居つても其の續きを演じ、事毎に睨み合つて居るのは氣が知れない。而も斯かる兩者の間に特務曹長上りの將校が、も一つ交つて居るのだから始末が悪い。海軍では最近天保錢を廢したから、陸軍も廢すが宜いし、幼年學校なども海軍には初めからなくて何の不自由もないのに鑑みて、早速全部を廢止したが宜しい。然うすれば當然融和が出来やうと信ずる。若し師團には一般將校に高級戰術の教育を施す經費がないと云ふ者があるかも知れぬが、現在の旅團幹部演習丈を其まゝにして、師團の幹部演習を本演習に改めることにすれば經費は一文要らずで實施が出来やうではないか。

軍閥の對話

六、鳥屋の赤兒

世間からは軍閥の巢窟と見做されて居る三宅坂に沿うた軍衙にも御用始めが来た。正装こそ着て居ないが、夫れでも新年だけに佩刀をガチャつかして集まつて来る御役人達は、孰れも第一装用といふ他所行きのカーキ服で、胸間を飾つた勳章の行列に重きを感じた譯でもなからうが、一様に左肩を揚げて居る。彼等の出勤で三宅坂に面した通用門のあたりがザワついてから、もう彼れ是れ小一時間は過ぎたであらう。御用始めとはいふものゝ實はホンの顔見世に過ぎないのが慣例に成つて居るので、彼等もお互ひに今日は是で宜いのだと諒解して居るせぬでもあらう。ドの室も大概同じやうに、丸腰に成つたカーキ服の連中がストーブを圍んでタワイもない漫談に耽つて居る。朝酒と二人連れの手合も相當に多いと見えて、其話聲も平常よりは一段高く、あたりかまはず談笑して居る所は如何にも春らしい。

△どうだい此の頃の陸軍の不人氣は、今朝も出がけに辛うじて満員電車に乗込んだ所が怒鳴りつけられたよ。

□ほんとだ、此頃は陸軍即軍閥で苟もカーキ服を着たものはさながら國民の敵であるかのやうな取扱だからな。軍閥の攻撃も宜いが、霜解けがして道が悪くていけない。こりや軍閥の罪だ、

天氣續きで空氣が乾燥して咳が出て困る。これも軍閥が不都合なこと許りするからだ。何でもかても悪い事は軍閥攻撃の種に使はれるんだから恐縮せざるを得ないよ、一體吾々はどうしたら宜いんだい。

對話者は二人とも閩外出身の男だが、△氏は最近歐洲から歸朝した軍人としては珍らしいほど部外の事に通じた新知識であつて、どつちかと言へばカーキ服の先覺者を以て自任して居る、□氏はミリタリズム其もののやうな頑固黨で會て或會合の折に『文官にも愛國心があるかしら』と云ふ奇問を發したといふ逸話附の豪傑である、さうして對話はつゞく

△勿論今の陸軍の不評判を吾々の力で俄かにどうすることも出来ぬが、不評判の原因に就ては陸軍側にも反省の必要があるさ。

□併し吾々には何も關係はなからう、自分の國の陸軍を頭から軍閥々と攻撃して居る奴は、米國の宣傳に乗つて氣のつかない鈍漢で國家を危くする非國民ぢやないか。

△然うだ、直接吾々には關係はない、併し國民から軍閥としての憎しみを向けられるのは、畢竟親の因果が子に報つて居るので、烏屋の赤子が指が四本で見世物に出されてるのと餘り變りは

ないよ、吾々は憎まれ坊主の袈裟と云ふ格さ。

□國民の憎しみと云ふが國民は知つたことぢやないよ、大演習などで地方へ行つて見給へ、未だに大した歓迎振だぜ。

□氏の顔は紅潮して亢奮の様がまざまざと窺はれ、△は冷やかな微笑を浮べて居る。

七、角突合で日を暮す

△最近つくづく陸軍不人氣の原因を探求して見たが、どうもはつきりしない。併し參謀本部が外交に手出しをしたのは主な原因の一つらしいな。二重外交なんて言葉が出来た位だからね。

□二重外交なんて言ふが煙みたいな話じやないか、見給へ、此頃の參謀本部はスツカリ骨抜きに成つて猫のやうじやないか、柳川鍋の鱈と來ちや齒痒いよ、一重外交の御手際は華府會議の出來榮で立證されるじやないか、それなのに今頃二重外交なんて咎め立てするのは消息に通じないお先眞暗な奴等の寢言さ。外務省の通辯どもに委して置いて見給へ、近い内に滿州からは追出され朝鮮からも投出され狭い島の中へ押込められて仕舞ふから、然うなつたら英米などは喝

采して日本の外交官を煽て上げながらクルリ後を向いて赤い舌を出すだらう、一重外交の行詰りは大概知れてるよ。

△日本の外交官が意氣地がないのは事實だが、夫れだからと言つて參謀本部が外交に容喙するのは穩かではないよ、外務省に人物のないのは制度に缺陷があるからだし第一餘り規模が小さいからさ、師團の二つや三つ廢しても戦闘艦の一隻や二隻減らしても其經費を外務省の豫算に振當たらもつと何とかした外務省が出来上るだらうぢやないか。

□豫算の足りない點は同情するが、夫れにしても餘り人物が居なさ過ぎるよ、第一支那通と云ふ程の男が外務省に居るか、唯一の支那通が今華府會議へ行つてゐる高尾君一人ぢやないか、支那關係の課長が支那を見たこともないお方と來ちや心細い。珥春事件の起つた時水野大佐一行が例の宣言をした時でも世間ぢや二重外交の好標本のやうに罵倒してゐるが、彼の時も外務省に適當な人物が居ないから陸軍の方から誰れか派遣して呉れと頼んで來たやうな始末で、決して陸軍が出しやばつたのぢやない。大連會議の高柳少將もさうなら、華府會議へ出かけ損くねた坂西少將でも然うさ、一體外務省の下積連中と來たら無能の辯に雅量がなく、角突合で日を

暮らしてゐるんだから日本の外交も心細い譯さア、ハ、ハ、ハ。

八、長州の藩兵

△マア待つて呉れ、大變な氣焔だね丸で吾輩が外務省の人のやうだな、併し外務省としても軍人が外交の畑に畝を入れるのは不快だらうよ、又坂西や高柳のやうな男がいかどの露國通支那通だとしても、妙な試験制度でケチな外交官を養成して居る外務省としては、軍人を外務省に入れて優待する氣には成れまい、又軍人の方でも陸軍に居たら相當の地位に在るんだから、冷遇されて外交官の眞似をしたくもならう、どうしても外交の舞臺からは軍人の方が手を引くのが當然だらう、國民の非難攻撃を浴びて二足の草鞋を穿くのは愚ぢやないか、然うしないと陸軍攻撃は益々猛烈に成るぜ。

□併し矢鱈に陸軍を攻撃して軍閥軍閥と仇敵のやうに睨め付ける國民も、健忘症なら外務省も勝手な話さ、維新から明治年代の末にかけて帝國の國際的發展に軍人が、與つて力のあつたことは蔽ひ難い事實ぢやないか、其れを忘れて陸軍を目のかたきにするのは餘り話が判らな過ぎ。

よ。

△人心と云ふものは然うしたものだよ、クレマンソーを見給へ、あの花々しい活動を續け國民の感謝を浴びたので、それなら一つ大統領にと運動したのだが、見事に國民の背負投を喰つたぢやないか、功成り名遂けたら宜い加減に引下るのが肝腎だよ、日本許りぢやないドコの國でも國民は大概健忘症だよ。

□フム、然んなものかなあ。

△過去五十年の軍人の活動が確に國家を國際的に重からしめた事は吾輩も認める。併し夫は餘りに長かつた、今日では國民は軍人の努力を軍閥の横暴妄動と見做して居るのだ。今後は陸軍は全然戰術戰略の城砦に閉籠つて、政治や政策とはキツバリ縁を斷るんだね、然うすれば陸軍大臣は文官でも差支なくなり、平時は參謀本部を陸軍省内の一局とする事も出來やうと云ふものだ。□貴様はエライ議論をするな、本氣の沙汰か、毛唐にかぶれたな、陛下の陸軍を何と思つてゐるんだ、貴様の言ふ通りにすると陸軍迄が政黨に攪き廻されるぞ、夫れでも宜いのかケシカラン。△イイヤ、陸軍が國民の陸軍になれば政黨が攪き廻し得るものぢやない、吾々の先輩が今尙考へ

てゐるやうに、陸軍を國民から切放して唯陛下の陸軍として超然として居やうとするのは誤りだ。陸軍は國民と一體を成したもので國民の諒解の下に其必要を公認されたものでなけりやならぬ。然う云ふことになれば、國民の陸軍と云ふのも陛下の陸軍と云ふのも全く同じ事に成るんだ、然うは考へぬか。

□馬鹿らしい、陛下の陸軍を國民の陸軍とは何事だい。

△國民の陸軍で氣に入らなければ國家の陸軍でも宜いさ、政治外交に口出しをしない海軍に國民の同情のあるのを貴様はどう思ふ、陸軍を藩兵にして置くと國民の同情は喪くなる許りだぞ。

□藩兵！

△然うだ長州の藩兵、兵權が武門に移つて七百年、それを維新の改革で天皇の御親卒するものと復古させたが過去の五十年は七百年に較べて餘りに短い、従つて改革も徹底しないし、内容の藩兵であるのも事實だ、藩兵に國民の同情が集つて堪るものか。

△叱ッ、誰れか來たやうだ、聞かれるとは是れ(平手で敵首の眞似をする)だぞ。

現在の陸軍部内には新舊二つの思想が渦を巻いて居る、さうして新しい陸軍は今將に生みの苦

しみを續けて居る。若し我國民が軍閥だけを憎んで陸軍其ものを殺すことなしに、唯外から其殻だけを破るならば、其處に程なく立派な國民の陸軍が生れるであらう、軍閥は殺さねばならぬ、併し陸軍を殺すのは危険であらう。

武相大演習に就て

一、大演習の計畫

我國の大演習は年々歳々絞切形の計畫をして、第一日から第四日迄に、遭遇戦、攻撃防禦、追撃退却、決戦と推移するのが恒例であつて、最近十數回の大演習は全く同じ軌道の上を進んで、演習地の地形及兵力の多寡に依つて多少戰略的變化の跡を留めたに過ぎない。夫れでも數年前迄は參謀本部内に殊に演習班なる専任當局なく、總務部、第一、第二、第三、第四部等が一年毎に交代で特別大演習の計畫をしたものであつたが、一昨年度から特に第一部(作戰課)内に演習班と稱する大演習計畫の専任班を設けてからは、演習其もの、計畫も演習の審判法も、大いに其面目

を改め、此一兩年は殊に長足の進歩を示すに至つた、就中審判法は最近頗る進歩し演習毎に指導要領なるものを規定して、演習が軍司令官や師團長の決心如何に依つて不成立に終るやうなことは絶對になくなつた、又審判と指導とを判然と區別し、從來久しく此兩者を一緒にして居て氣付かなかつた爲に、演習間隨所に起つた、審判官と實演者との衝突が殆ど一掃されたのは喜ぶべきである。

歐洲諸陸軍國では大戦後大演習所の騒ぎではなく、孰れも戦後の整理で眼を廻して居るから、何所の陸軍でも大演習などを實施しては居ない。従つて最近の例を外國に求めるのは困難であるが、我陸軍の母國たる獨逸の大戦前約六年間の統計に依ると、同國の大演習は決して我國のやうに一回の演習に、遭遇戦、攻撃防禦、追撃、退却、決戦と戦闘方法の總仕舞をするやうな詰込み主義を取らず、年々必ず之等戦況の一つを研究目的として計畫されて居る。従つて演習の區域は狭くて事が足りるし、對抗兩軍間の隔たりも極めて少く、比較的接近して行ふことが出來る、即ち斯かる方針に従ふと次のやうな利益がある。

一、大演習の計畫が型に嵌らぬから、演習参加者が演習の經過を豫想判斷して、八百長的行動が

出來なくなり、更に實戰的となり得る。

二、演習地が小局地に制限されるから、演習の爲に被る一般國民の損害が遙に軽減される。

三、演習費が激減され國の負擔が少くなり、現在と同額の演習費で二年分の大演習を舉行することが出来る。

既に大演習無用論さへ唱へる者のある時代であるから、今後陸軍當局が年々大演習を繰返すものとしたら、特に以上の點に注意し、經費と國民の間接に受ける損害とを少くして、演習の効果を擧げることには心掛ける要があらうと思ふ。尤も過去數十年間の大演習を顧みると、我陸軍の計畫も非常に進歩して居ることは認められる。元來我國では當初御傭教師たる佛獨將校の指導を受けなければ、大演習などは計畫し得なかつたのであつた。川上操六の下に參謀次長として名を走せた故田村怡興造が、はじめて獨逸留學から歸朝した少佐時代、即ち日清戦争迄は我國の將校で大演習計畫を樹て得る者が一名もなかつたのである。其の當時の話である、愈々名古屋附近で海陸聯合の大演習を舉行するに決し、イザ計畫と云ふので時の參謀本部では會議を開いた、列席の將軍以下當年の我が中央部の俊才連中、誰一人として俺が計畫しやうとも、亦斯んな結構で仕組

んだらとも言ひ得る者がなかつた。其處で例の通り外人教師の手を煩はさうとなりかけた時に、末席に控へた後の次長たる田村少佐が、突然『是れだけの人が居て、日本軍人だけで計畫が出来ぬとあつては國の名折れではないか』と言を挿んだ。衆目は田村少佐に注がれた『お前に大演習計畫が出来るか』と云ふ質問が議長たる參謀總長から出た『出来ます』と田村少佐が斷言した。其れなら兎に角計畫して見ると云ふことに成つて、首尾好く實施されたのが、第一回に名古屋附近で舉行された純和製の陸軍特別大演習であつた。

爾來今日に及んで居るのであつて、遂に規模、方略、兵力共に當年と比較には成らぬやうな最近の大演習が容易く行はれるやうに成り、又今日の陸軍には特別大演習を計畫する位の將校は尉官級中にも掃く程あるやうに進んだのである。

二、計畫と指導

私は昨年の大演習前に海陸軍聯合の大演習を舉行し、海上輸送敵前上陸等の戦況を實演するの必要あることを力説し、近來の陸軍特別大演習が餘りに月並に流れたのを非難して置いた。然る

に參謀本部では何に鑑みてか、今回は我陸軍始まつて以來、第二回目の海陸聯合の大演習を舉行した、尤も海軍側でも恰度横須賀を中心とした特別演習を舉行することに成つて居たので、其海上演習と大演習とを便宜結び付けたのであつて、海陸聯合演習規定に基いたものではない。其れにしても兎に角海陸聯合の演習が實施され、陸兵の船舶運送及敵前上陸の演習が加味された點に對しては參謀本部の努力を多とする。併し參謀本部の計畫に多少の手落ちのあつたことは蔽ふことが出来ない。

元來本年度大演習の原案は、第一日野臺の攻防戰、第二日伊勢原附近の遭遇戰、第三日長津田附近に於ける追撃退却途中の前、後衛戰、第四日多摩川沿岸の決戰であつて、西軍は日本海沿岸に上陸した外國侵入軍の主力と駿河灣に上陸した其友軍とが、東京攻略の目的で武相平野に前進し來るものとし、東軍は千葉、茨城、福島、東京附近に根據を有した國防軍が侵入軍に當ると云ふ仕組みであつて、實演した演習は、侵入軍の最右翼軍との衝突だけである。而して演習第二日の未明に諸兵連合の西軍の一支隊を馬入川以東出來たら藤澤、茅ヶ崎間の沿岸に上陸せしめて東京の左側背を脅威し、東海道を前進する西軍第三師團の行動を援助させると云ふのが大體の計

畫である。

參謀本部としては眞夏の頃から現地偵察を行ひ、殆ど一年間を費して大演習計畫を樹てるのであるから、大なる誤りがあらう筈はないが、併し其れでも演習實施後から觀察すると、指導と準備との缺點のあつた事が發見される。東京の攻略及防禦の演習は洵に思ひ付きではあつたが、時機が悪かつた、之が若し一昨年であつて太平洋會議も起らず、軍備縮小論なども餘り盛んでない時であつたならば、歐洲戰の實驗から空中防備の必要と云ふことを國民殊に帝都の市民に知らせる爲には、東京附近で航空隊の演習を行ひ、爆彈投下や空中戦闘を東京市の上空で實現さしたら或はよかつたかも知れない。殊に十分なり二十分なりの間東京全市の電燈を消し、飛行機襲來の警報を市民に急報したり、其の間電車自動車等交通機關の運行を一時中止して警戒演習を行つたり、爆彈、焼夷彈の投下で起つた十數箇所の火災に對する消防演習等も或は實現したかも知れない、併し警視廳の態度と陸軍側の交渉の拙劣さとして、是等の總てが實現されなかつたのは遺憾であつた。

又日野臺附近の東西兩軍に依つて行はれる攻防戰が不自然にも、第十四師團に對し退却を命ず

るの餘儀なきに至つたのには、二個の失策が含まれて居る。其の一つは統監部の東軍に與へた指令、即ち十七日の午前六時から前進移動を起して宜いとした點に無理があつた。あれは午前五時とすべきであつたのである、茲に一時間の餘裕があつたら、日野臺の攻防戰は立派に發展した筈である。他の一つは東軍司令官大井大將の慎重に過ぎた態度である、當面に二個の敵を控て、之を各個に擊破しやうとした東軍としては、もつと敏速に攻撃運動を進めねばならぬ、東軍のモーションは頗る我慢であつた、然るに第十四師團長朝久野中將の行動は準のやうに機敏であつた、甲州街道を出て日野臺に到着し、一兵を損せず毫も其兵火を交へずに東軍二個師團を翻弄し盡し、遂に夜に入つて東軍の攻撃準備を遅延せしめ、東海道方面友軍をして其出地通過を容易ならしめたのは申分ない。

演習の實際上から言ふとあのままでは、東軍は其夜東海道方面へ轉進は出来なかつたのである其處で翌十八日の演習の爲に、無理な不自然な指導をし、何の損害もなく十分成功した第十四師團を強制的に退却させ、小佛以西の山地に戦ひ戻したのである。之れなどは戰鬥の勝敗に依る審判の結果ではなく、全然演習指導の便宜上から起つた退却であるから、第十四師團各部隊の兵卒

は恐らく退却の理由を知らずに、ブツブツ言ひながら再び小佛峠を越したであらう。

三、師團の入替

演習第一日の夜から第二日にかけて、東軍司令官大井大將は實戦では到底不能な行動を何の苦もなくやつて退けた、其れは兩師團の入替である。併列して居る師團の背後には輜重梯團が數里に亘つて長々と續いて居るのであつて、師團命令には必ず其處置を附記してあるのである。師團戦闘部隊を風としたら輜重梯團は其尾のやうに後に續いて居るのである。然るに東軍は右に近衛左に第一師團を展開させた日野臺附近の戦闘後、伊勢原方面へ轉進することに成つた。翌日には第一師團を右に、近衛師團を左にして前進を起した。宛然天勝のやうな不思議な手腕を示したのであるが、輜重梯團の行方は遂に不明となつた。故に演習であつたから出來たのであるが、實戦で斯かる無謀な行動があつては、東軍の戦線は大混亂に陥り、彈丸の補充は遅れ將卒は飯も食へず負傷者は長く手當も受けず、架橋縱列の行方不明な結果として、相模川の渡河は恐らく非常に手間取つたであらうし、更に其結果として、前に第三第十三兩師團、後に第十四師團を敵として

双方から挾撃を受け大敗に陥つたであらう、竹上參謀長は不注意でやつたのであらうが、畢竟演習氣分の生んだ滑稽である。

第二日目の伊勢原附近の本戦には、兩軍とも別に非難する程の大過はなかつた。兩軍の將卒が烈風の吹飛ばす砂煙を浴びながら奮闘したのは同情に價する。併し當日の問題は、辻堂附近へ上陸する筈の東軍一支隊の行動である、一體敵前上陸と云ふのは午前の二時頃から開始して、天明迄には完了するのが原則であつて、萬已むを得ない時でなければ晝間は行はぬのである。今度の敵前上陸で天明と共に實施される豫定であつたのは、東宮殿下行啓の御都合にも因つたのであるから、上陸時機の問題は姑く別とし、當日天氣が晴朗であつたにも拘らず、辻堂附近に上陸が出來なかつたのは上陸地の選定を誤つたのであつて、參謀本部の準備調査に手落ちがあつたのである。豫定上陸地鹽沼附近一帯の海岸は水淺く一見上陸には適當して居るらしいが、實は一寸風が出ると常に浪が荒く、近寄るのが危険であつて、附近の漁夫なども其邊の呼吸は能く心得て居るのである。又海軍側でも陸戦隊の上陸掩護演習を其邊でやつて居るには居るが、常に横須賀方面から陸路辻堂海岸附近へ來て實施するのであつて、未だ曾て海上から直接陸戦隊をあの邊りに上

陸さして、上陸掩護戦の演習を試みた事はないのである、大演習計畫者が今一步上陸地の選定に入念であつたら、計畫の實行が出来たであらうに、天候と地理とを輕視と云ふよりは寧ろ忘れて居たらしいのは頗る遺憾である。

然るに或は一體馬入川以東の海岸で、敵前上陸を敢行させやうと云ふ計畫が非實戰的であつて不能を敢てするものだ極論して居る。其理由は潛航艇や水雷艇の奇襲を受けるから實際は出来ないと云ふにあるのである、一應尤もに聞えるが、此非難は一般方略を通讀したら、一も二もなく合點の行く事柄であつて、大演習開始前に、東軍艦隊は東京灣内に押込められ、灣口は封鎖されて居るのである、従つて相模灣、駿河灣附近一帶の制海權は西軍艦隊の占むる所である。其西軍が敵前上陸を敢行しやうとするのだから、不能でもなくでもない。又潜水艇や水雷艇の奇襲は當然のことであつて、其れは覺悟しなければならぬ、實は其爲に西軍艦隊が護衛の任に當つて居るのである。故に西軍が箱根足柄の山地を突破し、更に馬入川を越えて東京方面に迫る爲には、其掌裡にある海上の交通を利用して成るべく速に一部の軍隊を相模平野に出だして、本軍方面の作戦を援助させると云ふのは、決して無謀な事ではない、唯問題は上陸軍の上陸後に於ける運命

である。

東軍に若し別な兵力があるか、或は第三、第十三師團と對抗して居る線が今一層上陸地に近く東軍が辻堂方面に兵力を割き得る状態にあつたとすると、敵の背後に孤立して上陸した石原支隊は上陸後危険な地位に立つことに成るが、此場合には假りに全滅したとしても、其全滅に至る迄の間は東軍の兵力を相當に牽制し得るから、東海道上を東進して東軍と戦ふ友軍には間接に鈔からぬ利益を與へることに成るのは言ふ迄もない。

四、計畫の缺點

參謀本部が演習地を東京に選んだのは第一の失敗である。約四萬の演習參加部隊を東京市内に一晩宿營せしめたのは、第二の失敗である。而して大演習と東京市の空中防禦とを同時に仕組んだのは第三の失敗である。實は東京の空中襲撃等は此際でなく共、別の機會に何時でも出来るし殊に航空勢力の不足及び空中防禦に對する施設の皆無なのは、直に立證出来る事柄であるから、強ひて此際かたづけなくとも宜かつたのである。従つて大演習を東京と結び付けずに、中央に遠

ざかつた地區で舉行したら外國に對する聞へもよし、世間を騒がすことも妙かつたと思ふ。參謀本部の計畫と其信念には毫も不都合な點はなく、國防と云ふ點に重きを置いて、危険状態を帝都の國民に目のあたり悟らしめやうとしたに過ぎないから、強ひて咎めはしない。併し其の時機と方法とが適當でなかつただけは事實であつて、私は國家の爲にも陸軍の爲にも之を惜しむのである。

殊に市民の迷惑と反感とを助長するに十分な市内宿營の如きは拙中の拙なるものである、大演習をしたから觀兵式をしなければ成らぬと決つては居ない。又觀兵式は閱兵式と分列式とを軍樂隊に合せてやらねばならぬと決つたものではない、陸軍の爲に圖れば、本年の如きは假りに東京の郊外で大演習だけはやつたとしても、多摩川の河原で適當な地點を選んで閱兵式だけを行ひ、其儘解散して其日返りの出來ぬ部隊は、市外の村落に分宿したら好かつたのである、代々木の練兵場で觀兵式を行ひ、市中へ泊めたと云ふのは結果に於て陸軍の不人氣を増す資料と成たのである。兵卒一名の宿舍料として軍隊で支拂ふのは金五十錢である。田舎の相當な家なら三人四人分位の夜具蒲團を餘分に持つて居るのが多いから、着て寝る物の心配までは要らないが、東京で

は然うは行かない、第一そんな餘分な夜具や蒲團を常設して置く家も少いし、又た貸家住居の者などでは假りにあつても置き場に困る位なものである。其處で五人も割當てられると、少くも三人分位の夜具は他から貸り受けなければならぬ。軍人を泊て風を引かしたと言はれるのも面白くないから、損料を出して持込むと一人前一夜四十五錢から六十錢はかゝる、兵卒を泊たら御馳走しろと云ふ規則もおふれも出ては居ないが、其子弟を入營さしてある父兄も居るし、國家の爲に苦勞して居る人達だと思へば、義理にも茶位は出さなければならぬ、又茶菓子も添へなければならぬ、夜具蒲團の損料で下げ渡される宿舍料は飛んで仕舞つて居るから自然自腹を斬ることになる。

其處で痛む後腹は當然大演習に對する不平となり、陸軍に對する反感と成るのである、陸軍當局としては不都合な國民だと言ふかも知れぬが、セチ辛い世の中は遺憾ながら陸軍から不都合たと呼ばれても、懐中の痛まぬ方を希望して居るやうである。若し陸軍當局が豫め府市當局と交渉して東京市内外の軍隊の宿舍は華族富豪の大邸宅に限ると決めて、一軒に廿人、卅人、四十人と一塊りにして割當て女中總出で斡旋させ、三度の食事には料理店の仕出しを撥ばせ、酒迄出さし

て夜は絹布の夜具蒲團でぬくぬくと寝さしたら、兵卒の悦びは無論のこと、一般市民は一方ならず當局の措置に感激するのであるから、此場合には軍隊の東京市内宿營の結論は大いに其趣を異にして來るが、斯かる考へは痴人の夢よりも尙遙に頼りのないことである。併し軍閥の仕事が全部悪いとは言はない、統監部新聞班の活動振は頗る出色で、特に皇室と國民との接近を圖る爲めに拂つた努力は、二百有餘名の陪觀記者の大多數に會て無いほどの好感を與へた。

常備軍の整理

一、政黨の態度

華府會議に於ける陸軍の既存兵力制限協議は、佛國代表ブリアン氏の一喝に依つて減茶々々となつた。従つて今回の華府會議では向後陸軍の兵力制限に觸れた問題は先づ再議される機會はないものと認められる。其間の消息を見極めたせいであらう。目下該會議に列席中の我が陸軍委員は手も出さず口も出さずに制限交渉がお流れとなり、期待以上に思ふ壺に飲つたので、當初の計

畫通り我國の陸軍は現状維持が出來ると一息ついたと云ふことである。併し私は華府會議の經過如何に拘らず、帝國の陸軍を救ふ爲め、我が陸軍常備軍を現状の儘に放任するに忍びないのであつて、今後は純然たる國內問題として、陸軍の軍制改正及び兵力整理の斷行を必要と確信せざるを得ないのを遺憾とするものである。

從來一個人として、或は一新聞の主張として、陸軍の軍制改革を唱へて來たものは相當に多いが、我國の政黨が政黨として未だ陸軍問題に對する態度を明かにして居らぬのは頗る遺憾に堪へない。今や時代は政黨の本問題に對する沈黙を許さぬ迄に進んで居る。財政上の關係も、軍備制限を必要として居る、四圍の形勢も、陸軍常備兵力の減少を斷行するに可能性を示して居る。然るに政黨が全然とは言はざるも殆ど申譯的の外陸軍問題を宛ら他人の事のやうに取扱ひ、毫も顧みないのは抑も何の爲めであらうか。

由來我國では政黨として政權に有つかうとするには、陸軍を敵とすることは禁物である。陸軍を敵とするのは畢竟山縣公を敵とするのと同じであつて、從來の政界の事情から言へば、山縣公を敵として政權を獲得しやうとするのは無理な注文であつたのである。其處で私は我國の政黨が

陸軍を敬遠して、其内容に立入つて研究することを避けて居るのは、現在の陸軍を完全無缺なものと認めて居る爲ではなく、元老の最有力者たる山縣公一味者の立腹を懸念して居る結果であらうと想像して居る。或は全然さうではなく實は陸軍其者の正體が判らぬ爲めであるのかも知れないが、斯く考へるのは政黨を侮辱するものと異らぬから、私は政黨が黙つて居るのは、我が陸軍の現状が適當であるか不適當であるか、又缺點があるのか、缺點がないのか、トント見當の付かぬ爲めではないと信じたい。

殊に陸軍を敵とするのを不得策だと考へて居るらしく想像させるのは、政友會と憲政會の態度である。政友會が陸軍を怒らしてならぬのは言ふ迄もないが、政友會に亞ぐ大政黨たる憲政會は將來政權獲得の希望があるので、陸軍側を暗礁としては堪まらぬとでも考へて居るのか、陸軍問題などは噓にも出さない。所がドツチへ轉んでも政權に縁の遠い國民黨(現革新俱樂部)だけが、陸軍の軍制改革に着眼し、大内暢三氏の名で陸軍改革案さへ公表し、又黨としても數年來一年兵役論を主張して居るやうである。政、憲、國三黨の斯る態度を見ると、私は苦笑せずには居られない。さうも陸軍が恐ろしいのであらうか。

政友會でも全然軍備問題に觸れなかつたと云ふ譯でもない、ツイ最近同黨の津野田君が、一年現役制案を政務調査會に提出して居る。其處で早速政務調査會では津野田案を附議し其調査を進めた所が、經費節約の目的の爲にしたいと考へた一年在營制案なるものが、意外にも現行の二年在營制に較べて、經費が少しも節約されず、教官たらしめる筈の將校の數などは、現在よりも多數を要することになつて居るので、結局之れでは一年現役制と云ふものは經費整理の目的を達し得ない、と云ふ結論となつたので、該案は其儘黙殺された形に成つて居ることである。津野田案の内容を一瞥しなければ嚴正な批判は出来ないが、二年を一年にして經費が減せず、將校の數を増さなければならぬと云ふのは眞に面妖な話である、政務調査會がどんな調査をしたか知らないが、察するに津野田案なるものは、一年在營制を探ると同時に、一年度に入營させる壯丁の數を現在よりも遙に増加してあるのであらう。其れでなければ教官たらしむべき將校の數を、現在以上に多數を要すべき緣由かない、又經費が減らないといふのは諸工卒、諸勤務兵、當番卒の代りに軍人以外の人夫なり職工なりを使役しやうとするものであらう。二年在營を一年在營にして經費が減らないなどは、随分人を食つた話であつて、二から一減いて三残ると云ふ算法であ

る。尤も政友會内でも該案が津野田君の自發的提案か、一年現役論撲滅の爲に軍閥側から轉々して來たものか、一寸判断に苦しんで居ると稱せられる。

之に反し國民黨の軍制改革案は要領を得て居る。同黨の宣傳部副部長大内君の報告に據ると、其内容の概略は斯うである。

假へば歩兵百二十萬人を動員せしむるものとして、吾等は此兵員に變動を及ぼさずして、在營年限を短縮せんと欲するものである(中略)それ故に假りに歩兵の在營年限を一年とするに至らば、現在採る毎年の徵募人員丈りで、現在の戦闘人員に何等異動を生ずることなく、而も在營兵數は半減せらるゝのである(中略)吾等は猶ほ進んで、陸軍の獨占する工業の全部を民間に開放せしめんと欲するものである。即ち東京、大阪の砲兵工廠及び千住製絨所等の如き、主として民間拂下を主張するものである(國民黨宣傳部副部長大内君の演說筆記二九、三〇頁より)『右の外同黨の』政務調査會では陸軍整理案の綱要として、各方面の調査結果を公表してあるが、歩兵の一年在營制だけを主張して、他兵科即ち騎、砲、工、輜重に全く觸れて居らぬのは物足りない。併し將校の淘汰、歩兵旅團司令部の廢止、騎兵旅團の廢止、幼年學校、陸軍々醫學校陸軍

經理學校、陸軍獸醫學校等の廢止及兵卒待遇の改善に關した主張は極めて適當な議論である。政憲兩黨が今日迄陸軍問題に關し黨としては全く調査らしい調査もせず、陸軍を特別扱ひにして居るに拘らず、獨り舊國民黨だけが陸軍の軍制改革に指を染め、根據ある改革案を提唱して居るのは其主張の内容に多少の缺點の潜んで居るのは姑く別として、兎に角見上げだものである。

二、陸軍當局の意嚮

去る六月中、私が『陸軍の軍制整理』と題した記事を公にして、政黨以外の各方面に於ける人々の主張して居た軍備制限に就ての意見を各論的に紹介してから、國內の輿論とも目すべき諸家の意見には其後も別に變化なく、依然として陸軍の兵力は多過ぎると云ふ抽象的遠吠を繰返して居るに過ぎぬ。故に此方面の考察は重複を避ける爲に省略し、轉じて陸軍當局の陸軍及び國防に對する意嚮を考察して見たいと思ふ。

率直に陸軍當局の陸軍々備に對する意嚮を解剖すれば、國際的には既存兵力の現状維持であり國內的には現存の二十一箇師團を無論此儘にして更に兵器充實、要塞整備及び航空隊の擴張充實

を圖らうと云ふのである。即ち海軍側の八八艦隊建造計畫と併行して、大正廿四年度迄の繼續事業費として計上されて居る國防充備費、軍備充實費、航空隊設備費、機關銃隊充備費、部隊改編費、整備費、國防整備費、要塞整備費、國防整備費等約六億の膨大な経費は、此目的の爲に充當される筈に成つて居るのである。

換言すれば陸軍當局の腹中は、現存兵力廿一箇師團の必要、不必要などと云ふことは棚に揚げて置いて、唯現状の儘では濟まされない新兵器の充實、航空勢力の増加を圖る爲に國庫から現在の經常費以外の別な経費を多分に要求して居るのである。現に大正十一年度の豫算でも航空爆撃大隊の新設費及既存航空各大隊の擴大費、並に航空機の命數短縮に伴ふ經費計約二千萬圓を要求したのであつたが、査定の結果財政上の都合で丸潰れと成つたのである。

一體軍閥が軍備、國防、軍備制限等に關してどんな意見を持つて居るかを窺ふには、最近陸軍で宣傳用に振撒いて居る或冊子に、彼等のハラワタを赤裸々に披瀝してある次の一文が有力な證據である。

軍備縮小の會議が、米國の發起で華盛頓に開かれて居る、ウマク協議が出来れば、人類の爲め

大いに慶賀すべきことに違ひない。個人にしる、國家にしる、喧嘩や戦争の好きなものはない筈だ。平和は人類凡ての欲する所である。併し世の中は事志しと同じからずで、却々思ふ様に行きたがらぬもので向ふからハズレるものは獨り越中フンドシばかりではない。故に國家に軍備が必要な譯で、他人の心の中を見透す警當が人間に出來ぬ以上、矢張り泥棒に對する用心は忘る譯には行かない。大體武裝的平和がイケナイと云ふ以上は、軍備の縮小なんて云ふことは不徹底な話で軍備撤廢の會議をなぜ開かぬ。苟くも一個中隊でも一門の大砲でもあるからにはしやうと思へば戦争は何時でも出來る。米國アタリが勝手な理窟やお座なりを言つたつて、世の中から戦争をお仕舞にしたら、人類は滅亡に近づくんだ。トライチケは國家は力であると言つた眞理と云ふべきだ。力のない國家が隆んとなる例はない榮ゆる國家は必ず世界的に勝つた力を有して居る。只其力の運用如何は、慎重に考慮せねばならぬが、力其物は何處迄も國家の誇りとして維持せねばならぬ。

トライチケでも、モルトケでも其んな事はどうでも宜い。國家が力だと云ふのも異存はない。併し國家の力が軍備であり、軍備が國家の力の總てであると考へられては災難である。又必要の

程度に就ても考へなければならぬ、復讐存軍備は完全無缺のものか否うかを考へなければならぬ、斯くて研究問題は湧いて来る。

三、軍事當局の国防計畫

我國では国防上戦時四十二箇師團、平時二十一箇師團の兵力が是非共必要であるとは、其實勢力から見た陸軍の中心人物、田中前陸相の議會で明言した所である。戦時四十二箇師團を動員すると云ふのは陸軍としては多少の讓歩案であつて、以前は戦時五十箇師團を動員する計畫を樹て、居たのである。其れが近年になつて、有耶無耶の裡に八箇師團が消えてなくなり、四十二箇師團と姿を變へたのである。此動員の基本兵力として、平時二十一箇師團を常備してある譯であるが、現在の實狀から言ふと常備兵力は二十一箇師團より遙に多いのである。即ち朝鮮の衛戍部隊は表面上第十九、第二十の兩師團であるが、實際は高定員と稱して歩兵六箇大隊が他師團よりは餘計に配置されてある。歩兵六箇大隊と言へば、一箇師團内の歩兵隊全部に相當するのであるから、朝鮮には平時二十一箇師團と數へられて居る軍隊の外に、一箇旅團分の歩兵隊が存在して居

る譯である。又千葉の歩兵學校には一連番號のついて居ない歩兵聯隊が一箇ある、其聯隊の兵卒は全國の歩兵聯隊から特派された者であるが、將校は聯隊長以下全部常置されて居る。過般の大演習に新兵器を携へて、東軍に参加した獨立歩兵聯隊と云ふのが、即ち其れである。従つて是等凡てのものを合算すると、我國現在の常備兵力は二十一箇師團と言ふよりは、寧ろ二十二箇師團と云ふ方が事實に近い、精密に言へば、唯師團長が二十一人だけしか居ないと云ふに過ぎぬ。

又各軍隊の内容から觀察すると、我國の常備軍には將校の數が非常に多い、即ち歩騎砲兵の聯隊工兵輜重兵の大隊には、平時の教育及演習には全然不必要な佐尉官が無數にある。復讐隊區司令部と稱する徵兵及在郷軍人の事を司る軍衙にも、平時の必要を超越した將校が多數に居る。殊に師團司令部には平時全然不必要な少將が一名宛配屬してある。言ふ迄もないが師團司令部附少將と稱して、旅團長たる少將とは無論別ものである。之等の將校は將官でも尉官でも平時は全く必要であつて、教育にも演習にも勤務にも關係なく、全部廢しても平時は事を缺く虞れのない冗員である。斯かる制度を陸軍當局が採用したのは、戦前の獨逸の軍制を模倣したのであつて平時の教育を本位としたのではなく、戦時の動員に備へたものである。即ち戦時の動員に伴ひ、新

設さるべき部隊の幹部を、成るべく多くの現役將校で組織したいと云ふ計畫に基いて居るのである。即ち平時の軍事教育と云ふ點から考察すると、我陸軍の現役將校には淘汰の餘地が十分にあり。國民黨には陸軍の内情に通じて居る者があると見えて、同黨の陸軍改革案の綱要には多少之等の點に氣付いて居るなと認められる節がある。

要するに陸軍當局の軍制に對する方針は、徹頭徹尾精兵多兵主義であつて、將校は軍人でも現役者の多いことを希ひ、兵卒は一名でも在隊者の多からんことを望み、其最大限を平時から軍隊内に抱擁して置きたいと云ふのである。洵に結構な方針であるが、事實は當局の期待に反し多兵ではあるが精兵ではないと云ふ結果に陥つて居る、將校も亦然うである。

陸軍當局が現在の陸軍を精兵だと信じて居る點には大なる錯誤があるが、其れは後に説くとして、兎に角彼等が國內の輿論を無視し、陸軍の軍制改善論などに對し、風馬牛な態度を執り、飽く迄彼等の奉ずる精兵多兵主義の爲に、世間から過大なりとされて居る既存常備兵力を、今後も幾久しく保持して行かうとするには、一應傾聴に價する理由がある、其れは斯うだ。

陸軍當局は曰ふ、對手國は露國でも支那でも米國でもどこでも宜い、つらつら我國民性を研究

するに、イザ戦争と云ふ時は其出鼻が非常に強く、常初は敵愾心も頗る昂り破竹の勢を示して鋭鋒當り難きものがあるが、戦期が長くなると腰折れがし氣勢が挫け、所謂士氣に衰へが來て當初の元氣が段々失はれやうとする傾向がある。換言すれば頗る冷熱の甚だしい國民であつて、ドツチかと言へば持久戦には適しない、従つて我國としては能ふ限り長期戦を忌避しなければならぬ故に戦ひの初めに於て、勝敗を一舉に決するやうな作戦方針を執るのが肝要である。又軍需品、兵器、彈藥、糧食等あらゆる物資補充の關係から見ても、資源及び工業力に乏しい我國としてはどう考へても長期戦に不利である。然らば戦争の初期に於て勝敗を一舉に決する手段は何かと言へば、なるべく速に大部隊を動員し、敵國の兵力集中に先立つて我大兵を戦場に送り敵に優る兵力を提げ、緒戦に於て敵軍に大打撃を與へ、敵の出鼻を挫いて其再起を不能若くは困難ならしめるに在るのである。

軍事當局の右の注文は、戦鬪をバタ／＼と片づけて、戦争は是れでお仕舞ひと云ふことにしたいと希望して居るのである、洵に良い考へであつて我國民性の短所を見抜き、其長所だけを善用しやうとする巧な計畫である。併し再考すると遺憾ながら其處に水の漏れる點が幾箇所もある。

即ち參謀本部は日本に許りあるのではない。日本軍と戦ふにはドウしたら得策かと云ふことは、先方でも研究して居る筈である、日本國民の短所長所は、吾々自身よりも却つて外國人の方が的確に見定めて居るかも知れない。アツタツセーが居りスバイが居る現在では、陸軍當局の極度に祕密に附して居る軍事上の事柄迄が、或は外國に知れ渡つて居るかも知れない、としたら我對手國の軍事當局としては當然日本の長所を封じ、短所に乘ずる作戰手段を選ぶものと覺悟せねばならぬ。早い話が米國側ではハワイやガムや比律賓要塞の設備を祕密にしてるに相違ないが、我軍部では其所に備砲が何門あるか迄調査してあるから、對手國にも同様の準備が出来て居るものと見なければならぬ。『丁度好きは危し』と云ふ兵學上の言葉があるやうに、我國としては注文外れの場合を豫想して、如何にせば最も苦手な持久戦を戦つて勝てるかを研究し、其準備をして置くのが計畫として最も大切なものではなからうか。

過激派露西亞の現状を見聞しては、何人と雖も我陸軍が所謂其復讐戦に備へて、一切の計畫を樹て、居るとは考へまい。現に華府會議が米國側の提唱で開始され、軍備制限問題や、太平洋問題や極東問題が擬議されて居るのに徴しても、以前日露兩國の間に横つた危険が近年日米兩國の

間に推移したことは茲に明言しても差支あるまい、米國を假想敵國としたと云ふのに語弊があるとするば、語を換て我國防上第一の懸念國であつたと改めても宜しい。兎に角我國の國防計畫は陸海軍共に其目標を米國として樹立され、平時の演習も其心組みで實施されて居る。海軍大演習や特別演習の想定及仕組を見聞し、又各要塞の實彈射撃演習を目撃し、更に過般行はれた陸軍特別大演習の一般方略を一讀された人々は、何の疑ひもなく壺中の消息を把握し得るであらう。

西伯利に出兵して、獨り居残つた日本の進退を傍證として米國側では我國が米國と戦ふ爲に虎視眈眈として居るとも考へて居るらしいが、如何に陸軍が亂暴でも決して其んな大それた考へは持つて居ないし、能ふ限り戦争を避けたいと希望して居るのである。従つて米國に對しては文字通り國防であつて決して國攻ではない、防勢であつて攻勢ではない、故に假りに戦争が起りうるとすれば、其れは米國が積極的に行動した場合で、我國としては應戰するより外に途の絶えた折である。其所で我太平洋上の防備に就て一言する要があらう。蓋し太平洋上の防備問題は、所謂四國協約及び海軍比率問題に次いで當然起るべき問題とも信ぜられるからである。

目下我國で計畫して居る小笠原島の要塞は、單に敵國海軍の爲に艦隊及航空隊の根據地とされ

るのを防止しうる程度として居る。換言すれば日本攻撃の脚溜りとされるのを防がうと云ふに過ぎない。従つて要塞の程度は敵國から攻撃された場合に、日本内地から救援隊の到着する迄持こたへ得るのを限度として居る。小笠原島の地理的地位を考へたら、米國を脅威する價値のないのは無論のこと、ハワイなどとば比較にもならぬ専守的防禦設備である。

滝美大島の要塞はどうか、是は臺灣と本島とを連結する琉球諸島の一部であつて、地理的關係は横須賀、佐世保、廣島等と毫も變りなく、今日迄無防備で過して來たのが不思議な位である。大膽な米國海軍は、ウッド將軍が比律賓へ渡航する前後に、堂々と帝國政府に交渉してあの邊を測量して居る。又米國の汽船は機關に故障を生じたと稱して滝美大島に突然入港して居る。神經を餘りにとがらし過ぎて棕櫚箒が鬼に見えたのであらう、我國としては米國の全艦隊を收容し得るやうな、あの島と島とに包まれた滝美大島附近の良根據地を、若し一朝敵海軍に占領されたならば、本土と臺灣との連絡は絶たれ、我國と南支那方面との交通は杜絶されるのである。此所に施す防備が自衛に立脚した専守的國防の一發露でなくて何であらう。併し過去の罪を重ねた軍閥だけに彼等か偶々國家の正當な施設を企てる時にも、動もすれば他の疑ひを招くのである。豈

考を煩はしたい。

四、陸兵使用の豫想戰場

我國に渡來した外人が褒めるのは唯富士山一つではないか、日本に來て見出すものは群がる人と茅茸屋根だ。其處に何等の利權もない、何で米國が我内地を侵す爲に戦端を開くものか、我國の發展を恐れ脅威を豫感すればこそ彼等は騒ぐのだ。とすれば或程度迄戦争を避ける途があらう。太平洋の波を遙々乗切つて、何で日本の軍勢が米本國に攻込むものか、其んな悪戦を試みる必要は毫もないのだ、海軍の制限を豫定通りに解決した米國はホット一息したであらう、戦争はお互に避けねばならぬ。

華府會議の圓滿進捗、四國協約の成立、海軍制限の決定、ヤップ問題の解決等で日米兩國の危機は理論上拂拭され、曾て豫想された日米陸兵の衝突地點は悉く夢物語となつた筈であるから、茲に一箇の話柄として過去の豫想を打開けても左して支障はあるまい。米國が日本と戦ふ場合には、戦争の原因がどんな事であつたとしても、日本と支那との連絡を絶ち日本を其本國の中に封

じてか、らなければ、持久戦を續けて勝身はない、其處で當然米國としては支那と握手し、日支兩國の關係を絶縁すると同時に、支那を米國側に左袒することに努力するであらう。中華民國には日米戦に際して中立を嚴守し得る實力はない。民國は兎も角も約百二十萬の常備軍がある、其實力は歐米の陸軍に比すべくもないとした所が、假りに米國から大軍が輸送されぬとしても、米國の將校幹部が渡支して支那の軍隊を指揮し、兵器、彈藥、器具、材料等一切の軍需品を米國から補給し、物資と手當とに事を缺かぬ軍隊をドンドン編成し、日本に當らすとすれば、唯日本の海軍だけで戦争を片づける譯には行くまい。米國の海軍が日本艦隊を撃破して太平洋及支那海の制海權を獲得したとしても、日本海の制海權が尙我國の手に在りとすれば日本は屈伏しまい。支那大陸には食糧もあり鐵もあり石炭もあり掘れば石油もある、是等を利用しうるとすれば、我國は何年でも持久戦を續けることが出来る、戦時支那が直に米國に左袒して起つか、中立を標榜するかは疑問であるが、尠くも日本に好意を表せぬだけは明かである。又支那自ら中立を嚴守し得る實力のないのも蔽ふことは出来ぬ。説いて此處に至れば、從來在支米人か機會ある毎に、排日宣傳に腐心して居る眞意も略諒解が出来るであらうし、日支親善の實を擧げる事が極東平和の爲

に如何に必要であるかも合點が行かう、注意深い讀者は支那代表が華府會議の極東委員會で戦時支那の中立維持に關し保障を得たいと奔走した其目的を既に推察し得たであらう。

話柄はあらぬ方に進んだ、併し讀者は以上の記述に依つて、我陸兵の活躍を必要とするかも知れぬ、と會て考へられた戰場を豫想することが出来たであらう、私は時節柄是れ以上立入つて述べるのを躊躇する、併し我常備軍整理の爲に敷衍を加へたい、假に夢物語りが甦生したとしても、太平洋の彼方から支那に乗込むのと一葦帶水の日本から支那に斷着けるのとは、既に時間的に見て競争の歸結は明かである。故に今我常備軍を整理してもイザ鎌倉と云ふ時の支障には決してならぬ。

五、伊國の整理は他山の石

華府會議の陸軍制限問題はどうかやら立消の姿であるが、陸軍當局は未だあれで全然済んだものとは考へず、將來の擴張に關して何か主義方針の聲明か申合せ位のことにはするだらうと豫想して居る。併し一步進んだ既存兵力の整理をどうしても斷行する必要があると信じて居る私は、此際

我常備軍の具體的整理案を提唱する前に、他山の石として伊國陸軍の現に實行しつゝある整理計畫の内容を紹介したいと思ふ。

英、米、佛、伊四ヶ國共に大戰中異常な陸軍擴張を行つたのであるから、我陸軍と異り戦後復員の必要に迫られ、平時状態即ち戦前の程度に復舊させる爲に、各方面の整理を實行しつゝあるが獨り伊太利だけは單なる復員に止まらず國家の財政關係から、陸軍の軍制大改革を企て、些しも陸軍力に影響を及ぼすことなく、巧な經費節約を實行しやうとして居る。

大戰前の伊國陸軍は二十五師團(十二軍團に編制してあつた)であつたが、大戰中増設に増設を重ねた結果五十六箇師團となつた。其れを逐次復員して三十箇師團に縮小し、今日では之を全國十軍管區に配置するに決し、一軍管區に三箇師團宛を割振つて居る。又現存總兵力は約三十萬であるが、近く之を十八萬に減ずると共に、戦前の三年在營制を改めて、八箇月在營制とすることに確定し、總兵力十八萬、八箇月服役と云ふことは既に法律として公布され、二年後から逐次各隊で實行することに豫定されてゐる。言ふ迄もなく八箇月服役は各兵科を通じた話であつて歩騎、砲工等其兵科の如何に依つて區別を設けてはないから、至極公平な服役年限である。又現

在兵力三十萬を師團數を減することなしに、何うして十八萬に減少する計畫を樹て得たかと云ふに、其處が苦心の存する點であつて其内容は斯うである。

伊國陸軍は軍團編制であつて一軍團は三箇師團から成り、師團の編制は略我陸軍の師團と同様である。唯多少異なるのは軍團編制を採用して居る關係で、軍團長の隸下に航空隊自動車隊(我輜重兵隊)砲兵隊が獨立して存在する點だけである。其處で伊國の軍事當局が兵數の減少及經費節約の爲めに手をつけたのは軍の主兵と稱せられて、最も頭數の多い歩兵科の軍制改正である。伊國の歩兵聯隊は我國同様三箇大隊から成つて居るが、其の内的一個大隊だけは幹部大隊と呼ぶこととし、平時は將校以下の幹部員だけを常置して、兵卒は一名も置かぬことに改めたのである。即ち歩兵の全兵數は此改正で三分の一を減少されたので、結局陸軍の總兵力三十萬が十八萬と成つた譯である。

六、米國の隊外軍事教育

伊太利に於ては、以上の如く三年服役即ち三十六個月兵役を一年にも足らぬ八個月在營制とし

た所に英断が認められる、又歩兵聯隊内の幹部大隊として部下兵卒の皆無な大隊の將校が、平常何をして居るのかに就ては未だ其計畫を發表して居らぬから不明であるが、恐らく將來は軍隊外に於て行はれる民間軍事教育の教官として活動するのであらうと察せられる。

常備軍の整理に關聯し、民間と云ふよりは廣く軍隊外で行ふ軍事教育が當然問題となるから、茲には軍備制限の家元たる米國が、現に實施して居る隊外軍事教育の重な點に就て其梗概を述べ軍政研究家の參考に供したいと思ふ。

米國の政治家外交官には、軍人の肩書を持つた者が可なりの數に達して居る。ルーズヴェルト氏が大佐であつて玖馬戰の勇士であることは有名であるが、デンビー海軍卿が少佐であることや陸軍卿ウィークス氏が瓜生大將と同期の海軍兵學校生徒であつた事や、新米國大使のワイルン氏が大戰中中佐として陸軍省に勤務したことや、駐英米國大使のハーベ―氏が大佐としてハース大佐と併稱せられて居ることなどは、餘り知られて居ない。併し米國の官海には多數の軍人あがり、相當の位置に就て居る爲か、軍隊外の軍事教育は頗る順調に發達し、陸軍省との連絡も密接であつて、總ての機關が圓滿に活動して居る。大戰中に三圓乃至五圓の月謝を取つて、市民の希

望者に軍事教育を施した俄學校の話もあるが、舊いから略すとして現に行はれて居るものは斯んな種類である。

現にハーディング氏は陸軍卿及參謀總長と協議して、市民殊に幼年者に軍事教育を施す爲には各地に少年斥候隊及少女斥候隊を組織させ、其指導教育の爲には優秀な現役將校をドシドシ派遣して居る。又最近の調査に據ると、全國の中等學校中で豫備將校養成團を設け、學生に軍事教育殊に幹部として必要な軍事知識を與へる設備のある學校數は五百七十にたつし、被教育學生の數は十二萬を越え、教官として陸軍省から特派された將校の數は、大佐以下三百三十名を算して居る。又特種の軍事教育獎勵法として、陸軍省では毎年諸學校の卒業生の成績を調査表彰して居るが本年度に表彰されたのは七百九十四の専門學校並に大學、及び十個の私立陸軍學校であるが、此内の大學は毎年一名宛の陸軍正規軍の將校を出し得る資格を與へられて居る

尙毎年夏期には前記諸學校の學生は勿論、一般市民の希望者を山間湖邊の陸軍演習地に集め、四週間前後の軍事教育を施して居るが、本年は豫算が二百萬圓だけであつたので、僅に一萬一千

人を教育したに過ぎないが、ハーディング氏は來年度は尠くも三四萬人を、又將來は毎年十萬人宛を教育して行きたいと演説して居る、以上は隊外軍事教育の概略であるが、米國が軍備制限を實施すると同時に、斯かる經濟的軍事教育を奨励しつゝあるのは、我常備軍整理の理を斷行するのに好参考となるであらう。

七、師團數の減少か定員減か

露國の現状は御覽の通りであつて、數年若くは十數年後の成行がどうなるかは不明であるが、先づ當分の間は此方面に對する國防上の懸念はない。若し過激派の防止と云ふことになれば、槍ぶすまでは何うにも成るまい。支那の將來も一寸豫想出來ぬが、南北が統一されて有力な國軍が組織され我國を脅威すると云ふ時機も先づ前途遼遠と見て大過なからう。而して最も懸念の焦點であつた米國との關係は今更縷説する迄もなく、四國協約も成立しスワとなれば我國唯一の救命機である海軍力さへ縮小制限することに同意したのであるから、差當り使ひ場のない我陸軍常備兵力を整理するのは、今が絶好の機會であらうと信ずる。

常備兵力の整理と一口に言つても、戦時の動員に際して得らるべき兵員、即ち戦時得員數の問題はドコ迄も顧慮し、陸軍を備へてあると云ふ目的は達せられるやうにして置かなければならぬのは無論であるから、私は現在の常備軍を前提として得らるべき戦時得員に激減を來さしむることなき範圍に於て、我常備陸軍の整理を斷行したいと考へて居る。常備軍の兵力を整理し、事實の節約を圖るには、兵數を減少する方法と兵役年限(在營年數)を短縮する方法の二つがあり、又兩者を併用しても宜いのは言ふ迄もない。

又兵數を減少するにも其方法は種々あるが、大體から言ふと師團數を減少し、既存師團の幾個かを全廢するか、或は既存師團數は其儘にして置いて平時定員だけを減少し、在營兵の數だけ尠くするか、或は兵役年限の短縮は附言する迄もなく、現在の二年在制營を更に短縮して一年半にするか一年々四月にするか、或は更に思ひ切つて一年にするかを指すのであつて其影響がどうなるかは専門的研究を必要とするが、單に經費節減と云ふ點だけの考察は極めて簡單である。

目下世間に公表されて居る陸軍軍制の改革論中、常備軍整理の具體案に觸れて居るのは、共に

現役ではないが軍人としては橋本中將の一年現役論、及び河野少將の十二箇師團論であつて、政黨としては、既に紹介した國民黨の一年現役論である。橋本中將の著述『經濟的軍備制限論』に據ると、一年在營説だけは堂々として居るが、徴兵採用數を増加し年々生ずる在郷軍人の數を現在以上に増さうとする主張であるから、一種の精兵多兵主義であつて、現在と略同一な經費で、現在よりも多數の在郷軍人を養成しやうとするのである。従つて其意味で經濟的と云ひ得るかも知れぬが、現在の陸軍の經常費を節減すると云ふ目的には添はない。併し其一年現役論は立派なものであつて傾聴に値するが同中將が斯かる不徹底な主張を試みたのは、畢竟一脚を中將と云ふ階級に踏止め一脚を民間に踏込んだ妙な立場が、己むを得ず爰に至らしめたのであらうと推察して實は同情に堪へない。

橋本中將の經濟的軍備制限論が全然陸軍豫算に觸れず、陸軍の經常費に何の關係もなく、唯一個の理想的陸軍編成論に終つて居るのは餘りに物足りない、併し其在職中一度も軍政方面の職務に従事した経験のない同中將に向つて、陸軍制度の改善と經費増減の關係迄を説明させやうと望むのはチト無理かも知れぬから、他日の研究發表を期待する事にして此邊で遠慮するとしよう。

河野少將は現に島田三郎氏等と連合して軍備制限の宣傳をして廻つて居るのであるが、其十二個師團で澤山だと云ふ演説は、曾て門司で試みられたのを最初とする。同少將は田中義一男の郷里萩の生んだ軍閥の異端者であつて、軍閥の搖籃長州の鼻つ先で日本の陸軍常備兵力は十二個師團で十分だと演説したのだから、豫て期した事とは言ひながら、軍閥は定めし仰天したであらう、同少將の十二個師團説も世界の現状と國防上の見地から立論されたものであつて、軍事費と云ふ方面に關した事柄には觸れて居ない。併し細密な制度を彼れ是れ言はずに、頭から十二個師團と切出して居るのであるが、經常費減少の關係を頗る明瞭に計算される、故に念の爲め茲に現在の二十一箇師團を十二箇師團に減らしたら、略幾許の經費が年々の陸軍經常費から節約されるかを掲げて見やう。我師團一個の平時國內衛戍地に於ける經常費は、年約五百萬圓である。従つて既存師團二十一箇の經常費合計は約一億五百萬圓であつて、之を十二師團に減すれば、其經常費は約六千萬圓となり、結局、現存全師團の維持費が毎年約四千五百萬圓を節約し得るのである。四千五百萬圓と云ふ國費が浮くとしたら、教育機關の充實などは談笑の裡に解決が着くであらう。陸軍當局の現在の態度に鑑みて、九個師團の全廢が實行可能なりや否やは別問題であるが、

河野少將の主張は議論としては徹底して居る。

由來何事に由らずイザ改革と云ふ場合には、當局としては多く現状維持に傾き、改革論者としては思ひ切つて英斷を施さうとするが、機運に促進された實際の改革は、保守急進兩説の中間を縫ふた折衷案が實行されるように見える、師團數の減少となると、我國の現状に鑑みて餘りに多くの故障が伴ひ、先づ差し當つての實行は不可能である。第一に陸軍當局が首を横に振る、政黨が賛成を躊躇する、假りに内心師團幾個かの全廢を適當と認め必要であると氣付いても、黨略上之に觸れまいと努めるのは毫も疑ひない、と私は確信して居る。現に政友會の如きは、師團減少には身振るひをして居る。國民黨でさへも師團減少と云ふことは嘔びにも出さない、尤も黨略本位で行けば地方人士の反感を招くのは眞平であらう。師團減少が政黨の鬼門だとすれば、之を力説しても軍閥の凱歌に終るのが必然であるから、常備軍の整理を期する爲には、是非其他の方法に依つて同じ目的を達せねばならぬ。

政黨の立場に無難であつて、陸軍當局が其れならば多少乘氣に成るであらうと推測されるのは平時定員の減少に依る常備軍の整理である。前議會中に一寸内地師團の朝鮮移轉説が話柄と成つ

たことがあつた。其れは單に話柄に過ぎなかつたので、別に何時朝鮮へ内地師團を移すと云ふ計畫を樹てたのでも何でも無い。所が此話を傳聞した某代議士の如きは、直に反對運動を始め、第十四師團(宇都宮)などを移轉された日には、宇都宮の市制は成り立たなく成ると、影のやうな噂を追つて狂奔して居た程である。假りに師團數を半減することにしても、イザ何師團を廢止しやうかと云ふ段取りに成つたら、東京、大阪、小倉などは案外平氣であらうが、其他の各師團の衛戍地などは、政黨員や有志家の狂奔で蜂の巢を突ついたやうな騒ぎとならう。政府と陸軍當局とに斷乎たる決心があるとしたら、國家の爲にする仕事だから一刀兩斷的に解決が出来る筈だが、現状維持で御茶を濁さうとして居る手合に對しては到底其れを期待することは出来ない。

其所で愈々平時定員を減少するとしたら、之を幾許にしたら宜いかと云ふ問題になるが、私は現存師團を半減したと略同様な整理を斷行する爲に、米國の正規軍十七萬を目標とし、民間軍事教育を更に一層獎勵發達させる途を講ずる條件の下に、次の如き軍制改革を決行するのが、我國の現状に照して最も適當であると共に、實行に際し突發する故障が最も少い整理案であらうと確信する。

- 一、近衛師團の廢止
- 二、騎兵旅團全部(四個)の廢止
- 三、歩兵旅團司令部の全廢
- 四、全師團歩兵隊兵員の三分一減
- 五、戦時の動員を本位とした現役將校の大淘汰を敢行し其數を教育本位の最少限度に改める
- 六、一年四ヶ月在營制の實施
- 七、本科以外の陸軍諸學校廢止

以上は整理の實施と同時に陸軍經常費の大削減となるのであつて、此の外に國民の兵役負擔を公平單一とし、貧富學歷の如何に依つて生ずる怨嗟の聲を一掃し、思想の惡化を防止する爲には不公平極まる現行徵兵令及び關係法規の大改正を斷行する必要がある。即ち一年志願兵制、一年現役兵制(元の六週間現役兵)等の廢止は最重要なものであつて、兵役服務者と兵役免除者との關係を公平ならしめる途を講ずるのも素より見逃がし難い事である。又整理に關聯して不具的發達を遂げた我陸軍を救ふ爲には、整理に依つて生ずる軍費の一部を以て、航空勢力の充實、新兵器

の普及を圖らねばならぬ。併し是等の充實は陸軍當局が常備軍の整理を斷行しさへした、易々と出来る事柄であるから、國民は現在其經費を別に支出する必要は毫もなく、正面から陸軍の缺陷を咎めて其反者を促し彼等をして其經常費から財源を捻出させたらよいのである。

八、近衛師團廢止と善後策

現に宮内省では近衛師團司令部の移轉を圖りたいと云ふ意見が起つて居る。陸軍當局は恐らく空谷の聲音として刮目するであらう、東宮殿下御外遊の賜ものか宮内省へ新人の入込んだ結果が其れとも時代の推移が自然に促進した舊人物の覺醒か、其邊は未だ詳でないが、兎に角宮内省側から斯かる意見を聞くことは喜ばしい現象である。一體我國の近衛師團は歴史的に皇室と特別の關係があるのも何でもない。立派な戦列師團であつて、日露戦役の時などに最先きに出征して居る、又其内容から見ても他師團に變りのない戦略單位である。唯平時東京市内に衛戍して御守衛及儀仗の任務に當つて居るだけである。故に私は儀仗及守衛の任に當るべき部隊を特設することを條件として、此際近衛師團を全廢したいと思ふ。

又近衛師團は衛戍地が全部東京である爲に、之を廢止しても決して地方師團のやうに引留め運動は起らない、嘗に起らない計りでなく、竹橋内の歩兵聯隊などは兎に角とし第三(赤坂區内)第四(同青山練兵場一隅)兩歩兵聯隊などは、其敷地利用の點だけを考へても、可なり有意義である。尙現在の近衛師團と云ふならば、日本全國の師團は全部近衛師團であつて、彼此區別を設けるのは意義を爲さない、更に事變に際して王城の治安とか東京市の秩序とかを維持する爲には、別に立派な衛戍部隊として第一師團がある。従つて此方面に對しても何等懸念の必要がない。

其處で近衛師團全廢後の儀仗及び王城の主衛は何うするかと言へば、讀賣新聞華府會議記念號にも曾て記載した通り、歩兵一箇大隊及騎兵一箇中隊から成る儀式と警戒とを専務とする特種部隊を組織するのである、其名稱は近衛守衛隊としても宜し、近衛儀仗隊としても宜い。要するに此部隊は全然戰爭に關係のない特殊部隊とするのであつて、現在の近衛師團は人員も多く他師團と同様戦列師團である爲に、其服裝なども特別なものとする譯に行かないので、單に下士卒は帽子の徽章を更へ、將校は帽子の徽章の外に正裝の帽子の色を赤色にしてあるだけであるが、僅に歩兵一大隊、騎兵一中隊となれば、經費上服裝の改善も自然容易になるであらうし、又之等の儀

式用の部隊を縮盟列國の皇族や、大官の來朝した場合に警護と敬意の意味で附隨させれば、深厚な好意の表現となり國交親善の一助ともなるであらう。

最後に近衛儀仗隊の編成をどうするかに就ては二案ある、其一は全國の師團から新兵教育約四個月を終へた兵卒を選抜特派して、一ケ年間の後除隊させるのである、他の一つは一年四ケ月の在營年限を終つた者から志願に依つて採用し、一年間服務させるのである、特に後の方法に據れば、官費で東京見物が出来た上に、光榮ある任務に服するのだから、恐らく收容し切れぬ程の志願者があらうと確信する。

九、騎兵四個旅團の全廢

騎兵が減び行く兵種であることは、曾ても一言したのであるが、最近河野少將の發表した意見に依ると、我陸軍を縮小するには騎兵隊を其儘にして置いて、寧ろ事變用に必要のない重砲兵や野砲旅團を縮小した方が適當であると稱せられて居るから、更らに騎兵旅團の不必要な所以を説明し、重砲兵や野砲旅團は却つて存置の必要があつて、騎兵隊を縮小するのが適當である理由を

明かにしやう。我陸軍には現在全師團に一箇聯隊宛の騎兵隊があり、別に四箇の獨立した騎兵旅團が設置されて居るのである。從來我軍事當局者が何故に斯く迄に騎兵隊の擴張をしたかと言ふと、舊露帝國の陸軍を目標とし、滿蒙の曠野を豫定戰場と想定したのに出發し、露國の哥薩克騎兵を對手として活動させやうとしたのに原因したのである。然るに其露國は到底近い將來に於て我國の敵たり得る資格はなく、曾て我陸軍當局を脅威した哥薩克なども、最近は全く當年の倂を失ひ、却つて反革命運動の中心勢力としてレニン政府に對し宛然一敵國を爲して居る。斯かるものに對して何で昔日の懸念が要らう、爰に騎兵隊縮小の第一因を認める。

又戰鬪部隊としての騎兵の價値は、兵器の絶大な進歩に依つて著しく減殺された、或は減殺と云ふよりも不可能と云ふ方が寧ろ適當であるかも知れぬ、馬上に人を乗せた巨大な姿は射撃の好目標であつて、一分間六百發の彈丸を速射する機關銃の面前では、勇敢な騎兵の襲撃も瞬く暇に人馬諸共南無阿彌陀佛である。若し戰鬪兵種としての騎兵に今尙大なる期待を持つ者があるとしたら、時代錯誤の甚だしきものであつて、彼は兵法を識らぬのである。併し過去の遺物と見做し得る騎兵でも偵察と傳令勤務の範圍で依然存在の價値を認められて居るのは言ふ迄もない。即ち

航空機の出現及其發達で多少偵察の領域を蠶食されたのは事實であるが、尙夜間偵察などに騎兵の活躍を要することは從來と毫も變りはない。蓋し上空からする垂直偵察だけでは、不十分であつて、殊にカモフラージュの逐次發達して行く兵事界では、是非共地上から敵に接近して試みる水平偵察の結果に待たねば眞の敵情を極め難いからである。

併し單に偵察と傳令勤務許りに當らせるとしたら、師團騎兵だけで澤山であつて、平時から騎兵旅團四個を常備して置くのは贅澤である。従つて現存騎兵隊の縮小を適當とする第二因が爰に見出される、又假りに今日騎兵隊を縮小したら、將來臨時に大騎兵隊の必要を感じた場合に不都合があるかと云ふに、其の懸念は毫もない。

騎兵隊は動員 際して殆ど在隊兵だけが出征するのであつて、豫後備兵の大部分は馬匹の關係からどうすることも出来ぬのである。故に今後は馬政局の産馬事業や在郷馬の制度を擴大して、常に優良な馬匹を多數に保育して置いたら騎兵は何時でも間に合ひ、騎兵隊の新設などは極めて容易に實現されるのであるから、此點から觀察しても騎兵隊縮小の立派な理由が見出される。以上の理由で私はドコ迄も騎兵旅團四個の全廢を主張するのである。

一〇、新陸軍の陣容

以上の記述に依て、國內問題としての常備軍の整理が、如何に取扱はれつ、あるかを察知するに足るであらう。其處で筆者は立直しを要する常備軍の新編成に言及し、現在の我陸軍を如何に整理すべきかを明かにしたいと考へる。

各國陸軍が皆然うであるが、由來陸軍の主力を成すものは歩兵隊であつて、歩兵を軍の主兵と稱することは各國共通の事實である。故に常備軍の整理に着手する場合には、先づ歩兵隊の編制に變改を加へるのが順序である。蓋し歩兵以外の比較的少數なる騎、砲、工、輜重兵等の整理縮少を斷行した所が、之等の兵種の整理文では整理らしい整理が實現されぬからである。然らば全國師團歩兵の兵力を幾手にしら宜いかと云ふに、筆者の主張するのは歩兵隊員の三分の一減であつて、全歩兵の兵力を現在の三分の二に改めやうとするのである。

師團内には四箇の歩兵聯隊があり、各聯隊内には夫れ夫れ三個の歩兵大隊があるから、其の歩兵の兵員を三分の二とする方法は幾らもある。即ち伊太利陸軍の實行したやうに、聯隊内の三箇

大隊を二箇大隊とし、他の一箇を幹部員許りにして置くのも一方法であるし、又各大隊の兵員を一様に減じて隊數に影響なく兵數の減少を實行するのも一方法である。従て各兵科に亘つて兵員の減少を企てる代りに、幾個かの師團を頭から全廢するのも無論一方法に相違ない。併し考ふべきは戰時動員に際し充員される部隊の編成に便宜多からしめることが肝要であつて、孰れの方法を選定すべきかは主として此の點に立脚すべきである。近き將來に於て戰爭の勃發するや否や又其の戰爭に日本が参加するや否や自から別問題であるが、苟も相當の軍備を存置し、之を一朝事ある日の軍備として養ふ以上には、其の一朝に際して都合好からしめて置くのが自然であり、妥當である。其處で筆者は三分の一を如何にして減少すべきかを説くべき順序と成つたが、無論隊數を其のまゝにして、單に兵數を各隊から一様に減殺する方法に依つて整理を斷行しやうと主張するのである。

茲に主張する歩兵隊定員の三分の一減少は、歐州大戰中の經驗に基き或る一部の論者が主張した所の、三單位制を採用せよと云ふ議論とは全然其趣きを異にするのであつて、飽くまでも我陸軍の現制を其まゝに存置し、變革を加へざることを條件として居るのである。併しながら兵員の

減少を實行する場合には當然其の兵員の教育及び指揮の任にある將校の数は、現存の定員を必要とせぬことに成るのは明瞭な事實であるから、現在の戦時要員本位の定員を減少し、以前の如く中隊附の將校は三名とするのが至當である。

將校の冗員淘汰は、獨り中隊附將校の定員減少に止らず、進んで聯隊本部、旅團司令部、師團司令部及び聯隊區司令部の將校も平時必要な程度に淘汰すべきであつて、現在の如く戦時要員に充つる將校を各司令部附として爲す所もなくゴロゴロさして置くのは不經濟極まる話である。陸軍當局に若し誠意があるならば、斯かる將校遊民は平時編制から一掃すべきである。

一方淘汰すべき將校に對しては、伊國陸軍が其の淘汰將校に對して實行して居るやうな一種の休暇規則を設け、其期間中現役俸給を支給し、各人をして其の間に勉學なり事務の練習なりを爲さしめて、轉職の途を講ぜしめるのも有力な一方法に相違ないが、筆者は我國の現状と、將校の希望とを參酌して、彼等退職者に纏つた一時賜金を與ふることとし、自發的志願者の多くを淘汰するのが最も妥當な方法であると確信するのである。現在の師團は餘りに多くの現役將校を養成し、彼等の全部を無理に收容して居るので進級は頗る行詰り一階級に十數年間も置き据へにされ

て居る者も尠なくないから、一時賜金の程度如何に依ては相當の退職志願者があることと見做しても大過はなからう。

各隊の定員減少に伴はしむべき重要な軍制改革は、二年在營制の短縮であつて、筆者は現在の二年在營制を一年四ヶ月に短縮するのが、實行が最も簡單であつて且つ經費節約の便法であると確信する。而して此の一年四ヶ月在營制は歩騎砲工輜重兵科を通じ、苟も現役兵として入營する壯丁には一齊に服役せしむる制度たらしめねばならぬと考ふるのである。即ち陸軍兵卒の在營年限を單一にし不公平のないものたらしめやうとするのである。何故に一年四ヶ月在營制を適當にして實行簡易なりとするかは、拙著『軍備制限と陸軍の改造』中に詳説してあるから、茲に重ねて説かぬが、現行軍制の如く、或者は二年、或者は一年と貧富學歷の差に依て兵役の負擔を二三にしているのは、頗る不公平な取扱ひであつて、不知不識の間に徴兵忌避の念を助長する虞れを含んだ悪制度である。

筆者が一年四ヶ月在營制を力説するには、保守的な陸軍當局に對する政策的意味をも含ましめたのであつて、其の理由は斯うだ。假りに國民黨の主張する如く、一年現役とすれば、兵卒の武

技演練の程度を犠牲にした上に、徴兵手續が非常に面倒となり、年々の入營時期を変更するか、年二回以上の入營期を設けなければ完全な軍隊教育を実施し難いことに成るが、一年四ヶ月制とすれば、新兵教育期間たる四ヶ月間は、新舊兩年度兵が共に在營して居るから、毫も教育及勤務に支障なく、且つ入營期は現在と同じく年唯一回で事は足り關係法規の改正も不必要である。従て徴兵上の経費も増加せず、關係地方官廳との關係も従前通りであつて、明年度からでも直に行が出来るのである。換言すれば保守的な陸軍當局の一番喰ひ付き易い案であるからである。

最後に以上數項の所論を要約すると、近衛師團の全廢、騎兵旅團四個の全廢、歩兵旅團司令部の廢廳平時定員の一般的三分の一減少、現役將校の大々の淘汰、本科各兵種以外の各學校の廢止及び一般的一年四箇月在營制を取行すれば、將校數を半減したよりも經費節約の點から觀て一層効果があり、而も基幹部隊として二十箇師團が現存して戰時の充員にも便宜であるから、各方面から考察して實行が容易であると確信するのである。(大正十年十二月末日記)

カーキ色物語

カーキ色物語と申したとて、赤煉瓦の、腰に鎖の、ホイ彼れかと早合點し給ふては滅相な御無禮、然うなれば唯周章者では済まされぬ筋合、是れは苟くも國家の干城、護國の礎、スッ鎌倉と云ふ時は、二つ無き命を君の御馬前に、花と散らして惜しみ給はぬ所の、世が世なら人斬りの朱鞘の太刀を落し挿し焼豆腐たべたか二本挿して四角張り、突き袖して肩で風切る寛瀾出立、然うあるべきを今様故にカーキ服に衣更へ、木刀は牛蒡劍に、太刀は洋刀に、六韜三略も何時か操典と變りつるトテトツトウの軍隊の毛色變はれる事實物語と憚り乍ら會得あれかし。

離縁箱

アラブ種の駒に洋鞍を置いて、敷島の煙を片頬に流して、棒を呑んだやうにピンと成つて澄まし込んだ他所行きの姿勢は、觀兵式場で御見受け申す立派な御姿だが、さて秋も機動演習となつては、そほ降る秋雨に天幕露營、終日の奮闘と燃へぬ生樹の烟とで攻め立てられながら、こころり

横になつた敷藁の上から、從卒、未だ夕食は分配にならぬか、と云ひながら腰に下けた泥まみれの水筒から、爛冷しも昨夜の御流れをきこし召す所たるや、慘憺たるものだとは誰れやらの述懐である。

職掌と決つて見れば、何を問はず他所目に見た程氣樂な物でないのは動かされぬ事實である。軍人たるを理想とし又軍人に戀をするとも、其れは素より諸君の御自由であれど、茲には唯離縁箱の由來を書いて、商買往來や女大學などで教育されない現代男今様女の一笑に供する。

所は何んでも大阪附近との事なるも詳しくは知らず、一頃中尉として某師團の副官を務め居たる男ありしが、將校仲間からは半ば悪口の高等小使など罵しらるゝもの、師團へ出勤の往くさ歸るさ、乗馬本分の手綱捌き見事なりとて、之を垣間見たるさる方の嬾様、何時の間にやら生温るき風に吹き巻くられて、彼と彼の女とは戀に落ちしが、月下氷人が出雲から來たか何うだか其所までは聞き洩らしたれど、金屏風に四海波諒うて、床に懸けられたる蓬萊の軸と共に、浮生の目出度き難有さを味はへる程に、盆も去らぬに正月が來て、二つの星は三つとなりて中隊長殿と親展呼ばはりさる、身となり、榮轉の幸を二人共に喜びしが、世はをしなべて寸前尺魔の誓を

其まゝ、馬から下りて背囊擔ぐ職掌と早變りせる悲しさ、雨の日の行軍、雪の日の演習にも御役目大事と唯半日の所勞もなく勤め續けたるある一日、十幾里の行軍と演習とに勞れて聯隊と共に歸營の道すがら、端なくも戀女房を残したる我が家の門口を過ぎる事となりしが、其時の中隊長殿の雄姿は又格別にて、耳も鼻も目も口も汗と塵埃とに灰色に變りて、唯七つの穴が不思議にも残れる見苦るしさ。搦て、加へて餘程疲れ給ひしか、片脚の調子外れに足裏の豆の数も忍ばるゝに、唯顎許りを前に突き出し唇は三尺も後より漸う追縋る有様なれば、負ひ給へる背囊の百貫もあるかと思はる、爲體、之を覗き給へる戀女房の君も流石に啞と呆れ果、郎君の歸りを待つ間に御自分の荷造り済まし、離縁を強請して破鏡の凱歌と云ふ新機軸を出だし、背囊を横目に一瞥して其ま、實家に歸りしとなん。其後此の噂は日本全國の部隊に傳はり、爾來背囊を離縁箱と呼ぶに至つたのである。背囊の又の名を提灯箱とも云ふが、是れは其形の似通ふ所から來たのであらう。

誰れに似てゐる

大閤が猿に似て居るのでは無くて、猿が大閤に似て居ると澄まして言上したのは曾呂利新左衛門であつたが、是れは禿違ひの苦笑談である。陸軍部内では曾て士官學校長であつた中將橋本勝太郎を禿勝と呼んで、誰一人として橋本閣下とは呼ばない。彼れは極めてミリメートルではあるが、士官學校の成績は勿論、陸軍大學の成績も最優等であるが、其風彩が餘りに擧がらぬ爲めに軍刀組の一人であるにも拘らず、獨逸留學の時期が大分遅れて大佐の時に始めて留學の光榮に浴したのであつた。彼れの禿頭が日本陸軍の代表的軍人として獨逸人間の評判となるのを恐れた爲めに留學の時機が遅れたのだと聞いては吹き出したく成る。彼れが大佐として第一師團の參謀長を務めた頃は、閑院宮殿下を師團長として頂き、師團管内に暴威を逞うしたので、下克上の批難が常に絶へなかつたが、當時旅團長であつた温厚なる依田少將及び氣慨ある仙波少將とが見るに見兼ねて、參謀長たる彼れを旅團に呼寄せ空前絶後の訓戒を與へた事さへあつた。恰度其頃の話であるが、師團下の聯隊長として唯一人彼れ禿勝を眼中に置かず傍若無人に振舞つたのは例の出中義一である。或る日田中が麻布聯隊からの歸途青山の御所前へ差しかゝると、十間許り前を同じく御所前に向つて歩るゐる軍人がある。後から見た禿具合が禿勝其儘であるし、其上師團司

令部の門前であつたので、參謀長禿勝と早合點し、好い道連れと思つた田中は、足を早めてオイ待てオイと、二聲三聲呼びながら追纏ると、クルリ振返つた其男の乃公かと云ふ顔を見ると南無三、禿勝と思つたのは上原中將（現參謀總長元帥）流石の田中も、時は一方ならず恐縮して、イヤ是れは何うも閣下失禮をと云つたきり義一の智慧袋は品切れと成つた。六尺近くの大男田中が穴は無いかと間違付いた風は御氣の毒至極であつたが、一體誰れと間違いたのかと云ふ上原の一言に、田中義一漸く蘇生の思ひをなし、禿勝にと咽喉まで出たが、きわどい所で實は橋本と間違へましたと誠を語れば、之を聞いた上原中將莞爾として其れは難有いと云つた時、其顔には喜色が流れた。其れも道理上原は日本陸軍無双の禿頭で、彼れの軍帽は止りの無い爲めに何時も四五度位の傾斜をなして居る。所で後頭に五六本毛のある禿勝と間違ひられたのを光榮とする氣分も忍ばれるではいか、但是れは麻布三聯隊の將校集會所で田中の語つた實話である。

ハイ忘れしました

軍隊教育、新兵教育、などと盛んに教育を振廻すが、教練と云はず學科と云はず、洋刀連の教

育振を拜見してると、下手な禪問題よりも奇抜なのがある。毎年十二月の上旬から翌年三月下旬に亘る新兵教育なるものを目撃すると吹き出した事柄が、年々歳々少しの變化もなく繰返されて居るから堪まらない。將校は指揮官であると同時に教官である點から見れば、士官學校の教育科目に教育學や心理學の初歩でも加へると、將來の青年將校に教官たるの手腕識見を持たせる事が出来ようと思ふが、一年兵役論を唱へる政治家は在つても、一年兵役を完全に實施し得る爲めの教官指揮官の養成の方に着眼した人の無いのは遺憾至極である。門外漢は姑く別とするも高級軍人が其邊に注目して、不完全極まる士官學校の學制に氣の付かぬのは、根本原因を顧みずに結果許りに齷齪して、御氣の毒な次第と言はざるを得ない。早い話が現在の新兵教育の所謂教育なるものは、師範學校の二部教育をさへ受けない中學卒業生が、小學生徒を相手にして御茶を濁すのと大差は無い。然しこんな育教が繰返されつゝあつたにも拘らず、戦役毎に勝利を得たのを見れば、青筋立て、彼れ是れ言ふ者の方が或は愚で曲りなりにも治つて行く所の中の面白味があるのかも知れない。カーキ色物語と云ふ標題を掲げながら話しが理に落ちや面白くないから進行係を俟たずに此邊で討論終結として、ハイ忘れましたの手續きは斯うである。

軍隊では練兵をする外に新兵にも、古兵にも若し砲兵科で言ふなら舊兵にも、學科として彈道の要領だとか各兵種の性能と云つたやうな至つて初歩な簡單な事柄を話して聞かせ、又時々復習として従前に教へて置いた事柄を試問するのを例として居る其場合に、所謂教官なる上官が兵卒に向つて、『歩兵は何う云ふ具合にして戦争をするか』と問ふ其答に、指名された兵卒が答への出来ぬ時に『分りません』などと答へたら其れこそ大變教へ様話し方の巧拙を度外して居る教官殿は反身になつて、『分らないのぢやあるまい、忘れたのだらう、此間教へたぢやないか』と來る。其所で様子の分らない兵卒は何んでも忘れましたと答へれば無難に通過するので、従つて試問される場合には答解を考へるよりも『ハイ忘れました終りッ』で早く幕の下りる事を祈つて居る。

新兵教育も終つて愈第一期檢閲と云ふ過ぐる年の或日、鹽部の練兵場には檢閲をうける筈の新兵さんが整然と例の寫眞を撮つて居る。勳章を付けて居る爲でもあるまいが、殊更に左肩を前に出して居る有様は益々『ハイ忘れました』が萬全の策らしく新兵達の眼に映つて居る。教練の檢閲が済んで聽て學科の試問と云ふ段取りに成つた時、先づ第一番に誰に試問しやうかと一通り見渡した後で所謂教官の某中尉が『雨宮!』と指名して未だ何も問はぬ先に聲鮮かに、

「ハイ忘れました終りッ！」

検閲官も随行員も思はずアツ。

外套 副官

人の才能が出世の一要素であるのは疑ふ餘地も無いが、人の美貌も亦中々經視し難い一要素であることを附言したい。玉の輿を乗物にしやうとする婦人は氏よりも育ちよりも缺く可からざる要素として尤物たることを必要とするのは、將來は兎に角今日までの事實に於て誰しも異存の無い所であるが、堂々たる男子の生涯までが其面貌の美醜に依つて左右せらるゝ事の珍らしく無い事實を見聞しては、聊か憤慨したくもなる。然し天の配劑は好うしたもので、最後の凱歌は裸一貫で押して行く怪男子の頭上に唱へられる例も尠く無いから、無鹽も醜夫もさして憂へる必要もなからう、と斯う書くと諸君は或は筆者は餘程出來の悪い品物だなど推量されるかも知れぬが、早まつては不可ない。室町筋の話なら他人様に敗けは取らぬ事を一言する光榮を有する、言譯する方に弱身が在りさうだから、内兜を見透されぬ先に筆を本文に染める。カーキ色服を着た世界を

見渡すと男らしき男の隊附に多くて、ナツチヨコチヨイの官衛附に多いのは争はれぬ傾向である殊に副官も陸軍部内の高等官衙と言はれる旅團以上の連中になると一層其傾向が甚だしくなる。法螺を吹くのは參謀官に多く、御白粉を付けるのは副官に多く鯨飲するのは隊附に多い。一寸御斷りするがカーキ色の世界と云つても、茲に月且したのは貧乏少尉以上の事と合點して頂きたい其所で外套副官の由來を書く段取に漸く到達したが、所謂高等官衙の下級副官たる中尉殿に與へられた尊稱が外套副官の四字である。其所由は旅團長なり師團長なりの出張旅行の御供をして、精々見て呉れの好い所も賣物にすると同時に、其の唯一の職務が閣下の外套捧持に外ならぬからである。又時に一段利巧なものになると閣下の靴脱ぎの手傳ひを希望する從七位殿を見受けることもある。

聯隊附の青年將校諸君、椅子にこびりついて胃を悪くする夢を見ずに、練兵場で號令演習でも仕給へ。東海道を進んでも中山道を歩いても、疲れずに旅をしたら京都へは着けやうぢやないか。

初 陣

日本軍の強いのは吾々許りでなく、現在歐洲戦の交戦國中で一番強いらしい露軍の間に盛んに噂されて居るから、先づ強いのを原則と認めて好からう。然し其所に多少の除外例のあることも欺かれぬ事實で時には減相な芝居をなされた軍人も尠くは無い。自ら拳銃試めしをしたと云ふ將校もあるが名譽の爲に姑く措いて、周章てた射撃號令に兵卒を笑はした某大尉を紹介する。練兵場では左肩を擧げて勇壯なる某中隊長、射撃號令をかける毎に、射撃目標、距離の測定、發射の號令まで立派なものよと褒められ居たりしに、旅順の背面攻撃に初陣して初めて敵に遭遇した時の號令は、日頃の沈着も何處へやら方向も目標も距離も射撃速度も全部抜きにて唯、發射、うてうて！ 兎狩りぢやあるまい。

寫眞を撮られる

絶對服従の義務を負ふてる兵卒は、上官の前で浮々話も出来ぬので、聞かれて不都合な話には獨創的な暗語を使用して居る。必要に迫られると教へられずとも誰かしらが智恵袋を搾つて其れ相應に役に立つだけの考案をするから不思議である。貴様は又寫眞を撮られたな。ウム上着のボ

タンが一つ外れて居たからさ、是が今日の第一回の撮影だアハ、上官と云ふ洋刀にも肩に付けた正札の權威だけぢや彼等の會話の會得は難かしい、軍隊では上官から氣を付と號令されると皆一齊に不動の姿勢を取る。號令に基づいて不動の姿勢を取るのは當り前だから可笑しくも面白くも無いが、其所にも一つ外に不動の姿勢を號令なしでとらねばならぬ時がある。上官から話しかけられた時が其れだ、御小言頂戴の場合などは適切な一例である。所が不動の姿勢は直立して堅くなる具合が、寫眞を撮る爲めに澄し込む外形と一寸似て居る、唯自ら進んで澄すのと餘儀なく澄すのと差がある許り、との理由から御小言頂戴の又の名を寫眞を撮られると申すのである。

監獄へ行く

詳しくは電報にてと云ふ手紙を出した着炭君は、其爲に天下に名を擧げた唯一の代議士であるが、是れは某聯隊へ入營した新兵さんの演じた此頃の喜劇で『監獄へ行く』と云ふのが其外題である。

新兵可助君は入營以來のべつ幕なしに郷里の實家から送金を受けて、其際限なさに父兄を驚か

して居たが、中隊長から餘り送金せぬやうにと云ふ注意を受けた可助君の實家では、其後三度の送金は二度に、二度は一度にと段々差控へるやうにしたものゝ、可助君の様子如何にと心配して居た。すると可助君は程無く朝鮮守備兵の交代として出かける事になり、出發が差迫つて手紙で送金を乞ふ暇がないので、早速「カンゴクヘイクカネヲクレ」と打電した。すると五六時間して着いた實家からの答電が「カンゴクヘイクカネイラヌザイゼウシラセ」着炭君に便利な電報は、此時不幸にして、韓國を監獄にして仕舞つた。

ヨカ様大將

陸軍部内では故大山巖元帥をヨカ様大將と呼んで、其官姓名を呼ぶ者は稀である。副官が彼れに向つて彼れのこととは如何致しませうと其意嚮を問ふと、ヨカ様に頼む、參謀が彼れに對して腹案數個を吐露し、何れに致しませうかと言ふと、ヨカ様に頼む、彼れのヨカ様一點張りに成つたのは深い所由のある事で、先年彼れは森有禮を薦めて文部大臣にした、當時大山元帥と同座して居た西郷從道は言下に、森は日本人ぢやナカと不賛成の意を表したが、森の文部大臣は現實されて、

後例の神宮事件が約束した事のやうに突發した。其後は、彼れ私かに一切意見は吐かぬとても決心したものか何を問ふてもヨカ様一點張りで押通す所から、今日ではヨカ様大將で通つて居る。

場所は遼陽近くの滿洲軍總司令部、時は十年前の恰度今頃、奉天附近の會戰に先立つこと數旬、滿洲の野を蔽ふた雪は凍てついて居る。のつそり參謀長の室に入り來れるは例のヨカ様大將、「兒玉さん近い中に滿洲に大きな戦争があるさうですね。」

「アハ、、、、。」

ヨカ様の眞價は偉大か愚鈍か、茲に見玉さんと呼ばれたのは時の滿洲軍總參謀長兒玉源太郎大將其人であつた。

軍縮諸案の批判

陸軍の軍備縮小に對し、在野諸黨が果して其歩調を一にし得るや否やは不明であるが、兎に角國民黨では年來の意見を決議案として、議會に提出することに決した。斯くて軍縮案は、一應議會の重要問題だ

らんとして居る。尤も陸軍側では、目下編制改正人員整理及新兵器採用配置に関する調査を進め、大正十二年度に至れば、其實行案を自發的に議會に提出する筈であるから、本議會では在野黨側から如何なる名案が現れた所でもものに成らぬことだけは確實である。併し最近陸軍部外から公表された二三の有力な軍縮意見に對し、其是非を試みる事とする。

國民黨案

國民黨が軍縮案を決議案とし、單に師團の半減及一年在營制だけを其の提案理由中に説明するに止めたのは、自ら識るものであつて巧妙な態度である。議會再開前國民黨の發表した所謂師團半減論の梗概は、

- 一、歩兵隊の兵員半減
- 二、歩兵の一年兵役實行
- 三、師團の廢合
- 四、歩兵隊の入營期を區分し六月と十二月の二回とする

五、經費約四千百萬圓節減

の五項である、同黨が政友、憲政諸黨に率先して、是れだけの具體案を得た點は賞賛に値するが、縮小案其ものは師團半減論の看板とは内容を異にした不徹底極まる未成品であつて、次のやうな缺點がある。

- 一、師團半減論ではなくて歩兵隊の半減論である。
 - 二、單に經費節約のみを基礎とし、國防上の理由を基調とせず、兵力を決定したのは意味なきな。
 - 三、特科兵(騎、砲、工、輜重、航空)のことに全然觸れないのは判らぬ爲であらうが、不具體な改造意見である。
 - 四、新式兵器及航空勢力のことに言及しないのは、陸軍の現状を知らぬものである。
 - 五、國民黨案を實行した結果出来る師團は、現在の師團内の騎兵、砲兵、工兵、輜重兵の兵力を二倍に増加したものであるであつて、戰略單位の兵種編組が滑稽至極なものとなる。
- 併し同黨では決議案の説明として、唯師團半減及一年現役の實行と云ふ點だけを掲げたので、

幸ひ捕へ所はなくなつた代りに、國民黨案とは其内容を異にすることに成つた。

津野田是重案

政友會代議士津野田少將の發表した經濟的陸軍改造案は、全然政友會には關係なき個人としての意見であるさうだが、専門家だけに國民黨案に比べると遙に徹底したものであつて、其概要は斯うである。

- 一、最高國防會議の創設
- 二、統帥部の新設(參謀部、人事部、教育部)
- 三、大臣文官制
- 四、師團内の編制改正
歐洲戰役の教訓に鑑み、所謂三單位制を採用し、三聯隊を以て師團歩兵とし旅團司令部を廢止し、歩砲兵聯隊を通じて十八箇聯隊を減縮する。
- 五、結局約六個師團の節約を實行し、經費二千萬圓を節減する。

六、歩兵聯隊内の九個中隊を銃手中隊とし第四、第八、第十二の三個中隊を重機關銃中隊とし、銃手中隊たる九個中隊には、各中隊に八挺の輕機關銃を附し、大隊に狙撃砲(平射歩兵砲)を附ける。

七、砲兵旅團を廢止し、師團内砲兵聯隊を全部三大隊編制に改める。

八、騎兵は師團騎兵は暫く其ま、とし、旅團騎兵は現存四個の内二個旅團を朝鮮に移し、他の二個旅團を廢止する。

九、空軍を増加し、輜重兵は前車を自動車牽引に改め、工兵は現在の儘にして置く。

十、在營限を一年四ヶ月に改め、春秋二期に入隊させる。

十一、一年志願兵制度及幼年學校を廢止する。

政友會内では津野田氏を參謀本部代議士と呼ぶさうであるが、右の改造案は必ずしも陸軍側の意嚮其儘ではなく、現に陸軍省で研究して居る編成改正の範圍よりも遙に徹底した改造案であつて、一年四ヶ月在營制一年志願兵制度及び幼年學校の廢止、歩兵旅團司令部の廢止、騎兵旅團二個の廢止、文官大臣制の採用等は頗る適當なものである。併し本案にも次のやうな缺點が含まれ

て居る。

- 一、何故に約六個師團の節約をしたものが、国防上適當な改造陸軍であるかを説明してない。換言すれば國軍の兵力を決定すべき基礎標準が不明である。
- 二、陸軍中央部の最高機關として、統帥部と陸軍省とを置き、別に國家の綜合的國防機關として最高國防會議を設けると云ふのであるが、統帥部と陸軍省と、權限を明確にしないと折角文官大臣を設けても、實際は現在の參謀總長及び武官陸軍大臣の外に形式的に文官大臣を増設する結果となり、軍閥の勢力は毫も衰へない。
- 三、師團内の編制改正として所謂三單位制を採用するの否は、目下専門家の間に於ても賛否相半し。河野少將の如く之を不可なりとするのは早計であつて、現在の師團數二十一個を存置して軍制改正及び經費整理を斷行しやうと云ふ方針から見れば、實行可能な方法であるから有力な一案たることを失はない。

河野恒吉案

河野恒吉少將の發表した陸軍改造案は、純然たる縮小案であつて、其概要は左の通である。

- 一、國際關係の推移上我國の國防は、陸軍第一位から海軍第一位に移つたから、今後陸軍は單に事變用に過ぎないが、將來國家總動員の必要が起らぬとも斷言出來ぬから、事變用と豫備兵養成所の意味で、今後は日露戰爭當時と同様に、十二個師團あれば宜しい。
- 二、師團内の編制には手をつけない。
- 三、騎兵は依然必要で廢止の餘地はない。併し現在騎兵旅團四個は之を朝鮮に移す。
- 四、重砲及野砲旅團は、畢竟大軍編制用のものであるから、縮小するが宜しい。
- 五、近衛師團を廢止して、御守衛及儀仗として、歩兵一大隊騎兵一中隊の特種部隊に改める。
- 六、一千萬圓の經費節約が出来る。

右の案は現在の陸軍當局の態度を前提としては、津野田案以上に實行の可能性を缺いて居るが單に陸軍兵力の縮小と云ふ點だけから觀れば頗る徹底して居る。併し全然制度改正に觸れて居らぬから、軍閥の横暴を一掃し難いと同時に次のやうな缺點がある。

- 一、單に事變用とすれば、十二箇師團は不要である。又將來の大動員を豫想し豫備兵養成所とし

て十二箇師團の存置を必要とする云ふのであるが、其兵力決定の基礎となるべき理由が不明であるから、十二箇師團が何故に適當であるかを諒解するに苦しむ

一、騎兵旅團の廢止が出来ぬと云ふのは曲論であつて、二十一箇師團が十二箇師團で十分だと云ふ論者が露國の哥薩克騎兵を對手として擴張した彪大な騎兵隊を航空機の發達した現状を無視し、現在のまゝにして置かうとするのは、撞着も亦甚だしく河野少將が騎兵科出身だけに聊か可笑しく感ぜられる。

要するに陸軍當局は將來も無論戰爭は勃發するものと斷定して、最悪の國際關係を豫想し、米支聯合軍を對手とし支那大陸を豫想戰場として作戰計畫を樹て、戰時四十二箇師團の動員を企てて居るのであるから、軍縮論者は當局の確信を覆へすに足る理由を擧げて、陸軍縮小が可能であり且つ縮小しても國防上危険のない理由を明かにしてか、らなければ、政府に陸軍の縮小を斷行せしめ得ざるは勿論、陸軍當局との議論も畢竟水掛論に終るであらう。

眼鼻の付いた陸軍整理

一、陸軍省の公表案

陸軍當局は第四十五議會に於ける軍縮建議案及び部外に於ける軍縮の輿論に動かされ、大正十一年七月四日遂に次の整理案を公表し、次で同年八月十五日之を實行した。

第四十五議會に於る衆議院の建議案即ち「在營年限一年四個月、經費四千萬圓の節約」に對し陸軍當局は之を尊重し努めて、之に接近する具體案を研究して閣議に提出し、其同意を得た次第である。然し在營年限一年四ヶ月に短縮は、豫め青年の體育及び豫備軍事教育（主として規律心の養成）の實施が必要である。此事は主として文部省の擔任に屬する事となるであらうが、陸軍に於ても其の方案に對し研究中である。今此準備が出来ぬ内に、急遽在營年限を一年四ヶ月に短縮する事は、新兵器の採用上益々複雑なる軍隊教育を完成し難く、國防の能力を著しく減少せしむる事となり、陸軍當局として責任上賛成が出来ぬ。

又平時編制は作戰方針に基く戰時編制が基礎となるのであつて、師團半減と云ふ如き思ひ切つた縮小は、國防能力を危くせずには到底出来ぬ事である。即ち今回整理の方針は、作戰及び動員

の單位である師團の數を現在の儘として、爲し得る限り人馬の削減を計り、日露戦争の經驗に鑑み、新兵器を採用して戦闘能力を維持したのである。將來愈々青年の豫備教育が實施せらるゝに至つたならば、所謂衆議院の建議案が實行せらるゝのであるが、今日陸軍當局の縮小が直に其建議案の通りでないといふ事を見て、陸軍が建議案を無視するとか誠意がないとか言ふて攻撃するのは理屈の通らぬ議論である。陸軍々縮の整理の要領は概ね左の通りである。

歩兵 八十六聯隊と獨立六大隊

各聯隊の各大隊より各一中隊を減す(但し臺灣の二聯隊及獨立大隊は變化なし)二百廿中隊減

騎兵 二十九聯隊

師團騎兵及旅團騎兵の各聯隊より各一中隊を減す廿九中隊減

騎砲兵 一大隊

隊内變りなし 一大隊減

野砲兵 十九聯隊

各聯隊の各大隊より各一中隊を減す 百八中隊減

山砲兵 四聯隊と獨立二中隊

聯隊は現制に比し二中隊大なり 八中隊増

野戰重砲兵 八聯隊

現制に比し六聯隊は變りなく二聯隊は各一中隊小なり 八中隊増

重砲兵 三聯隊と獨立八大隊 四中隊増

工兵 二十一大隊

七大隊より各一中隊を減す十四大隊は變りなし 七中隊減

鐵道兵 二聯隊

人員變りなし 二中隊増

電信兵 二聯隊

現制に比し一聯隊は變りなく一聯隊は二中隊大なり 四中隊増

航空兵 六大隊

隊内變りなし 二中隊増

眼鼻の付いた陸軍整理

氣球兵 一隊

變りなし

輜重兵 十九大隊

現制は九大隊に限り各三中隊なるも一律に各大隊二中隊に改む 九中隊減

自動車兵 一隊變りなし

備考

一、下士以下約五萬六千人

二、馬匹約一萬頭を減す

三、入營は一月十日とす

以上の新編制は八月中旬より實行に移り、大正十三年迄に節約し得る經常費二億三千萬圓、臨時費二千九百萬圓なるも爾後に於て、毎年經常費貳千萬圓餘の經費を節約し得、此外尙他に經費節約の途を講じて約三百萬圓を出し、右金額と合計せば、年約二千三百萬圓餘の節約となる。而して兵器充實費は九千六百萬圓にして之れを十三年度に配當する。従つて本年度に於て軍縮實

行上八百萬圓を必要とするも、努めて費目の流用に依りて支辨し、其他は來議會に追加豫算を請求する。

二、軍縮後の常備兵力

陸軍當局の陸軍整理に關する説明は、現存部隊數及び現存兵員を掲げず、單に新編成に依て生ずる部隊數の概略と、増減關係を示したに過ぎぬが、新編成に依れば陸軍の常備兵力は次の如くなるのである。

兵種	現存數	軍縮後
高等司令部	八〇個	同
歩兵	一〇五六中隊	八三六中隊(減)
騎兵	一〇七中隊	七八中隊(減)
野砲兵	一二六中隊	四六中隊(減)
山砲兵	一四中隊	一二一中隊(増)

眼鼻の付いた陸軍整理

重砲兵(野戦重砲共)	六九中隊	八一中隊(増)
工兵	六三中隊	五六中隊(減)
鐵道兵	一四中隊	一六中隊(増)
電信兵	一一中隊	一五中隊(増)
航空兵	一六中隊	一八中隊(増)
氣球兵	一中隊	同
輜重兵	四七中隊	三八中隊(減)
自動車兵	二中隊	同

他に戰鬪部隊外の諸隊官衙學校等あるも従前通であるから略す

新編制の内容は無論秘密であつて、茲に掲載の自由を持たぬが、豫算と關係ある兵數其ものは毫も秘密とする必要の無いものであるから左に掲載する。

現存兵力

將官(勅任文官共)

二〇二名

佐尉官(奏任文官共) 一八四九三名
 準士官下士(勅任文官共) 三一四三七名
 兵卒 二五四一六七名
 馬匹 五一六〇六頭

即ち之を將校及び下士卒として區分すれば、將校は一萬八千六百九十五名であつて、所謂下士卒は二十八萬五千六百四名となる。然るに今回の陸軍整理では將校の讖首約千三百名、下士卒の減員約五萬六千人及馬匹一萬頭減少と云ふのであるから、帝國陸軍の平時定員は、

將校 一萬七千三百九十五名
 下士卒 二十二萬九千六百四名
 馬匹 四萬一千六百六頭

となり將校、下士卒を合した常備兵數は、約二十四萬七千九百九十九名(極めて少數の文官を含む)と成る譯である。

陸軍省實施の軍縮批評

一、裏面に駁引

最初から計畫した仕事だったのか、其れ共眞に手違ひであつたのか、其邊は頗る曖昧だが、兎に角前月初旬に發表された軍縮案は、其後更新され、其具體案は既に印刷に附せられ、誠首將校三百餘名の官姓名などは配布する許りに準備されており又新聞社に對しては十五日の紙上に組込まれるやうに發表される筈であつて、翌十六日の官報で一切が公表される筈である。尤も關係各部隊には既に夫れ々内命済みで、下士卒の除隊も十五日を期して斷行されることに決して居るのだから、今更内容が公表された所で、其の爲に何うと云ふこともあるまい。軍縮案の發表では最初からケチが付き、殊に政友會からは出鼻を挫かれて居るので、陸軍省では今度は公表するまで一切の發表を避け、内示一點張り、政友會を手始めに貴族院の親類筋へも夫れ々御披露をした揚句、未だ動きのない確定案ではないから、發表は暫らく見合はして呉れと頼み込んで居る

が、後から直ぐに尻が破れて其内容は既報の通り、立派に世間に知れ渡つて居る。即ち此の十五日に實行する軍縮案は、一寸數字をコンガラかして、如何にも建議案の趣旨に合して居るかのやうに説明されて居るが、其の内容を檢討すると、毫も似ては居ず、十二年度の豫算面で節約される經費は、前月初旬發表のものと同然であつて、僅に二千三百万圓だけである。而も其の内約三百万圓は行政整理の結果生み出されたのだから、正味軍縮で浮くのは建議案の注文額四千万の半額にしか當らない。是で建議案の趣旨に合して居るなどとは何うしても受取れぬが、其れよりも更に危なかしいのは師團數を減ぜず、師團内の兵員だけを減少した點である。陸軍當局は五万六千の下士卒、一千八百の將校、一万三千の馬匹減少は約五箇師團の縮小に該當すると放言して居るが夫は違ふ、師團數を其儘にしての兵員の減少は、陸軍の夏瘦せに過ぎないから、曾て人知れず輜重兵中隊を九個も増設して居た手腕を以てしたら、將來イツでも世間に目立たぬやうに、元通りの師團に太らせることが出来る。併し師團數を一つでも二つでも減らしたが最後今後其の手は容易に用ひられない。爰にも陸軍の戰略戰術が窺はれる。

二、建議案無視

師團の数を減らさなくてはイカぬ。師團数を其儘にして置たのでは陸軍が必ず機を見て原狀に逆戻りして仕舞ふからとは犬養君などの頗りに苦にした點であつたが、たうとう參謀本部の反對で、師團數、現在のまゝと云ふことに決つて仕舞つたのは致し方もない。戰爭は必ずあるものと見做し、其れに應ずる計畫を樹て、置く責任のある當局としては、尾崎君などの主張するやうに戰爭は起らぬものと見做したやうな立場から、國軍の兵力編組を決する譯には行くまいから、當局としては師團數は斯かる理由で減じ兼ねると云ふことを明かにする責任があらう。政友會や貴族院の一部に對して説明したやうに、師團數を減らせば却て經費が餘計に懸るなどと云ふ説明ではイカぬ。陸軍當局は師團を減らせば經費が増えるの。在營年限を短縮すれば却つて經費が増のと、チヨイチヨイ妙な算盤を使用するが、ヘラセバフェルと云ふのは陸軍部内では通用しても世間では通らぬ算法である。ソコで在營年限の短縮であるが、繰返す迄もなく建議案は現在の二年在營制は一年四ヶ月に短縮せよと云ふのであつたが、今度の軍縮案では、全然之を無視してあ

る。傳へられる四十日間の在營日數の減少は建議案の成立した、四十五議會當時既に陸軍側で豫算面に計上したものであるから、建議案の有無に拘らず、當然本年末から實施することに成つて居たのである。然るに陸軍當局は、豫後備に這入つてからの勤務演習召集の回數と日數とを減らして、四十七日ばかりの日子を捻出し、之れを前記の四十日とを合算して、約三ヶ月の服役年限の短縮だと誇稱して居るが、其れは餘りに蟲がよすぎる。入營してから豫後備役を終る迄の服役年限は、十七年四ヶ月であつて、其内の最初の二ヶ年間を在營するのが現在の制度である。建議案の趣旨は、此の二年間を一年四ヶ月に短縮せよと要求したのであつて、言ふ迄もなく現役兵として在營する年限の短縮を求めたのである。其れを充分承知して居ながら、同じく在營日數であるからと云うて區別なしに通算して、三ヶ月の服役年限の短縮に相當するなどと吹き立てるのは人を愚にした話である。若し一時に一年四ヶ月とすることが不可能だとしたら、何故に一年六ヶ月なり一年七ヶ月なりに短縮しなかつたのであるか、軍隊教育の實行法如何に依つて國民教育の現狀に關係なく、現在と同じ程度の軍事教育を現在よりも短縮した期間に實施するのは決して比事ではない。然るに軍事當局が此の點を殆ど考慮の内に加へなかつたのは遺憾に堪へない。

三、窮した説明

陸軍當局の説明に據ると、今回の所謂軍縮は十二年から廿二年迄の十一年計畫で實行し、逐年整理額が増加して行き、其れ迄に三億五千百餘万圓の整理が出来ると云ふのである。が所謂十年間と云ふのは整理に必要な年數ではなく、充實計畫の完成する年數である。當局の試みる斯かる説明は、國民を錯誤に陥らしめ、如何にも大整理大縮小が斷行されてもするかのやうに誤解せしめる處があり、陸軍としては巧妙な説明振りに相違ないが、軍事費節約と年々の陸軍豫算とを中心として觀察すれば、此の十年間と云ふ數字には全然意味はないのである。即ち軍縮及行政整理は、大正十四年度に全部完了するのである。其後は逐年整理額は同一であつて、一厘一毛も増減はないのである。即ち今後の改革が行はれた場合には、年約三千萬圓の軍事費が節約されると説明すべきであつて、何故に十二年度には、二千三百萬圓より節約されず、整理の完成した大正十五年度に成つても、三千萬圓が其ま、陸軍豫算から浮かぬのかと云へば、新兵器充實費約九千八百萬圓を十二年から廿二年迄の繼續費として、年々の豫算に計上しなければならぬからである。

陸軍當局は意味を成さぬ將來の年額を計算の基礎にして、十年間には三億五千萬餘圓の節約にせると數字で脅かして居るが、斯かる數字には何の權威も價值もない。二十年間には七億圓の節約とならうし、三十年間には十億を突破するであらう。併し斯くして算出される金額が十億に成り二十億に達しても、陸軍豫算は依然現在額より約三千万圓より多くは減額されては居らぬのである。而も今後五年十年と経過する間には、新たに必要な軍事費が現れぬとは何人も斷言出来ぬのであるから、實は陸軍當局の吹立てる三億五千餘万圓も、果して今後十年間にソツクリ浮かかへるかさへ疑問な位である。何故に陸軍當局が斯かる窮した説明をせねばならぬのかと云へば、現在の常備廿一箇師團の形式的戰鬥力を、ドコ迄も平時から保持して行かうとする方針を捨てぬからであつて、所謂編成改正に依り人馬の力と機械力とを交換したに止まるからである。故に軍事費の節約額を更に多額ならしめ、建議案の趣旨を徹底せしめる爲には、陸軍當局の國防に對する現在の方針を抛棄せしめた上で眞に國民皆兵の精神を實現して、戰時所要の大兵を得るに適當な國防方針を樹立することに改めなければ到底出来ない相談である。

四、身から出た錆

軍縮を断行した結果、一先づ十二年には陸軍豫算から、二千三百万圓の節約が、出来ることは成つたが、是れだけでは國民の意響は二の次ぎとし、政友會が承知しないのは既に偵察済みであるので、陸軍當局は、所謂行政整理の更新と稱して、十二年度から十四年度にかけて、獨立守備隊の廢止、朝鮮高定員の廢止、其他五六の官衙學校の整理を追加する計畫を樹てた。其内で整理と稱して廢止するには極めて不適當な事柄がある。即ち其の一は退營者に被服を支給する制度の廢止であつて、他の一つは演習應召者の家族に支給する手當の廢止である。田中義一大將の大員就任中には、軍政上に稀有の改正が加へられたが、就中以上の二制度は在郷軍人の聲と、聯隊區司令官の報告と市町村長の意觸とを參酌して新設した制度であつて、頗る評判も宜く、時代に適合した施設として社會政策上價值あるものと認められ、現在でも尙然りと信ぜられて居るのである。田中前陸相の企てた新施設中にも、農繁期に在營兵を一時歸郷せしめると云ふ制度は、其精神には申分なく如何にも理想的であるが、實際に於ては却つて父兄や近隣の迷惑となり、軍隊

から臨時歸郷を許された子弟の歡迎の爲に、却つて時間潰しをするに過ぎない、と云ふから經費節約には餘り影響はないが、此の方は寧ろ廢止してもよい位である。之に反し退營兵被服を給せぬとなると、又ぞろ簡閱點呼の際に文句が起るのは避け難い、例に依つて點呼執行官は軍服を着用せずに點呼場に来るものがあると、何故軍服を着用して來ぬのかを責める、又ハタな和服で出かけると、ナゼ羽織袴で出場せぬのかと咎める、毎度小言を頂戴するのは氣が利かぬので、其結果は昔に逆戻りして借着も流行しやうし、動もすれば其日暮らしの外餘儀ない在郷兵などは、人仲で面責されるのは癢に障ると云ふので、缺席したり事故を製造したりするので、結局簡閱點呼の目的は達せられなくなる。又演習召集中の兵員の家族に對する手當の廢止も在郷兵の恒産のない者を苦しめることは言ふ迄もない、陸軍當局が既に之等の良制度を廢止するに決した以上は仕方がないが、一面點呼執行官たる佐官級の將校に内達して難きを在郷兵に求めぬやうにせねば、不平の聲は忽ち陸軍に蝟集するであらう。次は獨立守備隊及び朝鮮軍備の高定員の廢止であるが之れは共に體よく増員を企てた際に出來上つたもので、二十一個師團の定員外であるから、廢止するのが至當であつて、國民の諒解なく斯かる變態的兵力を擁して來たのが不思議な位であるか

ら、今回廢止の已むなきに至つたのは身から出た錆と觀念するより他に途はあるまい。

五、歩兵横暴の聲

今回の軍縮が編成改正にチョッピリ軍縮の色を添へたに過ぎぬことは既に讀賣紙上で再三報道してあるが、此の不徹底な軍縮に對して陸軍部内にも不平があるから面白い。尤も不満足とは全然其趣を異にし引括るめて言へば、歩兵横暴の聲である。由來歩兵は各國共に國軍の主兵と稱し歩騎砲工輜重航空各兵科中で最も多數を占めて居るのであつて、我陸軍に於ても右と同じであるから、歩兵横暴の聲は畢竟多數横暴の聲である。斯かる非難が陸軍部内から起つたのは、蓋し當然の結果であつて、其の原因は陸軍當局の執つた態度に徴すれば直に明瞭に成る。山梨陸相も尾野前次官も、軍縮斷行は何も部外殊に政黨から要求があつてから初めて當局が調査研究に着手したのではなく、陸軍としては昨年とか一昨年とかの七月から既に業に手を染めて居たのであつて決して俄作りの計畫ではない、と言明して居たが、其れは半分は嘘である。事實である半分は編成改正に關した範圍だけで、嘘である半分は軍縮に屬する部分である。編成改正の必要を痛感し

たのは、歐洲大戰の教訓に促された結果であつて、軍の主力たる歩兵隊の編成は何うしても、肉彈主義一點張りではイカヌから、新兵器を配屬して新戰術を活用するやうにせねばならぬとは、ツイ此の間迄特設せられて居た軍事調査會の得た結論であつたのである。昨年の七月から研究に着手したのだと誇稱されて居るのは、此の結論を具體化する爲めの歩兵隊の編成改正と新戰術を運用する爲の歩兵操典の改正と、新兵器活用の爲めの千葉歩兵學校の研究とが其れであつて、新兵器製作の爲に技術本部が苦心を重ね、十數回の技術官會議の催されたのも事實である。陸軍當局が以上の研究だけを繰返して居る間に、部外では軍縮の聲が白熱的となり、遂に第四十五議會では例の軍縮建議案が全院一致で可決されたのである。従つて當時に於ける當局の意嚮は勿論、陸軍兵力の現状維持であつて、現存廿一個師團の編成改正を行ひ、歐洲陸軍並の現代的陸軍に改めたいと嚮心して居た迄である。所が建議案では、經費四千萬圓の削減と頭から吐き出しを迫られたので以前の計畫たる編成改正に必要な新兵器の新造費を要求する所の騒ぎでなく、編成改正に必要な經費を自ら捻出した上に、更に衆議院を満足させるに足る節約費を生み出さねばならぬ破目となり、是非共或程度の軍縮と行政整理とを斷行せねば辻褄が合はなく成つたのである。

ソコで當局は歩兵隊の編成改正の道連れとして今迄豫想もしなかつた騎兵、野砲兵、輜重兵等の縮小を企てたのが今度の整理案であるから、歩兵隊の戦闘力は新兵器の充當で餘り加減はなく、所謂現状維持は出来なく成つた、特に野砲の如きは旅團がなく成つたので、將官のハケ口が減り最近漸く擴張されたものが減茶減茶に成つたので、歩兵横暴の第一聲は野砲兵科の將校から揚げられるに至つた。併し今では其れも後の祭り何うにも成らぬが、騎兵料や輜重兵料の横暴呼はりには同情が出来ぬ。蓋し騎兵料が航空兵に多少其席を譲るのは當然であるし、縮少された輜重中隊はイツの間にか手品のやうに増設されて居た部分だけであるからである。

軍縮の實行には、當然人事の異動が伴ひ、進級者と減首者との間に悲喜劇の演ぜられるのは已むを得ぬが、其の内容は公平であり、出来るだけ不平不満を抱かしめぬやうに努めねばならぬ。今回の陸軍異動は果して妥當であつたらうか、一體軍醫や經理官が中將級にしか進めず、又其の數も海軍に較べて少いのは一寸變な感じを與へるが、是れは軍縮に直接關係がないから姑く別とし歩兵科以外の將校の進級淘汰には一見不適當なのが數多く認められ、殊に將官級の減首者には著しい不公平の跡が見出される。軍人に志して大將元帥たらん事は誰しも希ふ所ではあるが、然

しさうは問屋で卸さぬから仕方がないとは言へ、大佐に成つた者は少將に、少將に昇つた者は中將にと、慾の出るのは當り前で、誰しものことである。其れが誰しもの事であるだけに陸軍大學でも出て一寸出色な軍人は、一樣に同じ目的に向つて軍務にいそむるから、其の間に目に餘る不公平が行はれると自然部内に不平の氣が満ち、其の結果士氣に影響し、將校が風紀の淵源であり教育の中心であり國軍の骨子である關係上、此の種の不平を放任したま、顧みずに置くと國軍の素質にも多大の悪影響を及ぼし、形式的陸軍は完備しても其の内容は頼み難いものとなり殊に戦時在郷將校に期待する當局の計畫は、齟齬を來たさざるを得ない。由來師團長の大部分は歩兵科出身將校の占むる所となり、要塞司令官は多く歩兵科以外の中將が補任されて來たが、今回の異動では所謂特科出身の將官は片端から減首され、歩兵科出身の中將は要塞司令官に二名も割込んで居る。此の點からも歩兵横暴の聲が起る譯である。更に一言なきを得ないのは閥關係の情實である。現に大將元帥を出して居るのは山口、福岡、薩摩の三縣を筆頭に東京、長崎、宮城、福島、愛媛、高知、宮崎の一府九縣であるが、其の他の府縣には一名の大將もない。又今後とも大將を出すのは容易でなからうと思はれる。此の傾向は中將級でも少將級でも共通な現象であ

る。尤も偉材がなくて中大將を出せぬのは致方もないが、中將たるべくして若くは大將たるべかりし人にして、唯推挽者のない爲に惜し氣もなく首が飛び非業の最期を遂げるのは見るに堪へない。即ち石川縣の如く熊本縣の如きは其例である。反對に長州産の河内某と云ふ男は、精々中佐止まりの實力を以て樂々と中將に進んで隱居し、今度は又薩州産の井戸川某は中將に進み、歩兵科出身で要塞司令官と成澄して居るが、御兩人共無論大學出身ではなく、若し他府縣出身ならば、十年も前に在郷軍人分會長に就任して然るべき手合である。是れで不平が起らなければ何うかして居る。我陸軍を精神的に生かす爲に之等の弊習を一掃せねばならぬが、今のまゝでは、イツか爆發の秋が来るであらうと確信するが陸軍當局の意嚮を承はりた。

六、巨頭連の迷信

國民の間にドウして斯くも陸軍が不人氣に成つたのであらうかと云ふ點に深甚の注意を拂ひ、何とかして此の忌むべき傾向を喰ひ止め、眞に國民の陸軍、國家の陸軍たらしめる途はあるまいかと憂慮して居る者が、佐官級以下の少壯將校中には夥しくある。併し悲しい哉、彼等は其の事に言及する際には、叛逆でも企てるのであるかの様に聲を潛めねばならぬ苦境に置かれてある。軍縮も然うなれば、陸軍の改革も然うである。陸軍部内の斯かる環境は抑々何人に依つて支持されつゝあるかと言へば、其の主要なる者は陸軍の巨頭連である。彼等は力を國歩進展の唯一の要素と確信して居るのであつて、其の力も極めて狭い武力に限定されて居るのである。世間では軍閥と稱する一團が何か爲めにする所あつて妄動して居るかのやうに非難して居るが、力の信者たる巨頭連は心から斯くするのが眞に國家の爲めなりと信じて行動して居るのであつて、備軍を現状のまゝにして置きたいと主張するのも、實は彼等の素志の一發露に外ならぬのである。従つて彼等は已むなく今回の軍縮を實行しながらも、世の軍縮論者を米國の宣傳に乗せられた短見者流と罵倒し、國家の前途を誤るものは彼等だと憤慨して居るのである。斯かる頭の持主が兎も角も濫々軍縮を實行しようとするのであるから、出来るだけ輕少な所で切掛けやうと腐心するのは當然である。即ち軍縮案が程度を異にする二三種に計畫され、彼等の得意な戰術を應用して、世間の反響を付度しながら、偵察戰緒戰決戰と手を代へ品を替へた揚句の果に、たうとう例の軍縮案の實行に漕ぎ付けたのである。世間では此の態度を目撃して陸軍には全然誠意がなく、宛然縁日

に言及する際には、叛逆でも企てるのであるかの様に聲を潛めねばならぬ苦境に置かれてある。軍縮も然うなれば、陸軍の改革も然うである。陸軍部内の斯かる環境は抑々何人に依つて支持されつゝあるかと言へば、其の主要なる者は陸軍の巨頭連である。彼等は力を國歩進展の唯一の要素と確信して居るのであつて、其の力も極めて狭い武力に限定されて居るのである。世間では軍閥と稱する一團が何か爲めにする所あつて妄動して居るかのやうに非難して居るが、力の信者たる巨頭連は心から斯くするのが眞に國家の爲めなりと信じて行動して居るのであつて、備軍を現状のまゝにして置きたいと主張するのも、實は彼等の素志の一發露に外ならぬのである。従つて彼等は已むなく今回の軍縮を實行しながらも、世の軍縮論者を米國の宣傳に乗せられた短見者流と罵倒し、國家の前途を誤るものは彼等だと憤慨して居るのである。斯かる頭の持主が兎も角も濫々軍縮を實行しようとするのであるから、出来るだけ輕少な所で切掛けやうと腐心するのは當然である。即ち軍縮案が程度を異にする二三種に計畫され、彼等の得意な戰術を應用して、世間の反響を付度しながら、偵察戰緒戰決戰と手を代へ品を替へた揚句の果に、たうとう例の軍縮案の實行に漕ぎ付けたのである。世間では此の態度を目撃して陸軍には全然誠意がなく、宛然縁日

商人のやうだと非難して居るが、當局としては其の試みた數段構への軍縮が即ち誠意の發露であつて、國家の爲に圖れば分厘でも少く經費を減少し出来るだけ形大な軍備を常備して置くのが國に忠なる所以だと確信して居るのである。斯うなると『誠意』も戸まどひをするであらう。彼等高級武官の腦漿に沁込んで居るのは、陸軍大學や士官學校で習つた戰史である。戰史は勝敗の記録である。勝者の得意と敗者の慘じめさであり、加ふるに戰勝國の利權、領土賠償金の獲得に關する驚異である。斯くて十年數十年の間銳意戰つて勝たんことを研究しつゝある彼等が、侵略主義的國家の榮華を忘れ難いのは無理もない。而して戰史は歴史であるから無論現代とは没交渉であり、スラスタと考察なしに讀過したのでは格別將來とも關係はないから、氣持良く時代を超越して居る。従つて戰史頭の進退が國民の意表に出でるのに不思議はなく、又我陸軍が國民の陸軍や國家の陸軍に改められぬのは當然であつて、軍縮が不徹底なものも亦當り前である。ソレなら所謂國防は國民全體の職能であり、軍人許りの力では決して完全に行はれるものではない點を自覺せしめる爲にはドウしたらいいかと言へば、陸軍の教育制度を改正し新時代に適合した教育を將校及將校生徒に施し、是非共國民と陸軍とが一體となることに努めねばならぬ。

七、滿洲撤兵問題

海外駐屯部隊の撤退は軍縮ではない、華府會議の聲明を實行する迄であると云ふのは一應其通りではあるが、陸軍で手を着けた撤退の中には、撤退部隊が内地歸還後に常備師團の組成分子として本來の衛戍地に腰を据ゑると、撤退を機會に解散されて其の形を失ふのとの二通りがある。西伯利や青島や大陸岸薩哈噠などから引揚げて來る部隊は前者であつて、朝鮮の高定員（歩兵六個大隊）や南滿洲獨立守備隊（歩兵六個大隊）などは後者に屬する。解散と決した部隊は無論、軍縮の一部であるが、單に内地に引上げるに過ぎぬ部隊であつても其軍司令部は失くなるから、將校の數及經費には少からぬ影響がある。即ち青島軍、中支那派遣軍、北支那派遣軍、西伯利派遣軍の各司令部は當然解散されるから、之等に要する經費は全部不要となる譯である。従つて純粹の軍縮でないには相違ないから、當局の英斷だと賞めるにも及ばぬが、貧乏世帯の經費は、成るべく少い方が結構なのは言ふ迄もないから、因て節約される經費が假令百万圓であつても、二百万圓であつても、斯んなものが何んだと咎めるのは可笑しい。又朝鮮の高定員部隊の解散は文

句なしである。假りに朝鮮の治安維持が將來困難となり、現在の二箇師團では不足だと云ふ場合には内地から旅團なり師團なりを特派したる宜いので毫も懸念はない。所が最近獨立守備隊の廢止計畫に伴つて滿鐵沿線の治安維持に脅威を受けると云ふ議論が八釜しくなり、關東州でも滿鐵でも其の善後策に腐心し、暗中飛躍を開始して居るさうである。尤も獨立守備隊に撤退されては都合が悪いとは居留民の間でも唱へられ、ソツチコツチで反對決議などをして居るやうであるが餘りの慌て方である。御用商人や駐屯を相手に共喰ひをして居る手合は、無論獨立守備隊の撤退には大反對であらう。併し單に治安維持の上に必要だらうと云ふ理由だけなら、獨立守備隊の撤退解散を中止して呉れと哀願する必要は毫末もない。守備隊其のものが要るのなれば内地に手のすいて居る師團が十九個もある。何も常備廿一個師團の外に獨立した六個大隊四千人の兵力を特別に駐屯せしめて置くには及ばぬ。若し撤退後滿鐵沿線に危険があるなら内地から歩兵一旅團を派遣したら其れで宜しい。其經費は輸送費だけであつて教育上の不便などは、數年間西伯利の曠野に大部隊を駐屯せしめたのに較べたら、ソレコソ九牛の一毛であつて問題ではない。此の際滿鐵で自警團を組織するのは、其れが内外から軍隊と見做されぬ限り、勝手であるが、今更憲兵た

巡查だと騒ぎ立てたら、ポーツマス條約違反などと、鶴の目鷹の目で毎日宣傳の種探しに餘念のない某國邊りの利用する所と成らぬとも限らぬから、是非共守備兵が必要なら獨立守備兵を一先づ廢止した上で、内地部隊を特派したら、各方面擧つて無難に解決が付かう。政府も國民も亦滿鐵もヘタに騒ぎ出して陸軍當局に軍縮手加減の口實を與へるやうな愚を演ぜぬ注意が肝腎である。

八、進級者製造

今度の軍縮では、平時は全然冗員と認められる將校の大淘汰が行はれるであらうと期待して居たが、僅三百六十六名の待命將校を出した許りで、千二十六名の進級者を製造して居る。而も其進級者がチャンと各官衙學校團體等に一名のアブレもなく收容されて居るから不思議である。尤も進級者は順送りに更迭するのであるから、淘汰に依つて約三百七十の空席が出来た以上は、千餘名の進級者が生じた所で別に怪むに足らぬが、當局の執つた態度には淘汰よりも進級に重きを置いた傾きがあり、殊に平時冗員と目せられる多數の將校には全然手を着けて居ない。陸軍當局

は今後大正十四年度迄に二千二百名の將校を淘汰すると前觸れがしてあるから、必ず其の數だけは進級に依つて補充する事なしに、廢官又は廢職とする決心であらうとは信するが、今回發表の人事異動に徴すると頗る疑はしい點がある。即ち師團司令部附少將杯は依然後任者を製造して居るし、聯隊附、聯隊區司令部附將校も前の通りであつて、毫も減員したものは認められぬ當局が現在の如く師團司令部、聯隊本部及聯隊區司令部附の將、佐、尉官の數を平時不必要な程度に増員したのは、舊獨逸帝國の軍制に倣つたのであつて、其目的は戰時動員に當り、新設される部隊の幹部を成るべく多くの現役將校で組織したいと云ふのである。従つて單に戰爭のこと許りを考へ、動員に際し平時師團の二倍三倍と編成される新部隊の戰鬥力を強大ならしめる爲には卓越した一制度には相違ないが、斯かる軍制は近く戰爭の勃發が豫想された上に、經費お構ひなしの陸軍であるとしたら、格別我國の現狀に處する陸軍當局としては、再考も三考もせねばならぬ適當なものである。故に次回の軍縮異動には師團司令部の窓から欠伸をしながら日脚の遅いのを啣つて居る少將閣下は無論のこと、將校集會所で碁を打ちながら四時の鳴るのを待ち兼ねてる聯隊本部附中少佐や、朝の中一寸三十分許り書記の作製した書類に盲判を押した後は、雜誌の種も

ない位に退屈して居る聯隊區司令部附の佐尉官などは是非何とかして貰ひたい。又大將の數も多い、官制上大中將孰れでも宜い職に在るものは、全部中將にせぬ迄も半數位は中將で遠慮するが宜からう。一體大將は參謀總長、教育總監、陸軍大臣の外は動員に際し編成される作戰軍の司令官數だけあれば事は足りるのであるから、五元帥の外に現役大將十四名とは餘りに多過ぎる。是れだから臺灣總督や朝鮮總督に軍人を持つて行きたくなるのである。尙是れ許りではない、官制上中少將孰れでも宜い學校長は全部中將にして仕舞ひ、大中將孰れでも宜い聯隊長及聯隊區司令官は全部大佐級で埋められて居る。部内の軍人は進級の途の多いのを喜ぶであらうが、是れでは經費の嵩むのが當然であるから、陸軍當局としては現行官制を今少しく國家的に活用し、國民の負擔を輕からしめるのが其の義務であると言する。

九、開け放しの上空防備

陸海軍政策及び要塞整理問題と関連し 我上空防備の完全を期する爲め、軍縮を機會に是非共解決を圖らねばならぬのは、我航空國防の問題であるが軍事當局が、動もすれば此點を忽諾に附

せんとするのは頗る遺憾である。殊に陸軍當局は經費不足に累せられて居る結果でもあらうが殆ど空中問題を閉却して居るのは奇怪である。英國が空軍を陸海軍から獨立せしめ、別に空中省を置いて空軍の大擴張を斷行し、而も之を永久に維持せんとしたに拘らず、最近流行の軍縮熱に累せられ航空機の新注文を従前通り與へ難い苦境に陥り、御用會社のロールス社から今後は飛行機製造機關を閉鎖せねばならぬと脅威されて居るのは、擴張し過ぎた爲に起つた問題であるが、我國の如く反對に閉却し過ぎて居るのも不安に堪へない。空中戦は戦争の勝敗を決するに價しないとは我陸海軍兵學家の所見であるが、英海軍は儼存しても倫敦は千回以上の襲撃を受け、世界一と呼ばれた飛行隊を有した佛國でも、巴里の空中襲撃を蒙つたのは數百回に及んで居る。軍用飛行機の航続力は約二千基米(片道約二百五十里)に達して居る。現在では四面環海の我國が如何に多くの陸軍を有し、敵艦隊を防止し得る海軍力を持つて居た所で、空中襲撃を受けぬと何人も斷言出来ぬのである。フォール大佐(佛國飛行將校)は三五六發の爆彈投下三時間半の襲撃で、東京全市を焦土とすることが出来ると述べたが、空中燒拂ひを免れ得る都市は、日本全國ドコを探しても見當らぬ。陸海軍當局が微弱な航空機關を統一することこそ一一致せず、各自が帯には無

論のこと權にも足らぬ貧弱な航空機關をドコ迄も獨立して所有せんとして居るのは噴飯の至りである。又我國の要塞は大正二十四年度迄は上空に對して全然開放しであつて、一發の爆彈投下を受けても頼みとする大砲は粉碎されて仕舞ふのである。要塞の上空防備は、海軍側で受持つべきか陸軍で負擔すべきかさへ未だ全然確定せず、空中防備は何等具體的に成つたものがないのである。陸軍當局としては航空關係の豫算が近年幾度か削減されるので、計畫の樹てやうがないと云ふかも知れぬが、他に膨大な軍事費をセシメた揚句に、更に航空費と乘るから、困難に成るのであつて、軍縮を更に徹底せしめ、自ら捻出した經費を航空方面に振り向ける案を立てたら、文句なしに實行出来るのである。殊に此二三年間に滿洲獨立守備隊を全部現役下將卒で編制したり、輜重兵隊を九個中隊も新設したり、朝鮮に高定員と稱して歩兵六個大隊を増設したりする冗費があつたのに徴すれば、航空隊及航空機關の擴張などは苦もなく行はれた筈である。殊に貴衆兩院の有力者に對する説明に據れば、最近發表した軍縮案は未だ確定したのではないとのことであるから、今後航空勢力の完成を期する目的で、整理の更新を行つたら一層妙である。併し一時間飛んでも約三百圓を要し、小型飛行機は四萬圓もかゝるが、其命數は一年前後より保たぬのである

から、軍事當局が戦時に必要な航空勢力を平時から軍用として常備して置かうと云ふのは誤つた考へであり、我國力に照して出来ない相談である。即ち戦時自由に徴發して戦闘の用に供し得る飛行機及飛行家を採用し、併せて航空機の製造能力を高むる爲製造機關の發達を圖るには民間航空事業の獎勵保護が必要となるのである。其の爲めには、是非共現在の航空局を陸軍から分離し、其規模を大にして、民間航空事業の發達を促進する機關たらしめる必要がある。陸軍省が航空事業獎勵の爲に支出して居る獎勵費は、十年度が五万圓十一年度が八万圓である、僅に十萬圓に足らぬ獎勵費では何年経つた所が民間の航空事業が飛躍しよう筈がない。獎勵費は少くも百万圓以上と陸海軍を初め政府部内の各航空關係當局は私心を去り、虚心坦懐に航空局の獨立を促進し、民間航空事業の發達を圖り、戦時の空中勢力を充實することを期せねばならぬ。

一〇. 彈丸を何うする

東京及び大阪の兩砲兵工廠にどれ程の兵器彈藥の製造能力があり、又一日何萬發の彈丸を製作

し得るかは、陸軍當局も極力秘密にして居るから、之を素破抜くのは暫らく遠慮するが、尠も現在の新兵器充實計畫が完成した曉に一朝事あつたとして、之等の各師團に配屬された新兵器、殊に重輕機關銃から發射する彈丸を十分と言ひたいが、實は不十分にも製造する能力のないだけは斷言して憚らぬ。新兵器の充實計畫は、陸軍省案に依と九千八萬圓の豫算で、十二年度から大正廿四年迄の繼續事業として完成することに成つて居る。尤も豫算の關係で、臨時部經費の大削減を餘儀なくされる場合には、完成年度を十四年とか十五年とかに延長せねばならぬが、現在の計畫では國防充備の年割額と新規事業たる兵器充實費の年割額とを合して、約二千万圓弱が要求されることに成る譯である。豫算問題は姑く別とし、新兵器の充實計畫は陸軍の立案通り大正二十四年度迄に完成するとして、サテ之等新兵器を活用する場合の射耗彈の供給を如何にせんとする考へであらうか。所謂新兵器の充實は獨り常備廿一個師團の各隊に配屬するものを製造する許りでなく、動員に際し編成される豫後備部隊及び、其他の特殊部隊の使用に充てるものをも常備する計畫であるのは毫も疑ひなく、其れでなければ九千八百萬圓と云ふ巨額な經費は算出されない。此の點は洵に行届た計畫であると賞讃に價する。そこで再び之等の新兵器で射耗すべき彈丸

の補充供給のことに逆戻りするが、遺憾ながら陸軍には未だ其邊の成案がない。尤も當局の口占に據れば、砲兵工廠の製造能力では到底間に合はぬことだけは承認して居るらしいが、サテ其れを何うするといふ成案はないから、忌憚なく言へば軍需は出来たが、イヤ大正廿四年までに造り上げる計畫は樹てたが、中身はなく外出は不可能なのである。此缺點を補ふのは海軍で、燃料を貯蔵する方針を樹てたやうに、平時から弾丸の集積計畫を立てるか、或は民間工業の利用に依るかかの二つであるが、陸軍當局の肚裡は未だ孰れとも決つて居らぬ、第一案は金で解決の付く問題であるが、第二案は我國の工業發達の現状では、言ふべくして行はれ難いものである。例へば國內の現存するセルロイド工業會社は、戦時火藥製造會社とすることが出来る。又ダイナマイト製造會社も利用は出来る。尙民間で既に着手して居る二三の兵器製造會社に命じて、弾丸の各部分を分解的に製作せしめる望みもある。併し之等もイザと云ふ場合には技術と熱練の二つが必要であるから、泥縄式の速成を許さぬ。現に陸軍省には作戰資材調査會なるものがあり、小泉六一少將を長として十數名の専門家が久しく調査を續けて居るから、既に此の點に關した意見が纏まつて宜しい時分であるが、明年度の豫算中に其邊の顧慮が毫も加へられて居らぬのは何うしたもの

か。國防を國民の國防と自覺して軍縮の斷行を迫る以上は、此點に就ても陸軍當局の腹中を確めた上、機宜の處置を講ぜしめて置かねば危険千萬であると。

十一、批評の批評

最後に當局公表の軍縮案に對する各方面の反響及批判を検討して、一先本稿を終らうと思ふ。前議會に於て建議案を提出した政、憲、國三黨の意圖は未だ明確に斷言は出来ぬが、都下の各新聞紙上に掲載された各政黨の意圖と、當該政黨の領袖談として傳へられた所に據ると、國民黨が今回の軍縮内容に不満足なのは疑ひもなく窺知される。憲政會も亦不満足らしい態度を示しては居るが、然らば何うしろと云ふのか、具體的には其の眞意を洩らして居らぬ。孰れ第四十本議會迄には何とか其の立場を明かにするのであらう。政友會は最初の當局案に對しては頭から噛みついたが、本當の當局案だと稱せられた二度目の發表には略満足らしい意圖だから、今日では陸軍當局もホット一息して居るであらう。其他個人の意見として新聞雜誌に現はれた軍縮批判は相當の數に達して居るが、其將軍談、陸軍某要路談杯とデニール附の署名で掲げられたものは悉

く陸軍省の直接軍縮に關係した當局の宣傳であつて、孰れも近頃の暑氣で臭味を帯びた手前味噌許りであり、其記事の出所を知れる者に取つては検討に價せぬから、其の批判は御免蒙ることにする。又民間の軍事通橋本勝太郎(中將)河野恒吉(少將)津野田是重(少將)三君の纏まつた批判に接しなかつたのは甚だ遺憾であるが、江木翼、尾崎行雄、蟠川新の三氏が、各々其意見を公表されたので聊か意を強うするを得た、併し其の所説は三氏三様であつて、我國民の軍縮に對する意見の反映であるかのやうに猜せられる。蟠川博士と尾崎氏とは、全然相反する意見の所有者であつて、蟠川博士のは世の軍縮論は不可解であつて世界は軍備に、汲々として居るのに我國だけが陸軍の縮小をするのは何んのことか譯が判らぬと云ふのが要旨であるが、其理由として

- 一、軍縮は世界の大勢ではない
- 二、軍縮で平和は持ち來たされぬ
- 三、日本の四圍の情勢變化が舊來の兵力を要せぬと云ふのは誤りだ
- 四、軍隊以外で軍事教育は出來ぬ
- 五、海軍を縮小したから陸軍をも縮小せねばならぬと云ふことはない

等を續述して居る。然るに恰も之を反駁して居るやうなのが、尾崎氏の意見であつて、同氏は

- 一、抑も軍縮建議案が全く無意味不徹底であるから、今度の陸軍省案が假りに政友會案と略同一であらうが、或はそれ以上であらうが絶対に反對する。
- 二、露國の現状を見れば殆ど自滅の悲境にあるから、最早我陸軍を十個師團に減縮しても何等の脅威を感じぬ筈である。

と述べ我國と侵略主義との關係にも言及して居るが、以上兩氏の意見は大體論であり、而も既に世間で論じ盡されたのであつて、公平に言へば結局水掛論に終るべき性質のものであるから、其の是非は暫らく讀者の判斷に一任しよう。之に反し江木翼氏の批判は頗る具體的である。同氏の意見を要約すると左の通りである。

- 一、今回の軍縮結果は、在營日數を僅に四十日間短縮した許りで、平時定員を減じたから従前通りの戦時兵員を得やうとすれば、其の素質は當然低下する。
- 二、戦時兵員の素質を低下せぬやうにすれば、自然戦時兵員の減少を來たす筈である。
- 三、斯かる姑息な軍縮ではイカメから、宜しく國防會議を開設し、陸軍の戦時計畫を根本的に變

革し、國民的理解の下に新國防計畫を樹立せんことを望む。

江木氏の意見に誤りはない。其の通りであつて末項の國防會議を起して、國民と共に新國防計畫を樹立せよと云ふ點には全然賛成である。併しながら平時定員と戦時得員の關係は單に兵數の上から觀た場合に誤りがないと云ふ迄であつて、戦闘力の點から觀察すると、江木氏の意見には誤算がある。なぜなれば陸軍當局は軍縮と同時に新兵器を採用し、編成改正を斷行することにして居るからである。即ち機關銃一挺は、一分間に約六百發の小銃彈を發射し得るから、一兵卒が一分間に五六發を發射し得るのに較べると、機關銃一挺は兵卒百乃至百二十名の威力に匹敵する割合である。従つて當局は江木氏の攻撃に對し恐らく兵數は制しても、戦闘力には變りがないと答へるに相違ない。併し陸軍に關係のない江木氏としては卓論を吐いたものと謂ふべきである。要するに問題の軍縮案も當初理狀維持を理想とし、テコでも動きさうもなかつた陸軍當局としては、空前の大英斷を企てたものと心得て居るのであらう。

軍縮批評の批評の批評

一、江木翼氏の駁論

(一)

「吾輩は過日今回公表の陸軍々縮案は戦時要員の改定であらねばならぬことを指摘した。即ち陸軍は戦時要員改定の一步を踏出し、更に三步五歩を踏出すべきであることを指摘した。吾輩は軍縮案に對して微細に涉り批評すべき澤山のものをして居るが、唯纔に一事を指摘するのみに止めたのである。此簡單なる指摘に對し、新聞に批評が載つたが吾輩は非常に憚むだ。陸海軍に對する少しく専門的の議論となると、恰も鐵砲丸を打出したと同様後に反撃すること、即ち反對批評の類を聞かないのが常であるが、今回は吾輩の海軍論に就ても、將た陸軍論に就ても一二の批評を聞くので吾輩は輿論の感受性の進展と見て大に喜ぶのである。去りながら吾輩の批評に對する批評に至りては全然感服せぬ。評者は陸軍當りの意見を聞いて参考に加へたとすれば大に誤られて居ると信ずる。右批評の要點は江木の論たる平時定員を減じたが爲めに、戦時得員の減すべきことは誤りは無い。然し新兵器を採用し、戦闘力を増すが故に兵數は減じてても戦闘力には變り

が無いと謂ふに在る。」

(11)

「此議論には一つの真理は含まれてをる。新兵器が用ゐられる夫れが戦闘力を増す此場合には其増すといふ事實文は争はれない真理である。去りながら新兵器によりて増大したる戦闘力は如何なる場合に於ても、其作用を呈示し得べきかと云ふに必ずしもさうでない。例へば今度機關銃隊を歩兵聯隊に屬せしめることと假定して見る。戦闘の或時期までは此機關銃隊は非帶の働きをする。恐らくは普通歩兵の百倍乃至百二十倍の働きもなし得るであらう。去りながら結局吶喊陣地占領といふが如き、銃剣を以て戦闘する期に入りては矢張普通歩兵の仕事である。此關係は恰も砲兵が歩兵の進出を便ならしむる爲め掩護砲撃を遣ふのと一般である。砲兵を多くすれば歩兵を減じてよいかと謂ふにさうは行かない。各特種の作用を有するからである。批評者の謂ふ所は恐らくは輕機關銃隊のことであらう。輕機關銃に至りては機關銃とは大分趣を異にして居るが、普通小銃との作用に至りては矢張大分違ひがある。一人の兵が一挺の輕機關銃及び附屬物を携行する様な時期が來れば別であるが、今日では六、七人乃至八、九人で携行するもの、ようである。」

今日の狀態に於ては矢張作用の同からざる所があると見なければならぬ。随つて戦闘の終局効果を收むる普通歩兵の任務が減じないとするなら、輕機關銃隊の附屬せしめられたる爲め戦時要員を減じて可いと謂ふ結論には俄に到達しない。

左様には論ずるもの、吾輩は批評家の論には一面に於て大なる真理を含むものと思ふ。歩兵附屬の輕機關銃隊で大掃蕩を敢行すれば、普通歩兵が劍銃占領をやるのも力少くして足りる譯である。此點は如何なる數理的割合になるものか、詳かに専門家から聞いたことがないから知らないが理に於て正に左様に立論し得る。」

(12)

「然しながら吾輩は茲に陸軍の所見を支持する者の如く見ゆる人々に尋ねたい。

陸軍は是迄新兵器を採用したる際、其戦時戦闘力を増す故を以て平時定員を減少したることありや。

先年歩兵聯隊の全部ではないが、多くのものに機關 隊を一個つゝ、附屬せしめた、一機關銃隊の人数は歩兵一中隊の人員と相惹いて居ると思ふ。是れは例の所謂編制替と名のつくもので決行

した。此場合歩兵聯隊の中から機關銃隊を入れたが爲めに戦時戦闘力の増大するだけは減員したかと謂ふに、決して然らず、唯單に是迄の編制の歩兵聯隊の上に百三十人あまりの機關銃隊を増した丈けである。而して機關銃隊が普通歩兵と相援け、大に戦闘力を増すに至つた事は何人も疑はない。陸軍の遣り方は全體に涉りて此の通りだ。先年寺内内閣から原内閣にかけて實行せられた所謂編制替なるものは事實に於て約一萬五千の増員である。世間では別に師團増設でもないからよからう位のことと通した。否此大增兵であることに氣付かずに居た政治家が多かつたように見えた。此の如く新に砲の威力の大なるものを採用する。隨て編制も變へるが然し戦時戦闘力の増大せる所以を以て平時人員を減ずるかといふに、決して左様でない。」

(四)

「往年歩兵二年兵役制を實行したが、歩兵在營の總數は減じなかつた。毎年の徵募人員は當然増えた譯だ。毎年教育を完了して退營する者は大に増した譯だ。例へば當時歩兵の在營總數が十二萬人と假定する。三年制の時には其の三分の一が教育を終はり退營するのである。即ち年々四萬づゝ既教育兵を歸都せしむる。然るに二年制になつては年々總數の二分の一即ち六萬人を歸郷せしむることとなつた。換言すれば戦時定員は非常に増加したが、戦時得員を増大する爲めに二年制を採つたかと謂ふにさうではない。歩兵の教育は二年にて足れりといふに在つた。然らば在營兵總數を減じなければならぬ譯であつた。

其後砲兵、工兵等を又昨年に至りて騎兵の二年兵役制を實施するに至りて、矢張り在營總數は減じて居ない。換言すれば戦時得員の不必要なる増加を執行した譯である。知らぬ間に戦時得員が増加して居るのである。

斯樣の場合に陸軍は親切に戦時得員は以上の必要を認めぬから、平時教育すべき兵員は是にて足るといふが如く、毎に戦時得員を目當として平時定員を定めて居るかと言ふにさうでない。一口に言へば戦時得員の増す方は固より敢て辭せない、又戦時戦闘力の増す方亦固より敢て辭せないといふのが今日迄の陸軍の遣り口である。」

(五)

「今度輕機關銃を採用することになつたから、其れによりて戦時戦闘力を増す割合に普通歩兵の戦時得員を少くしてよいといふ事になれば、頗る親切な遣り口と謂つていい。然しそれは歩兵に

就いてのみ謂へる辯解である。今後の平時減員は歩兵のみならず砲兵其他にも及んでをる。新兵器の採用ではチヨット辯明にならぬ。要するに吾輩は戦時計畫の變革であると認める、少くとも従前の遣り口に對し(戦闘力の増減は別とし)戦時計畫の變革であると認める。既に百尺竿頭一步を踏み出したものである。我陸軍たるもの最少し世界の時代觀に觸れ、極東の周圍觀察に密に而して更に國民に對し親切ならんことを望む。

吾輩は公表案に對し大に批評すべきものを持つて居るが、先づ大本だけにつき一般の了解を得たいと思ふて細道に入ることは避けて置く。(原文)

二、貴族院議員江木翼氏に答ふ

一

軍縮批判の第十回目に批判の批判と題して、江木翼氏の軍縮意見に對し批判を試み、兵數と戦闘力との關係を無視してであると斷定したのに對し、江木氏は廿七日の東朝紙上に於て反駁ともつかず肯定ともつかぬことを再説した後で、陸軍當局に新國防計畫の樹立に關する忠告的希望を述べ

べて居られるが、其の第一、第二項に就ては批判者として答辯の責任あるものと信するから、爰に兵數と新兵器戦闘力との關係に就て再言する。

二

江木氏は軍縮批判が陸軍當局の言若くは説明を參考にしたものと付度して居るやうであるが、其れは全然誤解である。吾人は此の數日間山梨陸相にも兒嶋次官にも面談せぬのみか、關係局課長とも軍縮に關れた問題で意見を交換したこともない。又陸軍當局の軍縮意見を妥當なりとて、之を支持する者でない事は、軍縮批判の第一回から第九回迄を拾ひ讀みただけでも頗る明瞭であらうと信する。ナゼなら全文殆んど當局案の攻撃及び非難に終始して居るからである、殊に去る十八日の都下諸新聞に陸軍省人事局長竹上少將の軍縮批判に對する反駁説が掲載せられて居るのに徴しても十分裏書されるであらう。事實を言ふと軍縮批判を氣にしたのは他の何人よりも陸軍當局であつたのである、ソコで序であるから竹上少將の反駁説に對しても最後に一言する考へである。

三

江木氏の唱ふる通り、平時の定員を減じた以上は新兵器を加へやうが、舊兵器を擔ぎ出さうが戦時得員の減ずるのは必然的事實であつて、一點の疑ひもないのである。併し乍ら單に其の點だけでなく、陸軍當局案を非難すれば、當局は恐らく新兵器を補充するから、結局戦闘力には影響がないと答ふるであらうと云うたのである。其の理由は江木氏も然う言ふ眞理も認められるし、然う立論も出来るかと承認された通りである。又所謂新兵器と稱するのは輕機關銃許りでなく、重機關銃(從來のもの)をも含むのである。輕機關銃の使用に要する兵卒數は、近く其の操法に熟練したら江木氏の擧げた數よりも三四名尠ない數で操縦し得る事に成る筈である。併し此の數などは大局に著しい影響はないから、孰れでも宜しい。重機關銃を新兵器の中に加へるのは可笑しいが、陸軍の新編成案中には歩兵聯隊に現在一隊しかない重機關銃隊を二隊とする計畫があり、出來たら各大隊に一隊宛を附したいと云ふ希望をも懷いて居つたのである。所が豫算は未だ査定前ではあるが、財政の都合で該計畫はお流になりさうである。従つて重機關銃隊の増設がオチャンと成れば陸軍案には其れ丈の手違ひが起る譯である。斯うなると所謂戦闘力にも影響する筈である。尙言ふ迄もないが歩兵隊に配属される新兵器には重、輕機關銃の外に平射砲(狙撃砲)、曲射砲(迫

撃砲)擲彈筒等があるのである。

四

歩兵隊には新兵器が配属されて其戦闘力に變りがないとした所が、騎、砲、工、輜重等の特科兵の數を減じたのは、當該兵科の活動力を尠くしたであらうと云ふ江木氏の説は正しい。歩兵は砲兵の代りに使用されぬ又騎兵は歩兵の代りに成らぬと云ふのも其の通りである。今回の軍縮案に就て兵科毎に切放して觀察すれば、騎兵が前に較べて其戦闘力を殺がれ、又野砲兵が甚だしく微弱に成つたのは事實である。併し騎兵が其の兵數を減せられたのは決して咎むべきことではなくて、頗る當然な話で、舊露國の哥薩克騎兵と對抗させる爲に異常に擴大された我が騎兵隊が、其れ程の必要のなく成つた今日、減員されるのに何の不思議もない。吾人が二年越に騎兵隊の縮小を叫んだのも其の爲である。砲兵と一口に言ふが、八釜しく言へば野砲、山砲、野戰重砲、攻守城砲等に區分されるのであつて、各其性能を異にして居る。今度の軍縮で減員されたのは野砲兵であつて、野戰重砲兵などは却つて増員されて居るのである。併し砲兵科を一括して看れば無論兵數の減少である。曩に掲げた軍縮批判で歩兵橫暴の聲が砲兵將校中から起つたことを述べたの

は、這般の消息を傳へたのである。

五

戰場に於る軍隊が敵と戦つて遺憾なく其力を發揮し得る爲には、戦術と軍制とが優れた上に之を運用する、秀でた指揮官を必要とする。併し運用の妙は一に心に存すともいはれ、天賦の才能を議論の資料とする譯には行かぬから、指揮官の頭の問題は姑く別とする。尤も以上の事柄は對手國の國力とか、國民の後援とか、物的資源とかを總て同一と見るか若くは全然之等の問題を離れた上の議論であつて、單に軍事上から立論した話である。ソコで歩騎砲工輜重等の割合及其の割合が決定した上で、各兵科内の編制を如何にすべきか、軍制上の問題である。即ち國軍の編成に當り歩兵が多いとか騎兵が少いとか言ふのが夫れで、金二枚銀二枚は當り前だが、金三枚銀一枚を得策とすることもあらう。併し四枚共銀許りに限ると感ずる場合もあらう。併し四枚と云ふ數を其儘にしての内容の變化だけなら攻防力の總和に變りはないとも理窟は付かうが、四枚を三枚若くは二枚とした今度の軍縮で、若し當局が陸軍は依然現狀維持で戦時得員にも戦闘力にも増減がないといふならば夫れは江木氏の言ふ通り虚偽である。

六

陸軍當局は軍縮を實行せずに済んだとしても、實は歐洲大戰の教訓に促され歩兵隊の編成改正は其職責上斷行せねばならなかつたのである。即ち今回の軍縮案に其の編成改正を實行するに當り、軍事費の節約を強要された結果、改編と節約とを按配した迄である。併し軍縮前の師團を軍縮完成後の師團に較べて、孰れの戦闘力が優れて居るかと云ふ問題は解決が容易でない、舊二十一箇師團は五萬六千だけ兵員は多いが、新兵器が配屬されず軍制上時代遅れであるから、面目を新たにする二十一箇師團に較べて決して有力だと言へぬ許りでなく、或は新師團の戦闘力の方が却つて優越して居るかも知れぬ。要するに戦闘力の問題は實戦以外に正確な試験の途はないから此邊で打切りにする。

七

軍縮と新兵器と題する江木氏の所説中第三項以下は特に陸軍の所見を支持する者の如く見ゆる人々に尋ねたい」と前置き附の反問であるから、陸軍の所見が何うあらうと全く無關係な吾人としては反駁の必要もなければ、釋明の責任もないが、同じ問題を他方面から論じて居るのであ

るから、取り様に依ては軍縮批判に對する批判とも見えるし、又單に陸軍當局の態度を咎めたものとも受取れるが、兎に角軍縮批判に誤解を伴はしめるのは遺憾であるから念の爲簡単に附言したい。

八

陸軍は是迄新兵器を採用したる際、其戦時戦闘力を増す故を以て平時定員を減少したることありやと云ふお尋ねであるが、鐘や太鼓で探してもそんな實例は唯の一度もない。從來の態度は一兵でも一銃でも多い方が宜いと云ふ方針で、人馬も武器も材料も増せるだけ増し、擴張して來たのである。例の二個師團増設運動は正面から堂々と擴張を企てた最後のものであるが、其後と雖も野砲隊重砲隊の編成替を斷行して擴張を行ひ、豫後備軍人で組織して來た滿洲獨立守備隊を、イッの間にか全部現役軍人と取替て仕舞ひ、高定員と稱して一旅團分の歩兵隊即ち六個大隊を朝鮮に新設し、戸山學校時代には教導大隊であつたのを、千葉に分れて歩兵學校に成つてから、俄に教導聯隊に改めたなどは、孰れも立派な擴張であつて、江木氏は「一口に言へば、戦時得員の増す方は固より敢て辭せない、又戦時戦闘力の増す方亦固より敢て辭せないと云ふのが、今日迄

の陸軍の遣り口である」と評して居るが、其れ所ではない、陸軍當局はドウかして平時定員を増加して、戦時得員の増加を圖り、能ふ限り優秀多大な戦時戦闘力を得たいものだと思望し、歡迎し、企圖して來たのである。従つて、軍備制限だの軍縮だのと云ふ問題が、八釜しくなかつたら無論現在も將來も決して是で宜しいとは言はずに、ドシドシ擴張を企てたに相違ないと信せられる。

九

陸軍今回の舉を戦時計畫の變革であると認める、と云ふのが江木氏の大局論であるやうに承知する、戦時計畫と云ふのは稍明瞭を缺くが、若し國防方針の變更に伴ふ作戦計畫の變革と云ふ意味だとすれば、江木氏の所見通りである。舊露帝國の復讐戦を頭痛に病むだ當年と、露國が崩解して新たに太平洋の波がザツつき出した今日とは國防計畫に變遷があり、作戦方針に變化の起るのが當然であつて、若し陸軍當局が夫れを言ひ盡るなら要らぬ遠慮であり、本當に變りがないと考へて居るとしたら陸軍は眠つて居るのであるから、そんな當局に帝國の國防を任して置くは危険である。併し幸にして所謂國防方針は既に變改されて居るのであるが、吾人は曩に假想敵國の

變遷と國防方針の内容を記述した爲に、陸海軍當局を煩はして居るから、此處では殊更に同問題に觸れるのを避けたいと思ふ。尙江木氏は最後の數行を極めて抽象的に記述し、穩かに陸軍當局の反省を促して居るが、若し其の趣旨が時代の推移と極東の狀態に鑑み、今一層徹底した軍制改革を斷行しては何うかと云ふのならば吾人は全然氏の意見に賛成なのである。

一〇

竹上少將の反駁を覆へすのは極めて容易であり、又簡單である。同少將は本省の人事局長と云ふ資格で、筆者が今回の軍縮大異動では進級者の數に比して減首者の數が少いのは不思議であると評したのに對し、進級者の多いのが當然であると云ふ理由として、中將一名が缺員となれば其補充として少將、大佐、中佐、少佐、大尉と各階級に影響するから、減首將校總數が三百六十六名もあれば、進級者の數は千五百名以上に達しても不思議はない。然るに今回の進級者は千廿六名であるから適當であると述べ、非難は當らぬと強辯して居る。曾我廼家五九郎か何かであつたらハア左様かと承知するであらうが、左様でないから困るのである。御説の通り減首將校三百六十六名の大部分が中將ならば文句はないが、事實は中將が十一名、少將が十七名、其他は全部大

佐以下であつて、而も一番多いのは少佐と大尉であるから都合が悪いのである。従つて是れ以上説明の必要もあるまい。

陸軍新舊戦法の比較

一、舊戦術と小銃萬能

世界大戦は政治外交の舞臺に絶大の影響を與へ、殆ど列強の面目を一新したが、世間に餘り知られずして、而も顯著なる影響を蒙つたのは各國の陸軍であつて、就中其の戦法及軍隊裝備の上に驚くべき變化を惹起し、大戦を一期として戦法の革命が行はれたのである。

我國の如きも歐洲戦場には遂に遠征するに至らなかつたが、大戦の教訓を基礎として遺憾なき研究が重ねられ、大正十一年の十月中には富士裾野に於て新戦法に依る陣地の攻防戦が試演せられ、總て議會に提出せられるべき大正十二年度の陸軍豫算には、約九千六百萬圓の新兵器充實費が十三ヶ年間の繼續費として計上せられて居るのである。之等は悉く新編成、新裝備、新戦法の

採用に伴ふて必要を生じた経費であつて、之に依つて我陸軍の面目が一新せられることに成るのである。然らば大戦後根柢から改革せられた陸軍の新戦法とは抑々如何なる様式のものであらうか。新戦術の熊様を知る爲には舊戦術との比較を試みねばならぬ、又新裝備の如何なるものなるかを知る爲には舊裝備の内容を知るの必要である。

十九世紀の中葉に、後装小銃が發明されてから、歐洲大戦の勃發當時に至る約六十年間は、歩兵の主要兵器たる小銃及び銃劍の萬能時代であつて、之等の戦闘用具は無煙連發銃の發明と同時に逐次發達して、世界大戦の突發以前には其最高潮に達したのである。尤も日露戰爭中、旅順要塞の包圍戰に於て露軍が初めて機關銃を使用し大いに日本軍を苦しめ、其の効果も著大であつた爲に、一時は其の殲滅的效果が世界軍事界の視聽を惹いたが、併し當時は尙未だ小銃萬能時代を脱し切らず、所謂肉彈戰が必勝戦法として尊重せられたのであつて、列強陸軍の軍制に徴すれば歩兵は補助火器として一箇聯隊に僅か六挺の機關銃を有したに過ぎなかつたのである。

轉じて火炮(所謂大砲)の方面は何うであつたかと云ふに、十九世紀の末葉に至つて、理想的速射野砲の發明があり、其の射撃法も大いに改良せられ、火炮の威力は大いに認められたが、尙ほ單一野砲時代であつて、他種の火炮は餘り實用に供せられて居なかつた。併し全然皆無であつた譯ではなく、野戦重砲の必要は列強陸軍の先覺者間に叫ばれたものではあつたが、獨逸軍が一軍團に十五冊榴彈砲十二門を有して居つたのが、斯界の先驅なりとして世界軍事界の注目を惹いて居つた位であつた。

前述の如く小銃と野砲とが軍隊武裝の中心であつた時代に、各國陸軍の齊しく採用した歩兵の戦法は所謂散兵戦術であつて、長年月間には多少の變遷は免れなかつたが、其の根本方式には毫も變革はなかつたのである。即ち一線上に疎散に散開した歩兵は、其の小銃火を利用して敵を制壓し、其の瞬間を利用して一進し、五十米突の距離を前進すれば更に停止して、射撃の効果を發揚して敵を制壓するに努め、斯くて一進一止を繰返し、最後には敵に肉薄して銃劍を振り、所謂突撃を敢行して最後の勝敗を決したのである。

又防禦の場合に於ては、單に一線上に成るべく多數の小銃を排列して、發射する火力を能ふ限り熾烈とすることに腐心したのである。尙各兵は一樣に小銃と銃劍とで武裝せられてあるから、兵卒各自の動作は全散兵線を通じ、單一整齊であつて、中隊を以て指揮の單位とし、中隊長の一

號令の下に進止を律するのを原則とし、小隊長以下の各指揮官及び兵卒各自が獨斷で事を處するやうな場合は、殆ど皆無と謂つても宜い程であつたのである。

此間砲兵の動作は何うであつたかと云ふに、歩兵の前進路開拓と其の支援を専らとしたのであつて、戦闘動作は頗る單純であつた。

二、新戦術と新裝備

前述の戦法は、一九一四年歐洲雄國軍が戦場で相見えた際に應用せられたのである。此の戦法を以て交戦して居た當時、兩軍歩兵を喫驚せしめたのは、殲滅的效果を有した機關銃の威力であつた。又獨軍の野戦重砲は震撼的威力を發揮して、優秀なる佛軍の野砲をして顔色なからしめたのである。

其後戦況が一地方に膠着して陳地戦に陥つてからは、兩軍共に機關銃及び重砲の増備と其の改良に苦心し、大戦の中期頃から其數が著しく増加し、且つ其の質も亦大いに改まつた。

抑々我軍に殲滅的損害を與ふる敵の機關銃が、適當に地物を利用し工事を施してある場合には

之を撲滅するには、單に小銃火若くは機關銃火丈では駄目であつて、何うしても砲火の力に俟たなければならぬ。従つて一方軍に多數の機關銃が用意された場合には、對抗軍でも砲數の増加を必要とするのは言ふ迄もなく、殊に堅固なる敵陳地を破壊する爲には、益々味方の砲兵を増加する必要が起るのである。以上の戰術的關係は因果相循環して、大戦間際限なく機關銃及び各種口径火砲の増加を來たしたのである。

機關銃の多用は、歩兵火力の效果を著しく増大したには想違ないが、大戦の初期に使用せられた機關銃は所謂重機關銃であつて、行動の捷徑を奪ふ歩兵用としては不十分であつて、之を多用すると自然歩兵の行動を鈍重ならしめる弊害が伴つたのである。其處で其の弊を醫する爲に、自然の要求として、一層輕快に運動し得べき機關銃の必要を生じ、其の理想は大戦中期に至つて漸く實現せられ、今日各國軍の歩兵隊が主要火器として採用して居る輕機關銃が考案されたのである。

前述の如く、敵の機關銃を撲滅するには砲兵の火力に俟つのが最も適當であるが、常に砲兵に依頼して居たのでは、其の爲に歩兵の行動に束縛を付け、従つて軍の主兵たる價値を減損するや

うになるので、歩兵獨力で敵機關銃の撲滅が出来たら是れに越した利便はないのである。是に於てか大戰中期に至り此點に關する研究も亦旺んに行はれ、結局歩兵の獨力を以て敵機關銃を壓伏出来るやうに、平射曲射の歩兵砲及び擲彈銃、擲彈筒等が發明されたのである。

即ち輓近の歩兵は次の様な多種複雑な新兵器を以て裝備せられ、世界大戰前に各國の歩兵が單に小銃と銃劍とを以て武装せられ、極めて少數の重機關銃を裝備して居たのに較べると、實に隔世の感なきを得ないのである。

△中隊に有するもの

- 一、小銃、補助火戦用
- 二、輕機關銃、主要火戦用
- 三、銃劍、接戦用であるが時としては塹壕接戦用として短劍、有刺棍棒の類を加へることもある。
- 四、手榴彈、接戦用のものであるが其種類は色々あつて、單に爆裂彈ばかりでなく燒夷彈、煙蒸彈等の特種な用途を持つたものもある。
- 五、擲彈筒、近距離から敵を制壓する爲に煙幕の構成に使用する即ち煙の幕を作つて敵の陳地を

包み、目視を困難にして味方の前進接近突貫を容易にする爲めに用ふるのである。

△大隊に有するもの

- 一、重機關銃、主要なる火戦用であつて、現に使用して居る機關銃は間接射撃で、遠距離にある目標に對して大なる効果を現はすことが出来る。
- 二、平射歩兵砲、直接に目視し得る敵の機關銃を破壊する爲めに使用する。
- 三、曲射歩兵砲、堅固なる掩蓋を有する敵の機關銃や彈痕等に遮蔽された敵の機關銃を破壊する爲に用ふるのである。

以上の如き新兵器が採用され、軍隊が新裝備を行ふに至つた結果、後裝銃の發明以來半世紀餘の久しい間襲用せられた散兵戰術の無臺は茲に其幕を閉ぢ、新戦法と稱せられる所の戰闘群戦法又は疎開戦法の時代と成つたのである。而して裝備の刷新戦法の變革は編制の刷新を促し、自然軍事界の一新紀元を劃することとなつたから、軍隊教育も亦従つて其の面目を一新する必要に迫られたのである。

三、新戦術の見本

新戦法とは抑々如何なるものであらうか、軍事専門家以外の人々をして諒解し易からしめる爲に、最も単一な状況即ち地形工事に依つて掩護せられ、頑強なる抵抗をなし、殲滅的威力を逞うする敵の單一機關銃集を、歩兵の獨力で撃滅する戦法を次に掲げよう。

茲に想定した情況に於ては、新裝備をした歩兵は、其の歩兵砲を以て敵を破碎撲滅しようとする圖り、重機關銃を以て敵を制壓し、更に輕機關銃及び小銃を之に参加せしめ、尙擲彈筒を以て痛烈なる制壓を敵の頭上に與へ、斯くて數種數段の火力を以て敵を壓倒したならば、其機會に乘じ突撃兵は手榴彈を投げ付け、銃剣を振うて敵中に突入し、最後の勝敗を決するのである。

斯くの如き多種多様な歩兵戦闘手段の併用協力は、各級指揮官の適切なる指揮に俟つ所大なるは勿論であるが、機微の間、兵卒各個の獨斷活動を要求することが頗る切である。特に敵に突入する際並に突入後の紛戦亂闘に於ては、指揮の適否と兵卒各自の自發的活動の可否とが、戦闘遂行上殆ど等一の價值を有すと謂ふも決して過言ではない。

今日の防者は、單一なる火線に多數の小銃を排列して、火力の熾烈を期待することは出来ぬ。蓋し工事を利用した場合と雖も、攻者の銃砲火の威力は稠密なる威力の配備を許さぬ許りでなく、鉛利なる自動火器の特性を遺憾なく發揚する爲には、敵を側射又は縱射する如く、縱深横廣に疎散配備するを適當とし、加ふるに幾重にも障碍物を繞らし、且つ陣地の一部が縦ひ敵手に落ちたとしても、尙嚴然として戦闘を繼續し得るのが必要である。従て陣地の編成も舊戦術時代に比し頗る複雑となり、陣地の一部に小破綻を來たした後にも尙全戦線の動搖を惹起せぬ爲に、陣地の主要部はベトン等の術工物を以て構築せられ、平時巨費を投じて構成した永久築城と其の素質に餘り差異のないやうにせねばならぬ。又陣地の設備も空中及地上の偵察に對し完全、遮蔽し時としては敵を欺瞞する手段として各種の方法を講じ遺憾なきを期するやうになつたのであつて、敵を欺瞞する手段として所謂カモフラージュと稱する方法が施されることに進歩したのである。

戦闘に参加する砲兵の任務は時機に應じ、歩兵の前進に最も危害を及ぼすものを先づ第一に破壊して歩兵の進路を開き、且つ歩兵の前進を直接支援すると云ふのが根本原則であるが、此點は散兵戦術時代と新戦法時代とを通じて別に變革はない。併し新戦法にあつては、砲兵威力の増進

を倍々緊要とする許りでなく、歩兵が遺憾なく砲撃の成果を利用する必要が非常に向上したので此目的を達する爲め、砲兵は特に遊動射撃隊と稱する一種の射法を用ひて、鐵火の障壁とも譬ふべき砲彈幕を構成し、之を適當な速度で推進せしめ、歩兵をして此の砲彈幕に蔽護して一意冒進させるやうな方法を採用することを必要とするに至つた。又陣地戦にあつては、最も堅固に構成された術工物の破壊、周密に遮蔽された敵兵の制壓及び、遠大なる土地に於ける敵の企圖を妨害する爲め、十冊米突以上五十冊米突に達する大中小口径の大砲を必要とし、威力絶大、射程長遠なる此等の火砲には、平射的の加農砲、曲射的の榴彈砲若くは臼砲、並に迫撃砲等其の性能及び口径の多種多様なものを併用し、又發射する彈藥も破壊殺傷の効力を主とするもの許りでなく煙彈等を用ひて、綜合威力の絶大ならんことを期するやうになつた。

三、我陸軍の新裝備

新兵器と新編制との採用は、自然戰闘に於ける配備を疎開にしたので、軍隊の指揮は著しく困難と成つた。従つて指揮を容易にする爲に、通信連絡の敏活を圖らなければならぬ。又各種戰闘

機關の緊密なる連繫就中歩砲兩兵の協同動作を完全にする爲には、通信連絡を敏速確實にするこ
とが戰闘の運命に關する程重大と成つた。此目的を達する爲め通信連絡の技術的方法として電話
無線電信、地中電信、鳩、犬、手旗、信號火、回光通信等を用ひ、尙航空機を應用するなど、現
代科學の全能を利用することと成つた。

新裝備並に新戦法の採用と共に、歩兵の編制も亦新制に適する如く改良され、舊時代には中隊
を基礎單位としたものであつたが、今日に於ては小部隊にも必要な獨立性を帶ばしめ、小隊分
隊などにも各種の兵器を混用して編成されるのである。即ち佛軍の如きは、一輕機關銃を核心と
して之に必要な各種の補助兵器を加へ、之等を一括したものを火戰突撃の兩要素を備へたる最
小單位とし、之を戰闘群と稱して下士をして指揮せしめて居る。實に戰闘群は佛軍歩兵の基礎單
位をなすものである。

我陸軍では輕機關銃分隊と小銃分隊數とに分ち、此の兩者を併有する小隊をして、佛軍の戰闘群
と同様の性能を帶ばしめることに成つて居る。各國陸軍共に重機銃や、歩兵砲のやうなその數比
較的少く運動性の輕捷を缺いて居る兵器は、之を中隊に配屬せず大隊に編合するのが通常であ

つて、通信連絡に必要な技術的機關は、之を聯隊又は大隊に具備せしめるのを普通として居る。要するに新兵器新編制の採用に連れて、戦法に最も顯著な變革を來したのは歩兵であつて、之に亞ぐのが砲兵である。其他騎兵、工兵、輜重兵等にも多少の影響はあつたが、其程度は頗る僅少であつて變革と云ふ迄には至らぬのである。然らば我陸軍の歩兵隊の面目を一新すべき新兵器は、何時頃までに完成されるかと云ふに今後約十三年間を要するものであつて、大正十二年度には僅に唯一挺の輕機關銃が見本的に全國の各聯隊に配屬されるに過ぎない。従つて目下新兵器、新編制を完全に採用し、其研究を續けて居るのは、千葉縣下にある陸軍歩兵學校所屬の教導聯隊丈けであつて、本秋富士の裾野で行はれた陳地の攻防演習に参加し、新兵器の實驗を行つたのは該聯隊であつたのである。(大正十一年十二月七日)

麓の塵

本文は、著者が、大正十一年十月十二日から同十七日にかけて富士の裾野で行はれた陸軍の新戦術演習を陪觀した當時の手記であつて、新戦術、新兵器及び陸軍當局の新兵器充備計畫に對する嚴正批判である。

富士裾野の板妻廠舎に近い六郎塚の御野立場に起つて、遙かに戦場を見渡すと、國防軍とも謂ふべき北軍が甲、駿國境に背を向けて三線に重なり合ひ、一里以上の深さを以つて陣地を占領して居る。戦線の長さは約四里程もあらう。東京あたりから遠く富士を望めば裾野は殆ど一線を爲して、如何にも規則正しく一寸した凸凹もないやうに見えるが、現地に臨めば是れは又意外、大波のうねりのやうな起伏が限りもなく續いて、戦線の端がどの邊りなのかとんと判らぬ。

殊に歩兵部隊の活動はまだ始まらない、時々北軍の戦線から約二里許り隔つた南軍の砲兵陣地と想はれる所にバツと白煙が揚ると、直ぐにコゴゴオ！と物凄いな音を立てて廿四冊の砲彈が晴れた秋空に曲線を畫いて飛ぶ。彈道が見え彈丸其のものも見える、聽て北軍の陣地内に二三丈も高く砂煙りが揚り啞つと思ふて居ると、彈丸の炸裂する爆音が耳朶を打つ、唯夫れ丈けだ、書いたのでは至極下らない。

望遠鏡を手にして廣い裾野を展望すると、北軍の陣地内には鐵條網がある。ベトンで堅めた掩蔽部がある、三線に分れた所謂數線陣地の堅固さも窺はれる。土工作业は去る六月中から施され

たものだと云ふが、陣地に釘着けられた軍隊が夜を日について工事を加へた仕組みであるから、永久的な要塞の防禦工事には及ばないが、確に半永久的の防禦設備であつて、遼陽戦や奉天戦當時には夢想もしなかつた堅固さである。是れでも野戦の一種なのかと思ふと、將來の陸戦がドコに開かれたとしても攻防共に最後の勝利を得るのは容易でないから、戦期は自然長引くであらうと想像される。

遙かに南軍の攻撃正面に望遠鏡を向けると、歩兵線内には機關銃が群を成して居る。其背後に是亦一里近くの間軽迫撃砲、重迫撃砲、山砲、野砲、十五冊榴弾砲、十冊加農砲、廿四冊榴弾砲、十五冊加農砲がずらりと其の筒口を列べて居る。會て野戦と言へば野砲が使用されるのが普通であつたので、稀に十五冊の榴弾砲を使つた位のものである。所が歐洲戦争の惹起した戦術の革命は、肉弾戦を軽からしめて鋼鐵戦を重からしめた。砲種の多様、砲数の夥多なのに喫驚して隣に立つた一參謀將校に質すと、一師團内にある砲兵隊が敵陣地を占領する迄には、砲彈丈で約千六百八十二噸の鋼鐵が發射されねばならぬさうだ。而も二十四冊の榴弾はたつた一發で四百圓もするのだからたまらない。戦争の用意として軍備を嚴に、兵を練るのは肝腎だが戦争は濫りに

行ふべきものでない。

二

兵器の進歩と戦術の推移とは、齒と唇よりもつと密接な關係を持つて居る。其の兵器には火薬の發明と火器の採用とに依て革命的變化が招來されて來たのは既に古い事だ。膂力で優劣を争つた時代や、石棒で相手を叩き撲つた時代から、弓刀鎗の類で専ら殺傷を行つた時代には、重に個人的格闘が行はれたやうに思はれるが、一度火器が發明されてからはガラリと戦術が一變し、個人の體力や武枝の熟練に頼るよりも、隊形や部隊の運用法に重きを置かれるやうに成つた。

ナポレオン戦争時代には、まだ餘程密集した隊形が運用されて居た。併し日露戦役後から歐洲大戦當初にかけては、歩兵の戦闘隊形は散兵と稱して、横に地上へ人で點線を引いたやうな疎散なものが採用され、其背後には援隊とか豫備隊とか呼ばれる部隊が密集してくつ付ついて居たものだ。其れでも戦線は唯一線に止まり、陣地の防禦線でも決して陣地を前後に重ねて配備するとはなかつた。

所が歐洲戦が長期戦となり、戦線が一地方に固定するやうに成つてからは、所述數線陣地の配

備となり陳地を前後に重疊して構成し、第一線が破れたら第二線に據り、第二線が奪取されたら第三線に據つて頑強に且つねばり強く抵抗することに變つた。裾野で行はれた所謂攻防演習は百萬圓からの金を投じて、此種の新戦法を模範的に實施して居るのだ。従つて内容から觀れば新兵器を中心とした科學的知識の競争であるが、見方を替へれば金貨と金貨のカチ合ふ音であり、金貨で金貨を破壊して居る内に、一切が硝煙と共に消えてなくなるのだ。

十年間の統計では富士の初雪は、此の十七日に當る筈ださうであるが、今年は恰も攝政の宮殿下御着の十五日の黎明に七合目あたりまでを雪で包んだ。翌日の拂曉戦には兩軍の兵馬も寒さに震へた程であつたが。宮の上平の御野立場近くで觀戦して居る全國の團隊長二百餘名の間には、筑波嵐よりもズツと冷い軍縮風が吹いて居た。手を伸ばせば届く所で鋭い歩兵の突撃が行はれ、天地を撼がさん許りに轟き渡る砲聲の小やみもない激戦を前にして何事ぞ、敵首の噂に花が咲いて居る。彼等も落着いては見學も出來ぬと見える。

何しろ聯隊で十五名づゝの將校を、敵首しろと云ふ注文だ。志願したものには申出ると傳へたが、希望者は一名もない。無くても來年の三月までには人選をせねばならぬ。將校團長として

は身を斬られるやうだ。而も明日は我が身と來るのが順だ。聯隊長殿で祭り上げられたお互が、板妻の廠舎で、板敷へ列べられた寢蓐の上へ五六人宛目刺になつて眠るのも話の種だが、敵首の悲痛に較べたら、富士嵐の夜風などは物の數でもないよ、右翼方面にも煙幕が揚がつた、煙の中から右翼大隊も突撃してゐるぞ、新たな突撃實行で、演習場へ呼び戻された彼等の魂は、依然軍縮と敵首の夢から醒め切らぬらしいが、其れでも六百程の眼が一齊に北軍陳地の一角に注がれた丈は立派な事實であつた。

三

裾野の攻防演習も十七日で終つた、我陸軍で所謂攻防演習の行はれたのは今度が二回目であつて、前回は大正七年中豊橋附近で演ぜられたのであつたが、當時は軍事調査會員が歐洲戰場で、直接目撃した所や、歐米の軍事雜誌に現はれた資料をこきまぜて、新戦術とは斯うもあらうかと云ふ筋書を作り、其れを實施したに過ぎぬから、素より不完全極まるものであつて、新兵器なども今日のやうに完備しては居なかつた。併し今度の演習は既に出來上つて居る歩兵操典草案の規定を試験する爲に計畫されたのであつて、若し本演習の結果、改善の必要が認められた場合には

草案の改正を企てやうと云ふ目的の下に行はれたのである。併し新兵器の数が極めて少く、殊に之を操縦し得る兵卒の数も多くないので、實演部隊は南北兩軍を通じ、僅に二個聯隊に過ぎなかつた。併し部隊が小であつた丈に、新兵器を理想通り配屬した上で演習することが出来たのである。

其處で演習は果して遺憾なく實施されたであらうか。著者の目撃した所に據ると、演習計畫にも演習實施部隊の教育にも見遁がし難い缺陷がある。或は陸軍側殊に計畫者たる教育總監部當局の怒りを買ふかも知れぬが、實感を忌憚なく披瀝して行かう。第一は演習計畫の拙劣である。統監部の指導計畫は砲兵の實彈射撃と部隊の行動を不自然に結び付けたので、一演習の進行中に部隊の行動を二回も中止して居る。是れは砲兵射撃の効果射撃材料の準備、陣地變換等を圓滑ならしめ、併せて危険を豫防する必要上餘儀なくされたのであらうが、智慧のない話であつて、實彈射撃と部隊の行動とを全然切り放して實演することにすれば宜かつたのである。蓋し計畫者としては砲兵の實彈射撃を演習の中間に挿入して行つたら、幾らか實戦に近い光景の下で射撃が出来ると考へたのであらうが、其れが抑々誤謬である。前に敵なく、彈も飛んで來ず、唯微動もしな

い死物(目標)に對して射撃するのであるから、精神状態は平時と殆ど變りはないのである。計畫者が如何に自惚れた所で、實戦に近い状態に置かれたものと考へるのはお目出た過ぎる。而も一面に於て演習を半途で中斷した結果、軍隊の活氣を奪ひ、敵愾心を全然喪失せしめ、如何にも演習らしき演習となり、毫も實戰的氣分を出現せしめ難い窮境に陥り、演習は極度にダレて仕舞つたのである。激怒して夕方揃み合ひを始めた者を一度引分けて、一日一晩休憩させた揚句、翌日になつてからも一度揃み合へと煽動した所が、先の氣合になれるものではない。演習計畫者は深く此の點を考察し、第三回の攻防演習を實施する場合には是非共改善の必要があらう。

實施部隊の行動を観ると、演練不足の爲か教育方針の周密でなかつた爲か、輕機關銃の射手は射撃目標の選定法を心得て居らぬ。或は心得て居たに拘らず、演習氣分の爲に出眞目にやつて居たのかも判らぬ。併し敵兵の現れさうな地點に對して射撃を加へて居るのは感心であるが、其れが未だ敵兵も現はれて居らぬのに空射撃をして居る。地ならし射撃は彈丸を捨てる丈の効果より外に何の得る所もなからう。

是れも演習氣分の一發露であるが、下士卒を偽裝さして行動させながら、之を指揮する將校が

一名も偽装を行はず、眩しい位に照り輝く日光を浴びながら、指揮刀の鞘をピカつかせ、肩章を光らせたのでは青草を被つた兵卒、蚊帳をかぶつた兵卒が如何に巧に敵に近づいた所が、之を指揮する將校の存在が一切を敵眼に暴露させて仕舞ふ。蓋しダレた演習が身の實彈下にあることを忘れさして居るからである。部隊長及び教育者の注意を煩はしたい。

新式戦法の物真似は實に宜く行はれた。併しタンクの行動には感服出来ぬ。展望される戦場で千米突以上の距離からタンクを使用するのは愚である。殊に歐洲戦場のやうに平坦な地形ではタンクの行動も敏速であるが。富士の裾野のやうな不整地で、さなきだに行動の不自由なタンクを牛の如くノコノコ歩かすのは無理である。五百名以上も居る審判官が、誰一人として南軍のタンクが北軍の第二陣地へはい入りむまでに、タンクの破壊されたことを宣した者はない。演習場へタンクを披露する効果は十分に認められたが、媚集する砲彈の効力を無視して居るのは氣が知れない。是れ亦演習計畫者に反省を求めねばならぬ點である。

四

攝政官御野立ちの朝であつた。貴衆兩院議員に對し、新兵器の説明を試み終つた一中尉は、一斯

かる有利で而も新編成の國軍に取つて缺くべからざる武器が、種々の理由で十分に軍隊へ備へ附けることの出来ないのは國家の爲に洵に遺憾に堪へぬのであります。終りツ』と附言して敬禮をした。頗る上出来である。其の即妙さが中尉の自發的機轉であつたのか、或は單に肉製蓄音器の役目を務めたに過ぎぬのかは、浦鹽に於ける保管武器の紛失事件に似て頗る疑はしいが、併し今度の演習を利用して陸軍當局が宣傳に努めたのは顯著な事實である。

陸軍の秘密主義も可なり古いものだが、演習間所謂新兵器の撮影を禁じ、報道を制限したのは氣が知れない。其れも一般的に取締るのなら筋は通るが、何會社か知れぬが、御用活動寫眞文は自由に戦線内を横行無制限に撮影して居た。更に之等の撮影者が左腕に統監部員と同じ白帯を結んで居るには驚かされた。新兵器は如何にも新兵器に相違ないが、それは我陸軍での話であつて、歐洲大戰に参加した陸軍國では既に使ひ古した舊兵器である。我陸軍が其後を追ひ掛けて漸く實用に供し始めた今頃は、更に一步進んだ優秀なものに改良されて居るであらう。我國で發明した獨創的のものなら話は別だが、どれもこれも借用品許りであるのだから、國民に對して秘密にする必要は認められない。殊に明年度から之等の新兵器補充の爲に、十三年間の繼續費として

約九千八百萬圓の新規事業費を要求しようとして居る矢先である。豫算は議會へ提出されるのだが負擔する者の國民であることを忘れて居るらしい、其國民に對して祕密にせねばならぬ必要がドコにあらう。若し強いて祕密にする必要を製造すれば、それは外國に對してであつて、日本軍の新兵器は未だ頗る幼稚であるから、之を知られては外國から鼎の輕重を問はれる虞れがあると云ふ位のものだ。之に依つても知れるがまだ我陸軍當局は、國民と共に國防軍備の事を圖らうとする所まで進んで居らぬのだ。此調子では今後益々國民と陸軍との疎隔は甚だしくなり、尙幾年か陸軍の孤立は續くであらう。吾人は軍閥を憎めども陸軍を愛する一人である。醒めよ陸軍。

富士の裾野に陳地攻防戰の惹起されるまでの方略は遂に示されなかつた。演習終了後統監秋山大將の試みた講評は例に依つて公開されなかつた。従つて吾人は其双方を與り知ぬ。併しながら著者の判斷に誤りなしとすれば、急襲を斷行した南軍は駿河灣附近に上陸した外國侵入軍であつて、北軍は之を海岸方面に壓迫せんとする國防軍である。統監部の演習指導は南軍を中心として行はれたが、本攻防戰には注意すべき戰略的要素が二つある。假りに南軍に就て言へば、南軍司令官は北軍を急襲するに當り、極力味方の攻撃開始を祕匿せねばならぬのが一つであつて、他の

一つは當面の北軍をして南軍の攻撃實行まで戰略増援を不可能ならしむることである。前者は愈々北軍の陳地に砲撃を加へタンクを進めるまで、攻撃の決心を北軍に知らさねば足るのである。後の要求は北軍増援軍の輸送を妨害すれば足るのであつて、東海道方面では松田、山北停車場に對して爆撃飛行機を活動せしめ、甲州街道方面に於ては、大月停車場に同じく爆撃機を敢行すべきである。又北軍陳地の近くにあつては籠坂、小山兩隘路に對して、増援軍の行軍を妨ぐる處置を取るべきである。尤も之等は南軍十箇師團、北軍五箇師團が對峙した場合に起る戰略上の問題であるから、兩軍の中央部に位置する二個聯隊の實演部隊丈に取つては何うでも宜しい。併し之等の問題を貴衆兩院議員なり新聞記者なりに説明して、其爆撃用の飛行機は目下我國には見本丈しかない。爆撃大隊の新設費は數年間握り潰されて居る。と、もう一名肉聲著進機の役目を演ずる將校を準備したら、陸軍としては満點であつたのだが、サーベル連の宣傳はこゝもと小手調べの姿で、幸か不幸か痒い所には屈いて居なかつた。

出兵の總勘定

軍閥功罪の批判

内田外相が伯爵となり、田中陸相や大谷前司令官が御揃ひで授爵の恩典に浴したのを見ると、現政府は我對露政策を成功の一部に數へて居るかも知れないが、事實は御覽の通りであつて、出兵當初から現在に至るまで、徹頭徹尾失敗の連続である。現に齊多を撤退して後貝加爾を捨て哈府方面を引揚げて沿海州南部に集合し、緩衝國樹立運動を見物しながら越年した所は、何の事はない西伯利を火事場と心得て兵を動かした軍閥が、見事に米國の非常線に引掛り、過激派からは敬遠され、二進も三進も行なくなつたテレ隠しに、吾々は西伯利の秩序維持及び在留邦人の保護に努力したのだと、尼港事件などは忘れたやうな顔をして右手で窶つと口を拭きながら、左手では勳章を受取らうとして居るのだ。軍閥は其れで好からうが、其れでは黒龍州の雪中で全滅した田中大隊や、尼港事件の犠牲となつた六百有餘の同胞は浮ばれまい。又國民として看過するに

は餘りに事態が重大過ぎる。爰に軍閥の罪滅ぼしと云ふ意味で、西伯利を舞臺として行はれた我國最初の政策戦に對し、嚴正な批判を加へ、併せて軍閥功罪の總勘定を試みたいと思ふ。

一、出兵の動機

出兵を翹望した軍閥の腹を割つて見れば、勿論我國の自主的出兵を希望し、且つ單獨の出師を期待したのである。所が實現された出兵は、案に相違して立派な他動的出兵となり、剩へ痛痒痒しの聯合軍が出来上つたのである。従つて爰に至る迄の動機は頗る複雑であつて、之を分てば大體一、英佛の懲慝二、露國就中西伯利の形勢三、軍閥の野心四、米國の出兵勸誘等である。英佛兩國が、極力我國の出兵を懲慝したのは、對獨戦の不利な形勢を轉換したいと焦慮した結果である。故に英佛は其以前に於て、直接歐洲戰場に對する日本軍の遠征をも希望して已まなかつた。殊に露帝國の解體後は、其希望が一層熱烈となつた。併し追の軍閥も、歐洲戰場への直接出兵には二の脚を踏んで耳を傾けなかつた。一方英佛兩國も當時に於ける船腹の不足や、輸送に多大の時目を要するに鑑みて、歐洲戰場へ日本軍を引出すことは斷念して居たらしい。併し苦しい時

の神頼みで、何とかして餘力ある日本軍の援助を得たいと云ふ念を絶たず、窮餘の一策として案出したのが、西伯利出兵の嚮導である。即ち英佛の眞意は先づ日本軍を西伯利に出動せしめ、當時西伯利に擡頭し始めた反過激派軍との協力を促し、逐次西に進んで烏拉爾西方地帯に到着したら、其處に對獨新戦線を形成せしめ、之に依つて獨軍の勢力を東方に牽制したいと企圖したのである。露國の形勢勞農露國の眞相は現在でも明瞭でないが、當時は尙更曖昧であつて、實は過激派の眞相さへ窺知し得なかつたのである。従つて我政府及軍閥はレニン政府の基礎を漫然薄弱なものとなし、其混亂状態を放任して顧みなかつたならば、露國活殺の利權は獨逸の掌中に歸し、聽て獨禍は西伯利一帯に東漸して來るものと考へたのである。尤も當時の歐露が獨逸對聯合國の外交戦の渦中に置かれたのは事實である。即ち獨逸はウクライナを援けて新政府を樹立せしめ、又駐露大使ミルパツハをして、南部高架索の分離に斡旋させ、遂に其獨立を聲明させた。之に對し英米佛三國は、ムルマン鐵道が冬季露國に對する唯一の連絡線たるを認め、之を聯合國の勢力範圍に置く必要から、反過激派を標榜せるムルマン地方議會と握手し協力して、同地方に侵入する獨逸勢力の驅逐を準備し、約二萬に近い兵力を以て干涉に着手して居つたのである。翻へつて

西伯利の形勢を見ると、武力を擁して過激派に對抗した居たものには、浦鹽占領後再び北進を開始したチエック軍先着隊、オムスク附近からサマラ附近の西伯利鐵道沿線で過激派軍の掃蕩に全力を傾注して居るチエック軍主力、サマラ附近で反過激派政府を組織し、叛旗を翻へしたドウトフ將軍の指揮する哥薩克及我軍閥が標を引いて滿洲里附近に出沒せしめたセミヨノフ軍等であつた。更に極東當時の政情は如何かと云ふに、浦鹽にはデルベルを中心とする西伯利政府、ニコリスク西方露支國境に近いグロデコオには、ホルワットを中堅とする極東政府があつて對峙の姿を爲し、其勢力は伯仲の間にあつた、併し浦鹽の列國領事團は其孰れをも承認せず形勢の觀望に餘念がなかつた。

斯かる形勢を看て取つた軍閥は若し此際、我國が兵力干渉を加へて反過激派政府及び政府軍に援助を與へたならば、獨逸勢力の東漸を阻止し得るは勿論、彼等の夢想せる期待を極東西伯利に實現し得べしと過信し、出兵宣傳に全力を注いだのである。

軍閥の野望が出兵の一大動因と成つたのは毫も疑ひないのだが、軍閥の野望は何所迄も軍閥の野望でつて、大多數國民の與り知る所でない、由來軍閥が偏狹なる愛國心を振翳して外交に容喙

し、動もすれば二重外交の弊を馴致して國策を亂調子に陥れ、結局國家の不利益を惹起するのは彼等の常套的妄動である。軍閥が時代の推移と没交渉なのは今更言ふ迄もないが、彼等の頭腦は餘りに簡單であり、彼等の考へは驚く程一本調子である。彼等が出兵を熱望して已まなかつたのも畢竟西伯利を火事場と心得た點に出發し、又利害の密接な現今の國際關係を無視したのに基因して居る。忌憚なく言へば、彼等は世界に唯日本と露國とが相對峙して居るかの如き考へを以て一切の事件が單に對手國間の交渉だけで、意のままに解決の着くものと鶻呑にして掛つたのである。其所で彼等は、外英佛兩國の慾望を奇貨として之に合槌を打ち、内、出兵反對者を非國民呼ばりし乍ら、英佛に對する關係、國防自衛の必要とを力説し、極力出兵熱を煽つたが、國內の案外冷靜なのを見て、更に獨禍東漸及び過激思想侵入のプロバガンダを試みた。即ち哈爾濱を中心として偽電虚報を連發し、現狀に放任せば過激派及獨塊俘虜は提携して遠からず北滿及び朝鮮國境に迫るであらうと傳へ、一方セミヨノフを傀儡として、滿洲里附近の危機を過大に流布し、我居留民の生命財産は既に過激派及獨塊俘虜の手に委せられたやうに吹聴したのである。加之別にホルワット政府に對しても物質的援助を與へて、有産階級露民を藥籠中の物とし、我國の出兵は一

般露人の希望であるから、此際出兵せば西伯利の露國人は箠食盡瘡して迎へるであらうと吹立てた。併し國民も容易に其手に乗らず、政府も亦米國の態度に懸念して出兵に同意しなかつた。其處で軍閥が最後の智慧を絞つた方策が斯うだ。

我國は大戦参加以來何れ程の貢獻を爲したか、青島を攻陥し東洋及南洋の海上に於て對獨作戰に参加しては居るが、之を英佛伊諸國の努力に比すれば九牛の一毛に過ぎぬ。是れでは我國の代表者が將來平和會議に參列し得るや否やさへ疑問であつて、幸に參列し得たとするも恐らく發言權を與へられまい。果して然らば發言權を確保する手段としても、此際英佛の慾望に従ひ斷然出兵するのが得策ではないか。

若し我國が英佛の希望を容れ、遠く烏拉爾を越えて西進し、反過激派及びチェク軍と協力して、對獨東部戰線を復活する覺悟で兵を動かすならば、誠に御託宣の通りだが、極東三州に腰を据ゑて其眞意を疑はれるやうな勝手な出兵を前提としては、列國の非難を買ふ資料には供せられども、平和會議の發言權に影響あるべき筈はなかつたのである。然るに幸か不幸か此意見には外務省内にも共鳴者があり、故本野子の如きは其一人であつた。當時軍閥が何故にサ迄出兵を翹望

したかに就ては、勿論隠れた事實がある。軍閥は西伯利問題の起つた當初から、早晚出兵するものと腹を決め、セミヨノフの代表者が上海へ武器の購入運動に來たころから、金箔付きの支那浪人、中島某私設公使と驅はれた西原某を始めとし、多數の滿洲ゴロに尠からぬ運動費を與へた許りでなく、セミヨノフの軍隊編成に對し、無鐵砲な援助を與へた爲に、機密費などでは追付かず豫算に大穴を開けた結果、是非共出兵を斷行し臨時軍事費で補填しない限り、漏縫のしやうがないと噂されたのが其れだ。斯く軍閥の放つた宣傳は意外の功を奏し、外務省との意見も相當に接近し政府の方針も亦略確立したが、唯米國の意嚮一つが残る問題となつた。

是に於てか、政府は米國政府に對し出兵に對する其意嚮を徴した。然るに米國は何等回答を與へぬのみか、非公式にも贊否の意を明かにしなかつた。其所で政府は米國の諒解なしに行動を開始するのは累を後日に貽す虞れあるに鑑み、暫く形勢の推移を待つことになつた。然るに浦鹽に於けるチェック軍の蹶起は俄然極東の形勢を一變し、チェ軍救援の叫びが列國の間に起り、大正七年晩春に至つて其聲は絶頂に達した。機を見るに敏な米國は七月八日、遂に我國に對しチェ軍救援を目的とする西伯利出兵を提議して來た。併し從來の經過に徴すると米國の新提議は、我國

に對する一種の條件付回答となつたのである。該提議は總兵力を二萬五千に制限し、而も英米佛伊日より共同に出兵しやうと云ふので、軍閥の腹案とは頗る距離があつたが、彼等は一度出兵したら其後は何うでもなると高を括り贊意を表した結果、爰に政府の態度も確定し、兎に角八月上旬から作戦が開始されたのだ。

二、派遣軍の行動

大正七年夏の出兵以來、派遣軍今日迄の行動は討伐實行期、コルチャツク全盛期、撤兵準備期の三に區分して觀測するのが便宜である。七年八月第十二師團が沿海州方面から北進を開始し、九月下旬第七師團と協力して黒龍鐵道全沿線を占領し、一先極東三州の過激派を四散せしめた迄の作戦經過は、と云ふと大袈裟で實は兎狩りに類したものだ。兎に角神速であつて非難すべき點はない。討伐の一段落後七年の冬から八年の春にかけて、政府は七萬三千四百名であつた出征軍を二萬五千六百名に激減した是れ豫備役軍人を復員して歸國させた結果であるが、其背後には奇怪な事實が潛んで居る。協定に三倍した兵力を出したから米國に對する申譯の爲かと云ふに然う